

箱 清 水 遺 跡
大 峯 遺 跡
大 清 水 遺 跡

1981・3

長野市教育委員会
長野市遺跡調査会

箱 清 水 遺 跡

——長野西高等学校校舎改築地点の調査報告——

序

404平方キロメートル余に及ぶ広大な面積の長野市内には、原始以来先人が残された埋蔵文化の遺跡が1,355の多くにのぼるといわれております。加えて、土地の利用度が高まり、各地で大型の土木事業が実施される最近では、この貴重な文化財の所在地点とも重なり、遺跡破壊の危機さえ招きかねない状況下にあります。市では、埋蔵文化財保護のため、極力現状保存の措置を進めていますが、公益上最低限度の緊急調査については、関係者のご協力を得、できる限りの調査を実施し、記録保存につとめているところです。

ここに「長野市の埋蔵文化財第11集」を公刊しますが、復元することのできない遺跡を永久に記録保存した報告書として、広く活用され、学術資料としての評価を高められることを強く望むものです。

この報告書に収めた調査の対象となつた遺跡は、信更町の大清水・大峯の二遺跡と箱清水の箱清水遺跡で、何れも、社会的な要請に基づく公共事業に伴う緊急調査をした遺跡です。

大清水遺跡は信更町信田にあり、圃場整備事業に先だち、昭和48年9月に発掘調査した绳文時代後期から晩期にかけての遺跡です。大峯遺跡は信更町田野口の信田小学校の敷地内の遺跡で、校舎の改築に伴い、昭和55年6月に発掘調査した平安時代の遺跡です。

箱清水遺跡は、箱清水県立長野西高校敷地内の遺跡で、校舎の改築に伴い、昭和55年7月に発掘調査したものです。この遺跡は、明治34年薛田鎌次郎氏により紹介され、弥生式土器研究の基礎となつた箱清水式土器を出土した地点に接した遺跡で、かつて出土したと伝えられる遺物が散逸している現在、調査の結果が期待されている遺跡です。

これらの遺跡は、それぞれ時代も違い、出土した遺物の質にも差はありますが、この報告書の作成にいたるまでの研究に当っては、過去の学術調査の成果を基礎にして、十分に多角的な考察を加えましたものです。これまでの間、泥と汗にまみれた発掘調査から、報告書の上梓まで、日夜につぐ努力を重ねられた調査会及び調査団ならびに地元関係者各位に心から感謝するとともに、この報告書が、歴史研究の基礎資料として一層認識されることを希求してやみません。

昭和56年3月

長野市教育委員会教育長 中村博二
長野市遺跡調査会長

例　　言

- 1 本書は昭和55年度において長野県長野西高等学校長と長野市遺跡調査会長との契約に基づく、長野県長野西高等学校々舎改築に伴う緊急発掘調査報告書である。
- 2 本書は調査で得た結果を報告するとともに弥生時代研究における箱清水遺跡の位置を認識するべく本遺跡の研究史につき特に1章を設けた。
- 3 調査実施に際し、現在の南校舎の主軸にそった線をアルファベットで、これに対する南北にアラビア数字をもって $2\text{m} \times 2\text{m}$ のグリッドを設定した。
- 4 遺物の実測・遺構等の整図は直井雅尚・竹内稔が行い、土器の洗浄・注記・拓影等は調査員全員があたった。
- 5 写真撮影については、分担により竹内稔が主として行ったが、調査員が必要に応じて援助した。
- 6 本書を刊行するにあたり、各章・節・目の執筆は文末に明記することにより、それぞれ文責を明らかにした。
- 7 本書の編集は調査員各位の協力のもとに、そして印刷関係業務合せて長野市教育委員会が担当した。
- 8 遺物や関係図面・諸記録は、長野市教育委員会が保管している。

目 次

例 言

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 発掘調査の経過	1
第2節 調査日誌	1
第3節 調査会(団)の編成	4
第2章 遺跡周辺の環境	6
第3章 遺構と遺物	7
第1節 調査地と層序	7
第2節 本調査出土遺物	9
第3節 (伝)箱清水遺跡出土遺物	14
第4章 箱清水遺跡の意義	16

挿 図 目 次

第1図 学校敷地及び調査地	2
第2図 グリット配置図	3
第3図 箱清水遺跡とその周辺	5
第4図 Bライン・4ライン・B-9グリット層序図	8
第5図 B-8・9グリットのピット	9
第6図 本調査出土土器実測図	10
第7図 本調査出土縄文時代土器拓影	11
第8図 本調査出土弥生時代土器拓影	12
第9図 本調査出土石器・鉄器実測図	13
第10図 (伝)箱清水遺跡出土土器実測図	14
第11図 (伝)箱清水遺跡出土土器拓影	15
第12図 藤田・玉置論文掲図土器	17
第13図 藤森論文掲図土器	23

図 版 目 次

第1図版 遺跡遠景・南校舎正面
第2図版 調査地近景・調査
第3図版 土層序
第4図版 渡辺敏初代校長・学校敷地造成

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経過

長野県長野西高等学校の校舎等が全面改築されることとなり、その改築計画が県教育委員会文化課を通じ、当長野市教育委員会にもたらされた。

これに対応して、調査期間と調査団の編成について検討するところとなったが、年度当初で計画推進の見通しが立てられず、特に調査の中心となる調査員の確保は時期的に無理であった。しかしながら、本遺跡は弥生文化研究史上に重要な位置を占める遺跡なので、その保護・顕彰にはつとめねばならぬとする義務感が勝り、万障繩り合わせて調査を実施すべく計画をかためた。幸いに7月に入り信州大学学生の参加見通しがついたので、7月7日から9日間の予定で調査を実施することにした。尚この調査は、校舎等の建築が4年度に亘るので、今回の調査結果をふまえ、56年度以降の箱清水遺跡内における開発に対応しようとする意味が含まれている。

（吉池弘忠）

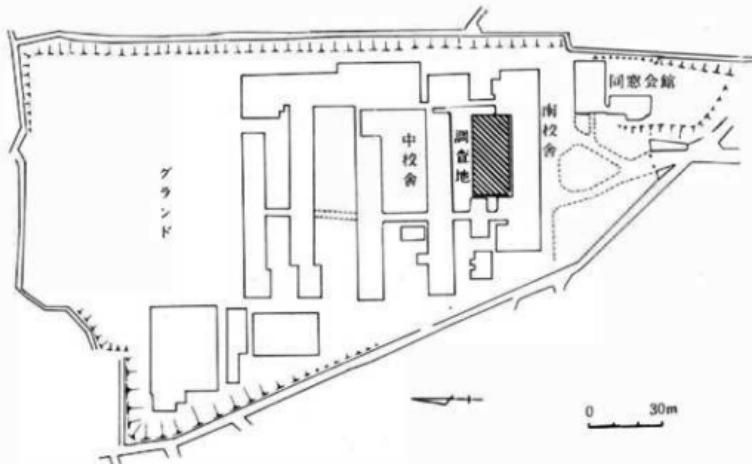
第2節 調査日誌

昭和55年7月5日（雨） 調査機器材を調査地に搬入する。遺構面は過去の記録から意外と浅く、数10cm～1mの範囲と推定されたため、自動運搬機及び付属品を依頼する等準備におわれる。

7月7日（曇） 桐原調査団長のもとに信大学生を調査員及び調査補助員に委嘱し結団式を行うも、降雨著しくなり、学校の好意により開放していただいた宿直室（調査団本部）に避難する。ここで、調査団の仕事分担を決めるとともに、雨をついてグリットの設置を行う。竹内は校舎二階より調査地の近景写真をとり、矢口は雨の合間にみて、往生寺の東地点より遠景を撮影する。

7月8日（曇） 1グリット2名で千鳥形に調査を進めるも、表土下にかたい礫層があり、これをぶち抜くと焼土層が検出された。明治年間の学校敷地造成の痕跡を、そして昭和14年の火災により南側校舎が消滅したことが、ここに歴然として確認できだし、A-9グリットではその礫石の一部を検出した。

7月9日（曇） 昨日検出した火災残土調査の進行を一時保留し、次々に調査予定のグリットを掘る。そして各グリットともに確実に焼土層が認められ、現表土からの深さは、東側（深田町）に至るにしたがい徐々に高さを増し、それに反比例するように焼土層が減じていた。これ故に調査は、昭和14年の焼土層下の問題に移された。B-4グリットにはない模様である。



第1図 学校舎敷置及び調査地

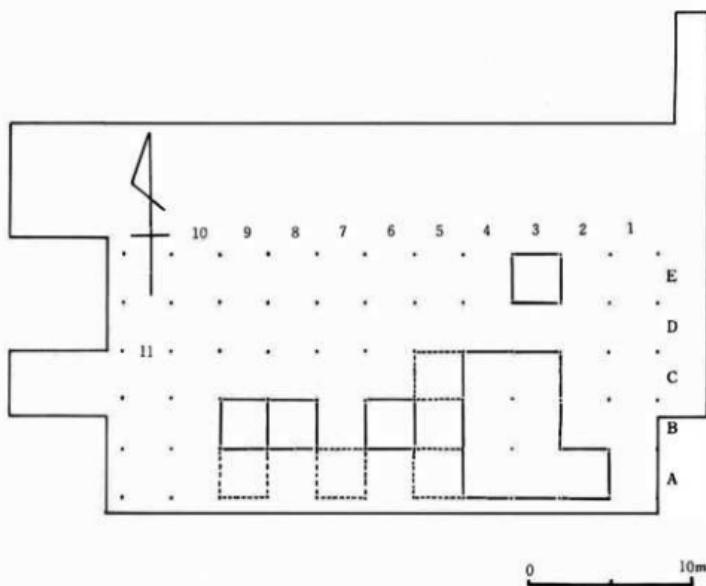
昨夜の雨で自動運搬器も車輪が空転する。

9月10日（壱） ほぼ昨日の調査を継承する。また雨がパラつき、休み休みの調査であり、水を含んだ砂利層の除去は遅々たるものであった。それ故、重機を搬入してこれらの除去をとも考えたのであるが、予算と搬入口及び学校授業等を鑑み、住居址等の生活遺構が確認された際再考することにし、現在の調査方法でいくことにした。蒸し暑く調査員に疲労の色が漂う。

7月11日（壱） 長野西高校では、明日からはじまる文化祭の準備に忙しい。そして調査も、昨日からもしかしたらと思い調査を進めていたA-4グリットから明確な土層の変化が確認され、活気付く。東・北のとりまくグリットの拡張に全力を注ぐ。

7月12日（壱・雨） 昨日確認した遺構を中心にグリットの拡張を進める。遺構は直線的なプランであったのに南側では、東に張り出してきた。このため重複遺構の可能性がでてきたため更に南側のグリットも掘る。今日から文化祭、午後から一般開放とのことで、父兄・他の学生徒らが不思議そうに見るものもあり、調査への関心が少ないとと思っていたが、生徒会で箱清水遺跡発掘中の看板を出してくれたし、意外に興味あることを知った。

7月13日（晴） 文化祭の本番を迎える、活気があちらこちらでうかがえる。ちなみに私達と関係ある地歴班では、吉古墳群等の資料で群集墳をテーマに研究発表していた。さて調査は、周辺グリットを拡張しつつあるものの、遺構プランを追求する中で、疑問が湧いてきた。というのは落ち込みと考えていた黒土層の他、レベル上部で黄褐色礫層からも遺物が出土している



第2図 グリット配置図

ことである。これはどうしたことであろうか。

7月14日（晴・曇） 落ち込みであろう黒色土を調査する。細かい土器片が出土し、またその壁は傾斜を有し、その深さを増していく。この点疑問をもったもの、今日より再開した西側のグリットの深掘りにより判明してきた。

7月15日（晴） 拡張区の調査を進める一方土層図を作成する。学校長・事務長そして理科研究室の先生の好意により、保科五無斎先生の収集された資料、そして箱清水遺跡を世に出した初代校長渡辺敏氏の写真をみせてもらった。また、事務長が『学校誌』を持参されたので、それを調査員間で廻し読みをした。私もこの辺はやはり「オヤマ」と思って見ていくにつれ、敷地造成の写真にであった。³これだ、遺跡を覆った土砂は⁴と思ひ、この資料原本を写真におきめる。そしてこの学校付近の出土資料を記録する。

7月16日（曇） 学校造成時の埋め立ては理解できたものの、どのようにということで西側グリットの調査を再開する。深さは2mに及ぶ。黒色土層（包含層）より、埴形土器を得る。これは本調査で唯一の完形に近いものである。このとおり箱清水遺跡は、まだまだ生き続けている点うれしかった。

7月17日（昼） 昨日の調査で包含層を確認したものの遺構の痕跡はなかった。そのため堆積土確認のためB-8とB-9グリットの調査を進め、包含層下に柱穴らしき痕跡を確認する。

7月18日（昼・雨） 遺跡復元のため土層断面図をとる。包含層に湧水をみるも調査員等に頑張ってもらう。本日で当初の目的を遂行できたと考えたので、調査の終了を宣した。土層図等の補足調査を行う。

7月19日 器材の撤収を行う。

(矢口忠良)

第3節 調査会(団)の編成

1 調査会

会長	中村博二	長野市教育委員会教育長
委員	米山一政	長野市文化財保護審議会会长
◆	桐原 健	◆ 委員・調査団長
◆	千野和徳	長野市教育委員会教育管理部長
◆	関川千代丸	◆ 社会教育課嘱託
◆	矢口忠良	◆ ◆ 主事
監事	田中穂積	◆ 庶務課長

2 調査団

調査団長	桐原 健	日本考古学協会員・長野県史編纂委員
調査主任	矢口忠良	◆ ◆ 市教委主事
調査員	竹内 稔	長野県考古学会員・信州大学学生
	石上周藏	◆ ◆ ◆
	直井雅尚	◆ ◆ ◆
	小林秀行	◆ ◆ ◆
	青木和明	◆ ◆ ◆ 明治大学学生
調査補助員	宮坂 享 藤原伸一郎 山田清二 西沢敦子	(以上信州大学学生)

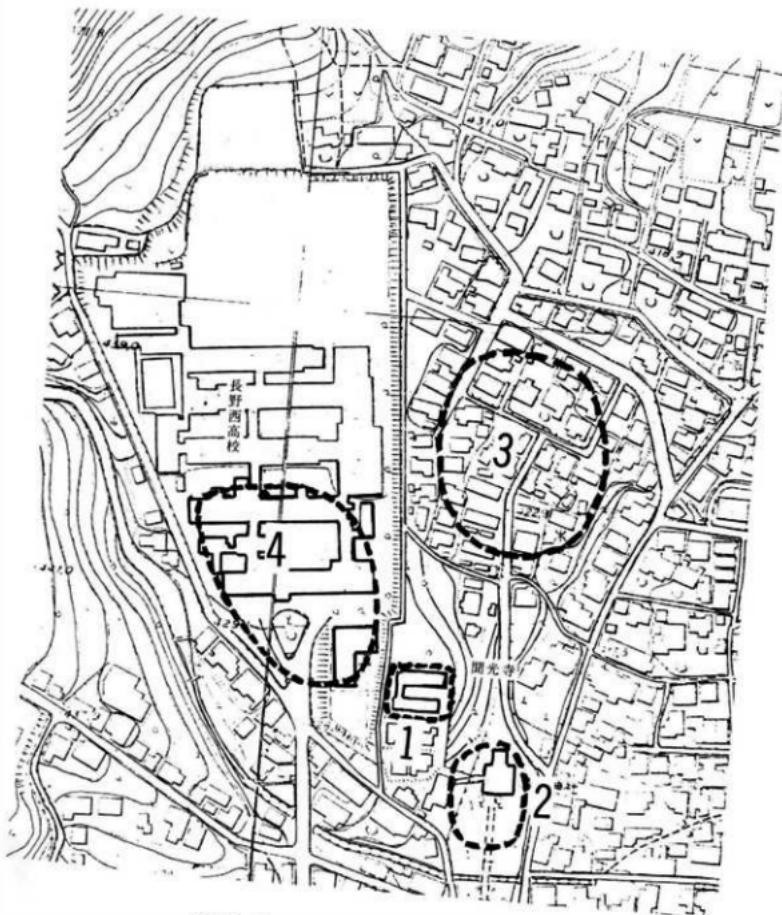
3 事務局

事務局長	関口 仁	(社会教育課長)
担当職員	吉池弘忠	(◆ 課長補佐)
	根津伸夫	(◆ ◆ 主事)
	矢口忠良	(◆ ◆)

この調査は信州大学学生諸君の全面的な協力を、長野西高校には調査期間中種々ご配意をいただきいた。

文末ではあるが記して感謝申し上げたい。

(根津伸夫)



第3図 箱清水遺跡とその周辺 (1. 同窓会館遺跡
2. 湯福神社遺跡 3. 塔の森遺跡 4. 箱清水遺跡)

第2章 遺跡周辺の環境

長野市街の北限を画する山塊のうち、大峰山と葛山との間にはしぐれ沢があり、それが湯川となって善光寺裏手に至っている。この川は湯福神社の処で向きを東南方向から東に変えているが、その湯福神社の処まで大峰山からの一支脈である小丸山公園の尾根が岬状に延びてきている。小丸山公園での標高は 482、湯福神社で 424、その間の距離が 450 メートルだから相当に勾配のきつい支脈に見えるが、本当に急傾斜なのは小丸山から南 17.0 メートル間だけで、あとは緩やかな台地である。台地基部の幅は 150 メートルで、そこから南が長野西高校の敷地となっている。学校敷地になる以前、この台地中央には北西方向に登っている小径があり、この道を境にして高岡道南・高岡道北と呼ばれていた。弥生式土器研究の黎明期に発見され、学史上貴重な意義を有している箱清水遺跡はこの台地上に位置している。遺跡の発見は明治34 年で、当時の報告書には遺跡の景観が記されている。これについては後章で改めて触みたいが、問題は長野高等女学校（現長野西高校）の敷地造成工事に際して遺構・遺物の発見された範囲で、南に延びる丘陵を削っての整地であるから、敷地北半分の運動場は除外してよく、北校舎・中校舎・南校舎の 3 棟敷地とその前庭が該当するものと考えられる。大正14年に刊行された『長野市史』には高等女学校敷地ならしの際に出土したという縄文土器破片の写真が掲載されている。そして現在、長野西高校の資料室には達筆で校門前と墨書きされた縄文中期後半の土器片と弥生後期土器片数点が保管されている。このため、昭和41年の「長野県埋蔵文化財包蔵地名表」には箱清水遺跡の他に長野西高校門前遺跡が記載されている。これらのことから、遺跡は校舎敷地の南半部と予想されていた。

なお、この遺跡一集落の向きについて、南方は湯福川の谷が横たわっているのに加えて水田地帯までは相当の距離があるが、台地東側には小丸山台地の東方から流れてくる沢水と深田町の沖積地がある。この地に近世箱清水村の農民は20ヘクタール前後の水田を経営していたが、おそらく、弥生時代の彼らも同様な営みを行っていたに違いない。

箱清水遺跡周辺の状態だが、台地東斜面やそれに接する地点には幾つかの遺跡の存在が知られている。まず、湯福神社境内だがここでは土師器破片が拾得されており、木村幾太郎氏によると直刀1 口も出土している由である。次に講堂の東は「塔の窓」という小字で、新らしい住宅が密集していて畠地など全く見られないが、かつては粘板岩製の打製石斧、大型蛤刃石斧破片、弥生後期土器片、糸切り痕のある土師器、釉のかかった土器片が採集されている。

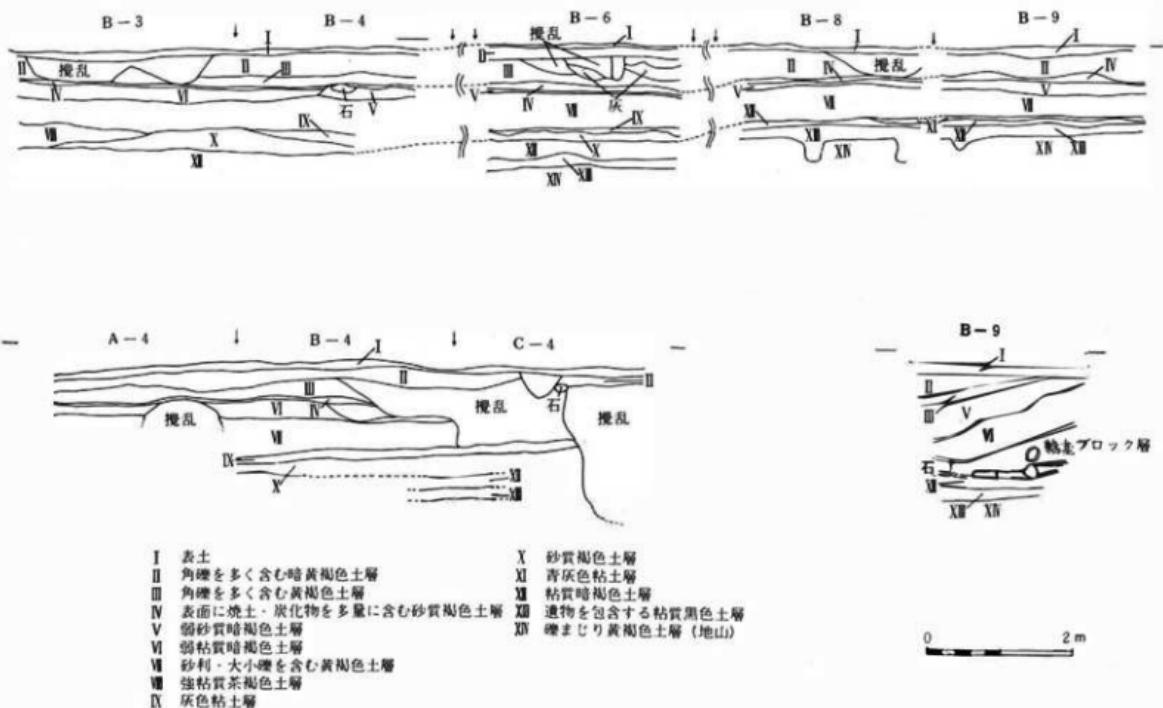
（桐原 健）

第3章 遺構と遺物

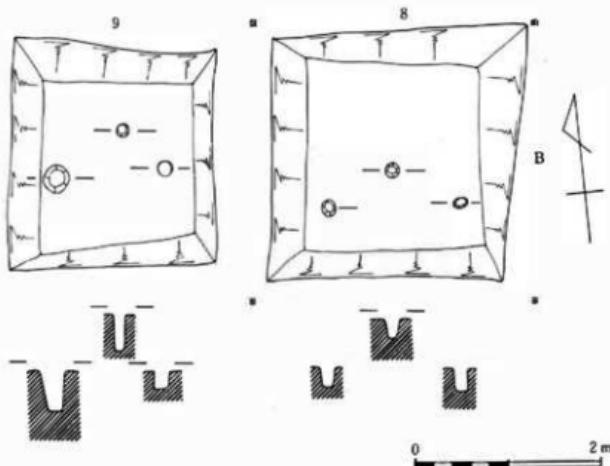
第1節 調査地と層序

今回の調査では、包含層の削平、残存状態をつかむことを主な目的として、調査地の南半分を中心にグリットを設定して掘り下げた。当初、包含層はすでに削平されていて表土下50cm内外で地山へ達するとみていたのだが、実際には各グリットとも、学校敷地造成の際の埋め立てた土砂が2m以上にわたっており、さらにその下部に黒色粘質の遺物包含層が存在した。このため作業手順の狂いや、下水溝からの出水という思わぬ障害とあいまって、一部のグリットでその最下部にある包含層を確認できたにすぎなかった。遺構らしいものは、B-8・9グリットで検出されたピット群のみである。このため本節では、今回の調査で確認された土層序を中心説明を加えたい。

第4図の上段はB列グリットの南壁の土層図である。これは14層に分類されているが基本的には3つに分けられる。すなわちI～Ⅲ層、IV～V層、VI～XII層である。このことは、明治34年の学校敷地造成の際の埋め立てと、昭和14年の火災後の整地によるものである。図示した土層図のうちE-3グリットを除く全部のグリットのⅢ層とIV層の間には多量の焼土、炭化物がみとめられ、これが昭和14年の火災を示すものであることは充分納得できる。また、各グリットにより多少差があるが、地表下1～2.5m位のところからそれまでのしまりの悪く礫を多量に含んだ黄・茶褐色土層からかわって、黒色粘質でよくしまった層がありこれを本来の箱清水遺跡の遺物包含層と考えた。便宜上、I～Ⅲ層を表層、IV～X層を上層、VI～XII層を下層としたが、遺物の出土はほとんどが上層下部及び下層からである。表層はいづれもしまりが悪く大小の礫を含んで、時にコンクリート塊が顔を出した。上層も非常にしまりが悪く所々に陶器片や瓦片が大量に埋められていたり、径10cm位の石ばかりの層があつたりして、層自体が攪乱の産物といった感じであった。ただしその中に所々黒色土が混りわずかばかりの遺物の出土もみたもののそのほとんどが磨滅したものであった。下層面において確認したのはB-6・8・9グリットのみであるが、全体に黒色、粘質で炭化物を混じていた。この下層の下部には黄褐色礫まじり層がありこれが基盤（地山）と考えられる。この下層で特記すべきことはB-8・9グリットでピット群とでも云うべき遺構らしきものが地山へ掘り込むかたちで検出されたことである（第5図）。ピット数は両グリットあわせて6ヶで、そのほとんどが径10～15cmと小形のものである。B-9グリットのピットより赤色塗彩された弥生式の高環片（第6図1）と鉄器（第9図3）が出土し、他も内部に炭化物を多量に残している。またB-8グリットではこのピット群の掘り込み面より5cm程ういて埴形土器（第6図6）が出土している。このピットは規格性ある故に、住居址あるいはそれに近似する用途の柱穴と考えられる。



第4図 Bライン(上)・4ライン(左下)・B-9グリット(右下)層序図



第5図 B-8・9 グリットのピット

また土層の問題に触れる。遺物包含層たる埴層の上部(Ⅲ層)にB-6グリット西側に青灰色粘土層があることは注意されようし、更に調査地東側に遺物包含層が認められない。即ちこの遺跡の地形は西南傾斜にあって、その傾斜度は比較的著しいため、学校敷地造成にあたり東側は削平されているとの結論を得たのと、西側には後世の沼化した下部に箱清水式期本来の姿が眠っている可能性があるということである。この点残存遺跡北限とともに、しぐれ沢との関係において注目される問題を含んでいるように思う。

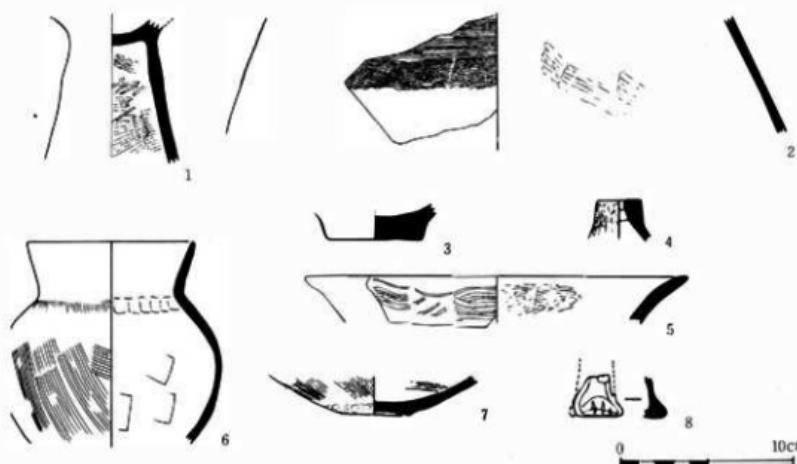
(直井雅尚)

第2節 本調査出土遺物

1 土器 (第6~8図)

今回の調査で出土した土器は総数520点余り、そのうちのほとんどが小破片であり、遺構に伴なうと考えられるものも極くわずかであった。できる限り図化に努めたが、文様をあまり持たない土師器や須恵器の小片は拓影にすらできなかったものが多い。

第6図1はB-9グリット下層のピット内より出土した高壠形土器の脚部である。脚部の外面及び壠部の内外面が赤色塗彩されよく磨かれている。2もB-9グリット下層から出土した壠形土器の体部破片である。残存部から頭部下に12本歯の櫛状工具による横走する直線文とこまかい波状文が描かれ、その下部は赤色塗彩が施され、よく地肌が研磨されている。3はA-C-3・4グリット拡張区上層から出土した壠形土器の底部である。底面を除く外面に赤色塗彩の痕跡が残っている。4もA-C-3・4グリット拡張区上層より出土した壠形土器の頂部



第6図 本調査出土土器実測図

である。外面はヘラによるケズリが顯著で、上面は面取りされて円孔を有している。5はB-8グリット下層から得られた變形土器の口縁部片である。器が荒れていて明瞭ではないが大きく外開する口縁部に櫛齒状工具を使って描いたゆるい波状文がみられる。6はB-8グリット下層から出土した土師器増形土器である。胴部を半分程欠損しているが今回の中でもっとも完存している土器であった。器面が非常に荒れているが、頸部及び体部中央にハケメが観察できる。7はやはりB-8グリット下層出土の變形土器の底部付近破片である。薄手で底部は上げ底になり、縱方向のハケメをもっている。8はA-C-3・4グリット拡張区出土の獸脚と

出土土器一覧表（第6図）

遺物 番号	基種 名	法 量 寸径 底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎 土	燒成	色 調		出土状態	備 考
							外 面	内 面		
1	高杯		脚部残存部形状	外面 ヘラシガキ・赤色塗彩 内面 ヨコハケ	良 適	良好	赤 色	褐 色	B-8・P1	弥生式土器
2	壺			外面 番縫直線文・波状文・赤色塗彩 内面 ハケによるナデ	*	*	*	赤褐色	B-9 下層	*
3	*	5.5		外面 ヘラナデ・赤色塗彩	小 石	*	*	茶褐色	A-C-3-4 上層	*
4	壺	2.6	穿孔・頸部平ら	ヘラケズリ・ナデ	*	*	黄褐色	黄褐色	A-C-3-4 上層	*
5	甌	21.8	口縁外反 器底荒れる	外面 番縫直線文 内面 ヘラナデ	小石・石英	不良	茶褐色	茶褐色	B-8 下層	*
6	甌	9.6	口縫直線的に外開 体部球形・器底荒れる 上げ底 薄手	内面 ハケメ・ヨコナデ	小 砂	*	赤褐色	赤褐色	*	土師器
7	甌	4.0	つま先に削み 内部空洞	ハケメ・ヘラケズリ・ナデ	小砂石	良好	黑褐色	淡褐色	*	*
8	瓶			ヘラナデ・ナデ	良 適	*	茶褐色	茶褐色	A-3-3-4 上層	*



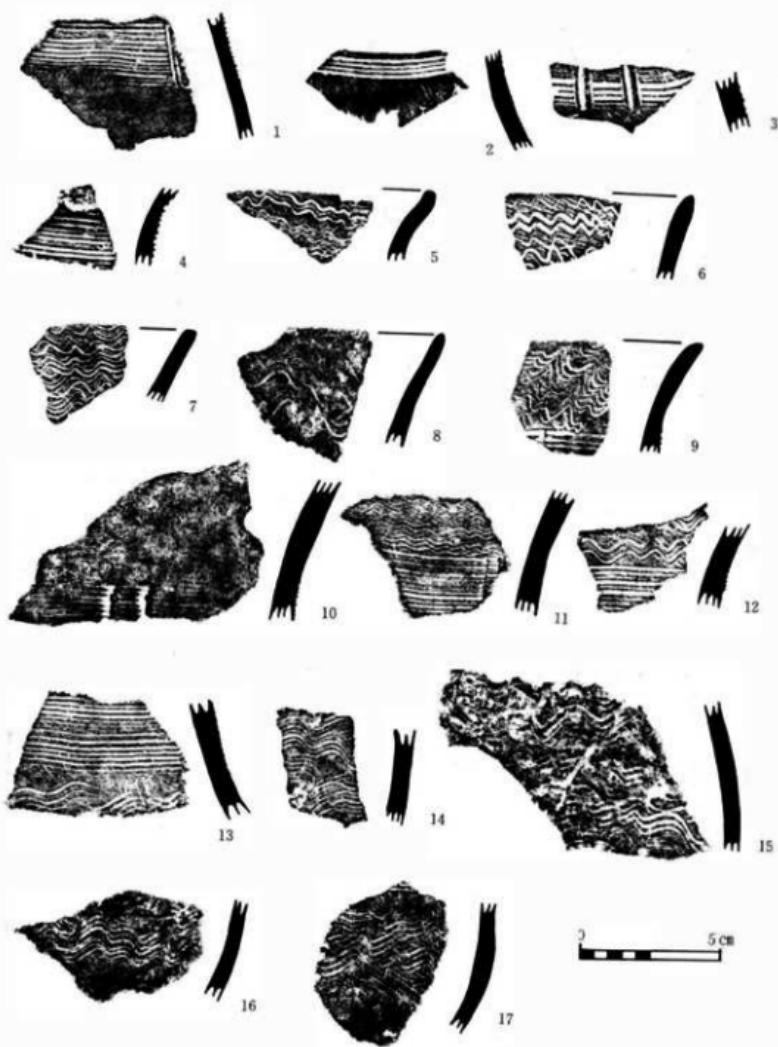
第7図 本調査出土縄文時代土器拓影

思われる土器片である。つま先の部分に刻みがあり、形状からもほぼそれに間違いないと思われるが、内部が空洞になっている。意外と新しいものかもしれない。

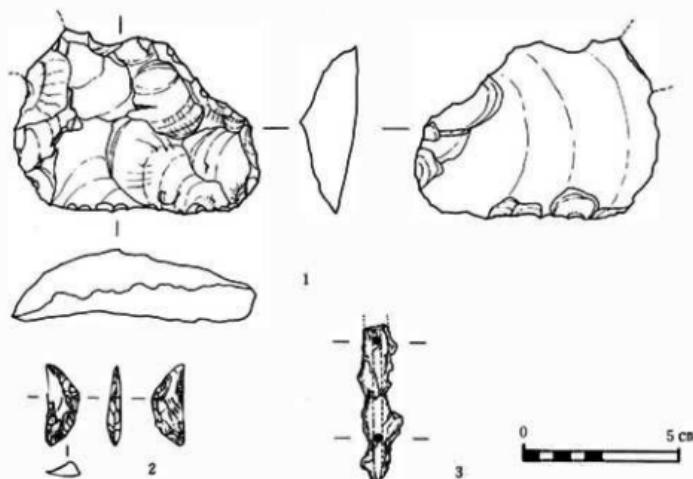
その他土器の拓影については以下一覧表にして記する。

拓影土器一覧表（第7・8図）

図番号	番号	出土グリッド	時期	器種・部位	文様・その他の特徴	備考
7	1	A-C-3~4	縄文	深鉢・口縁部	横円押型文	
*	2	D-3	*	・体部	*	器面荒れる
*	3	A-C-3~4	*	・・・・タ	タ・複合鋸歯文	*
*	4	*	*	・・・タ	山形押型文	スス付着
*	5	*	*	・・・下半	無筋R縄文	
*	6	B-9上解	*	・・・・	L R 単筋縄文	
*	7	B-9下解	*	・・・・	無筋R縄文	
*	8	A-3	*	・・・・	R L 単筋縄文の縮転がし	
*	9	C-3	*	・・・・	撫赤文(?)	器面荒れる
8	1	B-9上解	弥生	壺・颈部	T字状文・文様帶を除く外面赤色塗彩	
*	2	A-C-3~4	*	・・・・	*・文様帶を除く内外面赤色塗彩	
*	3	*	*	・・・・	*・文様帶を除く外面赤色塗彩	
*	4	B-8下解	*	・・・タ	横走平行線文・*	



第8図 本調査出土弥生時代土器拓影



第9図 本調査出土石器・鉄器実測図

8	5	A-C-3~4	變	口縁部	櫛描波状文	
*	6	A-3	共生	+	・	刷毛調整の上に櫛描波状文
*	7	A-C-3~4	+	タ	・	櫛描波状文
*	8	C-3	+	タ	・	+
*	9	A-C-3~4	+	タ	・	・擦状文
*	10	C-3	+	タ	・	頭部
*	11	B-4	+	タ	・	+
*	12	B-3	+	タ	・	・
*	13	A-2	+	タ	・	・脚部
*	14	C-3	タ	タ	・	・
*	15	C-4	+	タ	・	・
*	16	C-3	+	タ	・	・
*	17	*	+	タ	・	・

(直井雅尚)

2 石器及びその他の遺物（第9図）

本調査において出土した石器は2点である。第9図1はA-9グリット上層より出土したつまみ部を欠損する横型石匙である。刃は片刃で断面図の刃部角48°、最大厚は1.8cmを測る。石材の関係からか剥離・調整は荒い。平面図にみる刃線は直線的であるが、正面からみると表裏より交互に剥離を与えられ、刃線は波状を呈する。石質は流紋岩である。2は平面形が三日月

状を呈する用途不明の石器である。A～C～3・4 グリットにおける拡張時に上部の擾乱層中より発見された。三日月形の弦に相当する部分が刀部とも考えられ、弧に当たる部分は剝離の縁をつぶす調整が加えられている。最大長 2.6cm、重量 1.3g で、岩質は頁岩である。

鉄製品（第9図3）本調査においてB～9 グリットのピット内より棒状の鉄製品が出土している。錆が厚く覆うため本来の形状は詳かにしえないが、欠損部より窓うと断面は円に近い方形を呈し、一边 3mm である。現在長は 5cm であるが、一部欠損するため全長は不明である。

この他に、赤色顔料と関係を有すると推定される遺物が 2 点出土している。1 点は風化した安山岩様の石の一面にこびりつくような状態で検出したもので、赤褐色の微量な物質である。もう 1 点は泥岩の上に年輪を描くような状態で析出した赤褐色の物質である。いずれも指先にとってすりつぶすと赤褐色の色が残る。千曲川周辺地域の弥生中期以降の土器の中でも貯蔵・供獻形態の土器には赤色塗彩が顕著に認められる。この塗彩の原料もまた存在したと考えられるが、いまだその実態や供給方法は不明である。顔料についての管見では長野市塩崎小学校地点遺跡第2次調査において出土した高坏の坏底部に粒状に沈着していた例を知るのみである。その物質が何であるかは分析中で、詳細は別の機会に発表されることと思うが、ミベンガラ（酸化第二鉄）である可能性が強い。その供給方法はまた不明であるが、長野市松代町大室の農業技術大学園付近の露頭に、酸化第二鉄の鉱石が散見されることから、この付近からの採取も考えられる。今回発見された 2 点の赤褐色の物質も、塗彩の原料と関係づけて考える必要もあるよう。

（竹内 稔）

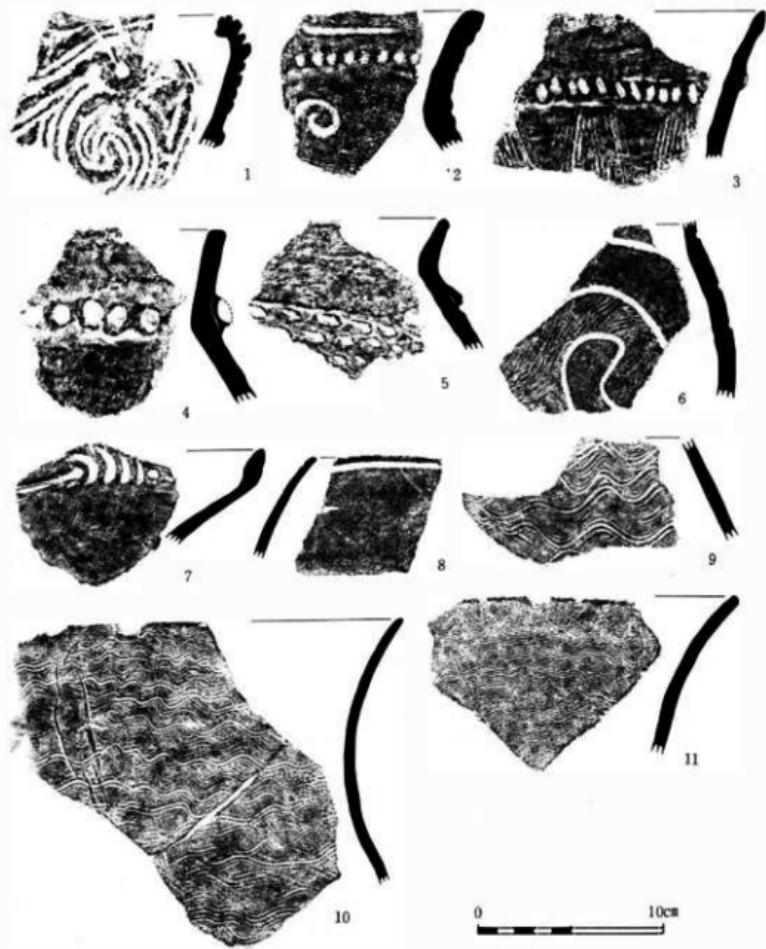
第3節 (伝)箱清水遺跡出土遺物

今回の調査の他に、所謂箱清水遺跡出土品と伝えられる遺物が、長野西高校に所蔵されている。それらをここに紹介する。

土器（第10・11図）第11図には縄文時代土器と弥生時代土器を提示した。縄文時代土器は第11図1 の中期中葉の土器から後期前葉の土器である。第10図においては弥生時代の蓋形土器と古墳時代初期に位置付くと思われる變形土器を提示した。



第10図 (伝)箱清水遺跡出土土器実測図



第11図 (伝)箱清水遺跡出土土器拓影

これらの遺物は箱清水遺跡が単純なる弥生時代遺跡でなく、平安時代にまで亘る複合遺跡であることを示している。むしろ土師器を出土する集落址ととらえられることが正しい遺跡のあり方と思う。それ故に弥生時代研究史の中での位置付をそのまま評価しながらも、この遺跡は、台地状湿地を求めた水稻栽培の一遺跡であることを再認識しても良いだろう。（直井雅尚）

第4章 箱清水遺跡の意義

日本考古学において、弥生文化の研究は東京本郷弥生町の向ヶ丘貝塚で口頭の欠けた蓋が発見された明治17年に遡る。それが報告されたのは明治22年4月の東洋学芸雑誌91号で、この時は単なる石器時代の土器として取りあつかわれている。その後、26、27年に同種土器の発見があって、縄文土器とは異なるらしいとされ、29年に薛田鎗次郎氏が「弥生式に就て」を人類学会雑誌122号に発表している。その後、29年には薛田論文をふくめて2編、30年に2編、31年に1編、33年2編といった状態で、資料の蓄積は甚だしく低調だった。そこへ34年に至り9番目の「箱清水遺跡報告」がだされ、ここに至って弥生式土器はようやく自らの位置を得た。森本六爾氏は「弥生式土器研究史」の中で、「明治30年代に入りますと、当時の仮称『弥生式土器』は西南方は南九州から、東北地方は陸奥にまで及んでいることが知られ、その発見国数も約30ヶ国に達する有様となつて参りました。殊に長野市箱清水にある高等女学校の敷地から、一遺跡にして数百点の土器を出したという事実は一層この弥生式土器に議論の花を咲かせる結果となりました。」といふに箱清水遺跡の発見が弥生文化研究上重要なエポックであったかを述べている。

この最初の報文というのが明治34年10月20日の東京人類学会雑誌 187号、35年1月20日同誌190号に掲載された薛田鎗次郎氏の「長野市に於ける弥生式土器の発見」、及び37年2月20日同誌 215号掲載の玉置繁雄氏による「長野市で見た弥生式土器」で、これによると、長野高等女学校々長渡辺敏氏が東京帝大の坪井正五郎博士に調査依頼を行い、博士は34年9月はじめに来長して遺跡視察後に講演を行っている。博士はこの遺跡が弥生遺跡だということで、当時同土器を追求していた薛田氏に再調査を命じ、薛田氏は9月19日に箱清水遺跡に臨んでいた。

「長野市に於ける弥生式土器の発見」—薛田鎗次郎—

(『東京人類学会雑誌』187・190号掲載)

長野縣長野市に今回多数の石器時代の土器が発見されたとのことで坪井先生が佐渡旅行の帰途御立寄になつたのであるが、其は彌生式土器の類品であったので、予に取調よとの仰であったから、去月18日東京を去つて長野へ向ふた。予は直に土地の熱心家なる高等女学校長渡辺敏氏を訪問して、氏の採集に係る總ての土器を一覧し、翌日は氏の案内で其発見地と云ふ字箱清水の高等女学校敷地へ行ったのである。此地は善光寺門前を左へ戸隠道をなだら上りに漸々2・3町登った所で、旭山、郷路、往生寺、大峯の諸山其西北を敵ひ、東南は廣茫たる平野で、即ち長野市の存在する所である。由來箱清水なる地勢は、前世期に於て非常なる大洪水でもあって形成せられたるかの如き水成岩質の丘陵であるから、彌



第12図（第1圖） 莘田・玉置論文掲図土器

生式の遺跡とも云ふ可き竪穴は東京に於ての如く區劃判然せず殆んど石器時代の包含層の如くである。現在露はれて居るのは少かに1ヶ所で、其も坪井先生の仰て残されたので此れは餘程大きく長さ5間程に深さ2尺ばかり矢張り圓形で最早中心と思はる、所は掘り取られたと見へて、予が發掘の時は少量の炭及び土器の小破片だけであった。其他竪穴と思ふ所も有ったが時日に制限があるので一先づ中止したが、從來発見された遺物に就て調べ得た結果を述べ様と思ふ。

土器の多くは破片であるから全形を認むべき物は實に少數である。然しこれを大凡に分類せば左の如くなる。

(臺付きのもの) 血形、コップ形、瓶形あり。

(椀形のもの) 平底、糸底あり。

(漏斗形のもの) 有孔と無孔とあり。

(深血形のもの) 平底、糸底、有孔、無孔とあり。

(瓶形のもの)

其他手掛ある茶椀形土器、石器及び焼ヶ麥、焼ヶ木等もあった。

(第1圖) (1)は竪5寸横巾廣き所で2寸8分左右の側(内側點線ある所)に切込みあり且つ中央には圓の如く1個の突き孔がある内外共に總朱塗りで之は大なる高杯の臺の破片であって切込は即ち祝部に能くある透しの類と思はれる中央の孔は未だ例がない實用とも考へ

られねば矢張り装飾の一つであろふ外線は其臺の形狀を示すのである(2)、(4)、(5)、(6)、及び(3)は臺の種類なり(6)、(3)を除く外は總て朱塗りである(5)は杯の着け際に圓の如く三段の高まりあり此れは未だ類品を見ない

(7)は高き凡1尺5寸杯の直徑1尺2寸其質堅く全体朱塗りで美麗なる光澤を有す此れは今回発見中の優品であるが若し1圓の全体が完備してあったならば恐く其右に出るであろふ(8)は高き凡四寸上部は欠損すれど其形狀は先づ點線を以て示すが如くならんか脣部には不規則なる波紋がある其色は帶褐黒で最も粗造なれば若し1個で発見したならば或は石器時代の土器の如く考へられる

(10)は高さ凡5寸口徑4寸なり頸部の周圍には横に長短の5線があつて其上下には(10)と同じく不規則なる波紋が畫かれてある東京近傍には多く此の類品を出す(但し飾りある物は少し)

(11)は高さ2寸口徑4寸5分深き皿形をなす内部は總て黒塗りなり

(12)は高さ4寸2分口徑2寸8分全体に波紋及頸部に横線ある事(12)と同じ

(13)は緑厚く肩部を著しく突き出て底部へ急に斜面をなす全体朱塗りにて底は上げ底なり

(14)は薄手にて最も巧なる製作なり而して底は糸底である

(15)は口徑1尺2寸總朱塗で口邊に近く圓の如く相對して2個の突き孔がある其質堅く全体は頗る大なる物であろふ

(16)は脣部より上を失へり故に全体を知る事は出來ないが現存部はすり鉢の如く上の欠け口に著しき角度あり廣き所で直徑凡2尺總朱塗りなり(16)の口部は或は之に附屬するかも知れないが中央部がないから不明である

(17)は高さ2寸5分、口徑凡5寸(17)の類品なれど緑部薄く肩より底へ漸々丸みを持つ底部には徑6分程の大孔がある

(18)は上部全く欠損す現形の高さ6寸8分頸部に横線あり又波紋ある事(18)、(19)の類なり

(19)は漏斗形のもの之に有孔及び無孔とあり口徑凡5～6寸

(20)は口徑凡3寸高さ1寸4分側面に6分程の手掛と思はる突起あり内外共に總朱塗りなり猪口の類にてもあるか

(19)は茶碗形のもの口徑4寸高さ2寸外部は朱塗りなり

(21)は最も薄手の製作にて全体に細かき刷目あり口徑4寸高さ2寸3分程

(22)は高さ1寸6分下部直徑3寸3分外部は朱塗りなり其形笠の如く内部は矢を以て示すが如く上下へ貫通してをる予は何れかに属する蓋の類と思ふなり

(23)は(22)の類品なり左れど内部は貫通せず朱塗りにて高さ2寸4分程なり

(24)、(25)は餘りの小破片で蓋の類なるや否た底部なるや判然しない只(24)は一つ(25)は五つの中央に小孔がある

今回発見中の主なる土器は先づこんな物である其他彌生式の特徴ある大瓶形の大破片も有ったが後は小破片で別段記する程の品もない今此等の土器を東京邊のと比較して見よとな

らば非常に精巧の者あり又劣等の者がある素より地方に依りて其製作を異にするのは當り前の事で石器時代に於ても亀ヶ岡式と云ふ様な者である殊に今回の調査は面白く未だ發見されない者が澤山ある。(1)、(2)、(5)、(7)、(10)、(22)、(25)、(23)、(13)、(20)、(14)、(18)、(16)、(20)、及其他石器の類である。就中(7)の如きは東京邊の彌生式の類とは全く思われないが去りとて又古墳からこんな朱塗の土器の出た例も聞かない又(4)、(18)が、予の云ふ如く或る器物の蓋であったならば人類学教室にあるジャヴァアボルネオ邊の焼き物に能く一致するのである。模様の類は餘り見受けない先づ(10)、(12)、(8)、(11)位の者だ又今回は有孔の者が割合に多く出た(1)、(9)、(23)、(12)、(14)、(16)、(20)の類で(1)は裝飾(9)は實用(12)は現今漏斗の如き用に供したものか(14)、(16)、(20)は急き出しの為めとでも云ふ可きか左れど(23)の孔に至ては更に其用を知るを得ない

總て今度の發見は小形の物が多い様であるが小形程欠けぬので大形の物も數多發見されて居る何れも破片で底部に依て漸く知る事を得るので其最大なる物は直徑4寸2分もある又最小なるは直徑1寸餘なり

次に彌生式の穴から數個の石器が發見されたのは今回が初めてである其形狀の異なりたる物4個に就て左に述べよ(24)は断面が3角形の石器で其角の3面が磨かれ(25)は下部が凹状に(26)は左側面が何れも磨かれている(26)は其形磨製石斧の如くなれど刃部丸く磨かれ決して刃として用ひられたるものではない以上の石器は或は石器時代の品と稱するも其判別出來ないが(26)の如きは確に一つの特徴がある予は此等の石器が土器製造の為に造られたのであろふと考へる

以上の發見品に依て此の遺跡とも云ふ可き竪穴に附て大に研究する所があった予は此の穴の成る者が焼け麥、炭、灰、及石器などの發見から見ると確に其の1部は土器製造場處として用ひられた事が推察出来る

終に一言すべきは此の彌生式土器が古墳時代の前或は後に屬すべき者か將た又並び行はれたるかは最も研究を要すべき問題であろふと思ふのである

編者曰く此遺跡の事に關しては曾て長野中学の野津左馬之助氏より坪井理科大学教授へ信書昨年9月4日附け寄せられし事有り。一説として之を左に附記す。(前略)却説一昨夕は御來長且つ御講話を行なされ候際傳承致居候へども折悪く他出中拝顔の榮を得ず遺憾此事に御座候承れば其節高等女學校敷地發掘の彌生式土器につき御講話なされたる趣に候處右發掘土器の多分は渡邊該校長の手許に有之御一覽の事と存候小生も生徒より贈與くれし破片又自分探得せるものをも所持致居候彌生式土器に付ては兼ねて愚考も有之候事故生徒兩3名引き連れ再應探訪候結果左の數品を拾得候

1、土器

甲、朱を塗りしもの

乙、朱杯塗らざる浮紋土器にて普通諸方にて發見する物、此式に屬するものは該地のみならず此所を去る2~3丁の畠地よりも度々發見す

2、石器

甲、打製 1個

之又北佐久郡邊にあるものと同質同式のもの

乙、磨製 1個

之又同断半は折れたるものにて齒の邊使用せる結果として著しく磨滅せり

3、石鎚及び其材料 数々 普通のもの

4、綠玉 1個、

5、渦紋土器破片 數個

右は凡て現在の儘なるを拾ひしには無之人夫の掘出せる跡又は運土の堆積中より得しものに候第三紀層の上に凡そ一尺計りの黒色糞土ある其中より重に得たるものにて候元來彌生式土器なるものは未だ學者間に一定の見解も無之様に候へ共小生の卑見にては（重に信州地方に於ける現狀より推測して）矢張りコロボックル人の製作物なれども彼等人族の末期に際し大和民族の轟張の爲め相接觸し其結果として兩人族の製作法及び其式を混合せるものとの考にて御座候（下略）

この報文によると、幾つかの竪穴住居址があつて、その中には火災による廃滅で炭化した麥の出土のあったことがわかる。又、薛田氏の調査に先んじて行なわれた長野中学校の野津左馬之助氏の調査によると少なくとも基盤層までは30センチの堆積のあったことが知られた。

次に玉置氏の報告は整地工事が終り、北校舎、中校舎、寄宿舎、雨天体操場の落成を見た37年に鳥居龍藏氏と共に見学された時のレポートで、まだ竪穴住居の断面がのこっていた。

「長野市でみた彌生式土器」—玉置繁雄—

(『東京人類学雑誌』 215号)

題號に掲げた通り、私はこれから昨年鳥居氏と共に北信濃地方へ旅行した時に、其長野市の高等女學校で見て來た彌生式土器に就て、聊か所見を述べやうと思ひます、最も此事に關しては已に薛田鉢次郎氏が本誌第17卷 189號及び全じく 190號に「長野市に於ける彌生式土器の發見」と題して報告をせられてありますから、それを是非共參照して頂き度い。附言、本文起稿の時に際して鳥居氏が材料及注意を與へられました爲に愚論の立脚地を得た事が中々少量でありませんから豫め茲に記して其厚意を謝します。

さて此高等女學校のある地は小字を箱清水と云って、市の北端、山の麓で見晴らよく、彼の有名な善光寺へも右手の方僅12丁の處である。此學校の建設せられたのは23年前の事であるが其當時地均をした時に其所此所に所謂塵捨穴も發見されるし、塵捨穴から彌生式的土器も發見されたのである、吾々は其當時發掘されたもの並に其以後少し蒐集したものを見て來た譯である、塵捨穴の如何なるものであるかは今も一個横断面の殘って居るのがあ

るからよく分る、深さは2尺5寸位、長さは3間位、土器の埋まって居る有様も1ヶ所に集って居らずにチラホラ點々散在して居る處が十分分る、其所を寫真に撮ったのであるが雪や何かの爲に明瞭に出来なかった、尚ほ同校長の渡邊敏氏が厚意によって人夫を發して吾々の爲に塵捨穴のありそうな所を2時間餘りも縦横に發掘して與れたのであるけれども土器片1個も得ずして終りました、此現象は或側からいへば徒勞に帰したやうであるが然し是によつて此地の彌生式の土器は塵捨穴以外に發掘し得られぬといふ事が證明されるのである、然のみならず今迄此所の例に依つても塵捨穴以外よりは出ないといふ事であるから尚更謹に證明は付くし、已に發掘せられた土器の中十中の五六迄殊更に打ちくだいて放棄したらしい形式があつて廢物を棄てたらしい形式は比較的少くないし、今露はれて居る斷面の工合或は土器と同時に木炭或は桺殻の炭などの發掘されて居るのでを以て考へても堅穴に居住して居たもの、殘したものとは思へないし、薄田氏の言の如く製造場とも思へない、其故は製造場として常に伴ふべき物件即窯跡、数枚添着して居る重り焼等一も見えないで只土器の表面コスル爲に用ひしと思へば思はれる石2～3出づるのみ、此石とても何とやら此土器とは同時代否此土器を製造する時に用ひられたものでないとは實物を一見さへすれば容易に見分けられるし實用でないといふ事は已に薄田氏の掲げられたる圖に依ても知らる、上殊に朱を多く塗つて然も薄手のものが幾つもあるので知られる。

斯うして考へて見ると製造所説も實用説も此所の例には當てはまらない。

此所に一の面白い事實として現はれたのは他でもない祝部土器の彌生式土器と同時に同所から發掘せられた事である、尤も祝部土器の彌生式土器と同時に發掘せられる事は珍らしい事ではないが其形式及び模様の相似たる點である。

(33)は祝部31・32・30・34・35・36は彌生式)……………(中略)……………
ですから今は此所から出た彌生式土器に對しては其祝部土器と同一の使用なる事と云はんとするのである、即祭器説である、固より祝部土器とても古く遡れば實用であった時代もあらふが今は已に祭器と認められて居る以上は祭器と云つて差支へあるまい、さすれば朱塗の彩色もよからう、薄手なのも解釈が付く、殊に朱塗のは今も三方に朱塗のものもあるを以て見れば思ひ半にも過ぎる事である、又其高杯形にスカシのあるのも三方の孔が證明せよう、彼の木炭のあるのも大野氏の説の如くに伊勢神宮の例によつて時々焼き棄てたものとすれば差支へがなく、其の土器の量の多いのも其神宮の例より推せば一向差支へる事はない、さうすると此地に何か大きな神社がなければならぬ即日本地理志料卷ノ7、水内郡芋井の條を接するに、

(……) 意水内神社在此、……(中略) ……神名式水内郡建御名方富命彦神別神社、一名水内神、今在籍清水村善光寺域内、稱年神堂、按善光寺縁起、推古帝時、州人若麻績東人、獲佛像於難波堀江、後建堂於水内郡芋井郷安堵、所謂善光寺是也、栗田寛曰、初東入設寺于社地、及佛寺盛盛、神祠竟賽、僧徒募其社地、大興堂塔、而本社僅存一小祠、稱年神堂、世不復知其爲官社、唯如來堂今猶行風祭、注連張、年越等神事者、即本社祭

儀之遺也……

とあるので愈益かめる、右水内神社は今は明治11年善光寺の境内から其東方假寝岡、元本城山といつて往時城塞のあった地へ移されてある。

右に述べたかゝりであるから他はいさしらず此高等女学校敷地から発掘された彌生式土器は祭器であると私は云ふのである、が然し此所から出るもの、中に系底のもの多く出るのを以て見ると彌生式といふ中でも時代は殊に新しいものであらうととにかく時代は祝部土器の行はれて居った末期此方のものであらうと考へる。

以上述べた處は余が一つ信濃で見て來た例に1～2他の知つて居る例を加へて此の地に於ける彌生式土器の如何なるものかを論じただけで他の多くの例にまで推し及ぼす事の出来ないのは無論の事であるから一言加へて置きます。

その後、遺物のうち完形を保つものは東京大学人類学教室に贈られたが、それでも多くの遺物は学校に保管されていた。大正14年刊行の『長野市史』には次の様な記述がある。即ち遺物20数点を4段の棚に並べて写真撮影し、その説明として「上より1・2段は古アイノ人使用的土器にて多くは液体を容る器の破片なり。第2段の中央に在るものは、梢形を存するものにて、土瓶の如きものなり。他は器物の把手なり。皆、高等女学校敷地ならしの際に出でしものなり。第3・4段は弥生式土器にて、多くは液体容器及その台、漏斗等なり。皆高等女学校敷地より出でたり。同地は弥生式土器を出したことは數において殆本邦第一にて形状の完全なるものは多く東京大学人類学教室に贈れり。」

これによると箱清水遺跡からは弥生土器のみならず、绳文中期土器も出土していたことがわかる。又、藤田・玉置論文からも弥生土器のみではなく土師器も結構多く出土していた。又、『長野市史』の挿図によても古墳時代の土師器や、高台を有する歴史時代の土器の混在がうかがわれる。

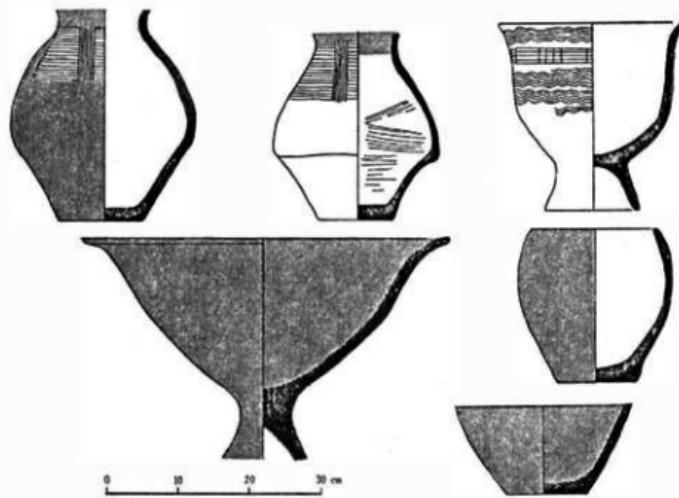
昭和に入って長野高等女学校は14年の大火で収蔵遺物を焼失してしまうが、その前に藤森栄一氏が遺物を実調している。弥生式土器聚成図録作成の時で、氏は弥生土器を信濃の弥生後期の標式土器に指定し、「箱清水式」を提唱された。

「信濃の弥生式土器と弥生式石器」—藤森栄一—

(『考古学』7-7)

長野箱清水

長野市箱清水が明治の末期長野高女の校庭工事によって発掘された際、出土した弥生式土器は完全に近いもののみで数百個に近かったと当時の記録にある程ですから、余程の大遺跡だったに違いありません。それ等は刷毛目をもつ壺とそれに等しい鉢、有孔底の土器、鉗をもつた土器同じ意味の角を持った土器等と又塗丹された円底の壺、碗、高杯、器台等



第13図 藤森論文掲載土器

のA・Bの二形態に分けることができました。

前者は粘土は良いのですが、焼成は極めて弱く、薄手でガサガサの粗雑さで、後者は美しく磨かれる場合が多いです。櫛目文に類した施文も大分ありますが岩村田期のものより大部精彩を失って殆んど整形副作用にすぎません。箱清水では凹石が数個出土しています。信濃全体に及んでこの期の遺跡は最も瀟洒したものとの様であります。千曲川上流では岩村田町付近、中込町付近、犀川では松本市南方の低地、出川・清水方面、諏訪湖の橋原、横内、天龍川上流の長岡など共にすばらしく広汎な聚落遺跡の大きなものです。いずれにしても石器は大きな石錘や凹石などの絶対的鉄器の外は注意されておりません。遺跡の断面からは往々竪穴が見出されるのですが、それらは余り大きなものではありませんがその数はすばらしく多く密集しているのが常であります。

この場合の箱清水式中には古墳時代に属する土師器が混入している様である。しかし、弥生後期に位置づけた氏の業績は大きい。

以後、更に20年を経過し、31年には『信濃史料1巻』が編まれたが、ここでは藤森説を継承し、弥生後期の一型式として箱清水式を設定している。

斯様に、箱清水遺跡は伝説のみならず日本の弥生文化研究史上輝くべき位置を占めている。

ただ、それにしてもその後の調査のみられなかつたことは淋しい次第で、発掘調査も53年に同協会館建設に先立つて丘陵東斜面を発掘したのみである。この時は遺構・遺物の発見はみられなかつたが、それだけに、貴重な遺跡であるにしては実体が把握できないといふもどかしさがあつた。今回、長野西高校校舎改築工事が実施されると聞き、それに先立つて調査を万端繰りあわせても実施しなければならないとした意図はここにもあつた。

今回の調査は南校舎・中校舎間の中庭部分で、その結果、昭和14年火災の廃土埋立層、明治34年校舎建築時埋土層の下に遺物包含層を見出したことは大きな収穫だった。南校舎、及び前庭の地表下2.4mには、いわゆる箱清水遺跡が眠っていることが確認できたからである。又、北方は中校舎下まで及んでいることも推察でき、今後、同校舎改築時には調査すべき必要のあることもわかつた。

遺構として明治34年時には竪穴住居が幾つか顔を出していたが、すべてが弥生後期のものとは思われず、古墳時代及び以降のものもふくまれているとしなければならなかつた。今回、遺物包含層下に発見された柱穴は古墳時代住居址の存在を予想させた。また、縄文早期の押型文土器片が数点出土したが、これなども長野市にとっては貴重な存在である。今後調査をつづければ縄文中期の文化層にも遭遇する事があるだろう。遺物の主体を占めたものが弥生後期であることは云うまでもなく、破片ではあるが出土遺物は今後、当方後期弥生文化研究の資料に供されることはある。 (桐原 健)

(註)引用した論文は縦書きであったものを横書にした。そのため数量・番号を表す数字を漢数字からアラビア数字にした。また図も関係ある部分のみ撰択して組みなおし、原本でイロハ……表現のものを1・2・3……式にあらためた。また文中(略)してある点もご承諾願いたい。



遺跡遠景



南校舍正面

第二回版
調査地近景・調査

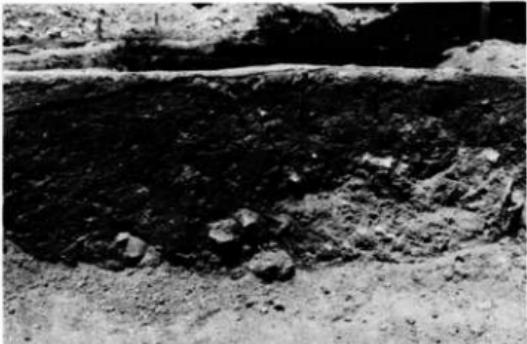


調査地近景





B-9 グリット



B-4 グリット



旧校舎土台石

第四圖版

渡辺敏初代校長・學校敷地造成(長野西高提供)



一 渡辺敏初代校長

學校敷地造成
↓



大 峯 遺 跡

—信田小学校体育馆地点の調査報告—

例　　言

- 1 本書は昭和55年度において長野市長と長野市遺跡調査会長との契約に基づく、長野市立信田小学校体育館建設に伴う緊急発掘調査報告書である。
- 2 本書は調査結果を報告するとともに、調査の動機となった遺跡内出土遺物を提示することにより、大峯遺跡をはじめ信更地域の考古学的遺跡の位置付を考えている。
- 3 遺構は発見順に番号を付した。
- 4 遺物の実測は石上・竹内があたり、整図は小林が行い、拓本は臼田・田中が担当した。石器の石質にあたっては信州大学教育学部助教授齊藤豊氏の御教示を受けた。
- 5 遺構・遺物の写真は主に矢口が撮り、他に直井が補助し撮影した。
- 6 本書を刊行するにあたり、各章・節・目の執筆は文末に明記することにより文責を記した。
- 7 本書の編集は調査員各位の協力のもとに、そして印刷関係業務等は長野市教育委員会が担当した。
- 8 遺物や関係図面・諸記録は長野市教育委員会が保管している。

目 次

例 言

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 調査日誌	1
第3節 調査会（団）の編成	4
第2章 遺跡周辺の環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 遺構と遺物	8
第1節 竪穴址	8
第2節 溝址	10
第3節 大峯遺跡出土遺物	10
第4章 結 語	16

挿 図 目 次

第1図 信田小学校々舍配置図及び調査地	2
第2図 遺構分布図	3
第3図 大峯遺跡周辺の遺跡分布	6
第4図 竪穴址実測図	8
第5図 溝址1～3実測図	9
第6図 本調査出土土器	10
第7図 (伝)大峯遺跡出土土器	11
第8図 (伝)大峯遺跡出土石器	12
第9図 (伝)大峯遺跡出土古瓦・古鏡	15
第10図 (伝)信更町赤田專照寺裏出土鎧瓦	17

図 版 目 次

第1図版 遺跡遠景・調査地
第2図版 遺構遠景・竪穴址
第3図版 溝址
第4図版 調査スナップ

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経過

信田小学校体育館は、長野市が老朽校舎の改築をすすめている中で、昭和55年度に改築が計画されていた。それも予算の決定を待ち年度当初から事業に入りたい意向であった。しかし、改築場所は現在の体育館解体後ほぼ現在置に建造されるため、この工事後の調査で、また一方、延喜式内社とされる清水神社参道も東側隣接してあり、この位置決定を待っての調査であったため、調査期日は流動的であった。どちらにしろ調査対象の遺跡として準備を進めていたが、団長に森嶋先生をお願いしたものの職務があり、学生調査員の確保が思うにまかせなかつた。幸い根津さんが4月の定期移動により社会教育課に配属され、文化財係としての仕事をも担当することになり、何とかいけるとの目算を立て、体育館解体の期日が具体化する中で、調査協力を学校長・PTA会長に依頼した。そして正式に調査期日・PTAの協力等の依頼に信田小学校を訪れた時は、ちょうど解体作業初日にあたつており、潰された屋舎上に嘴状の手を持つバックホーが廃材の撤去に急がしかつた。学校長の話では、解体時の山腹斜面の通学路にあつた学童の姿が印象的であったということを記憶している。この帰りに請負業者に、調査に支障ないよう廃材撤去作業を終了し、また引き続き表土除去が実施できるよう重機の手配をお願いした。

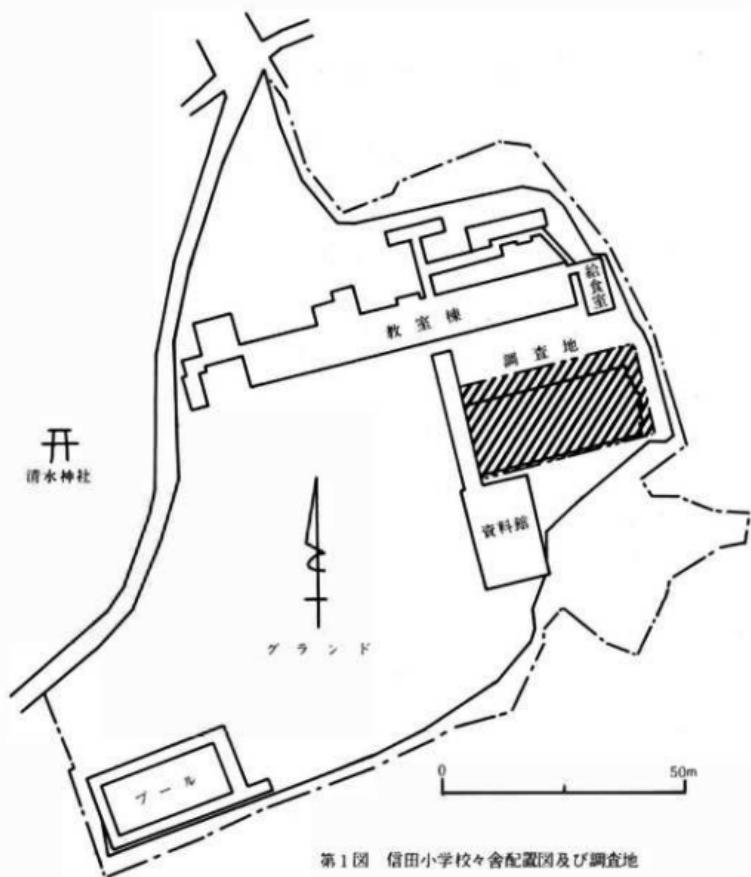
ちなみに信田小学校がある付近は台地状になっており、縄文時代及び平安時代の遺物が採集され大塚遺跡として周知のものである。その遺物の一部は信田小学校資料館に保管・展示されている。

(吉池弘忠)

第2節 調査日誌

この調査に至るまでの経過は前節で述べたとおりであり、本節では調査実施に間与したものを見渡す。

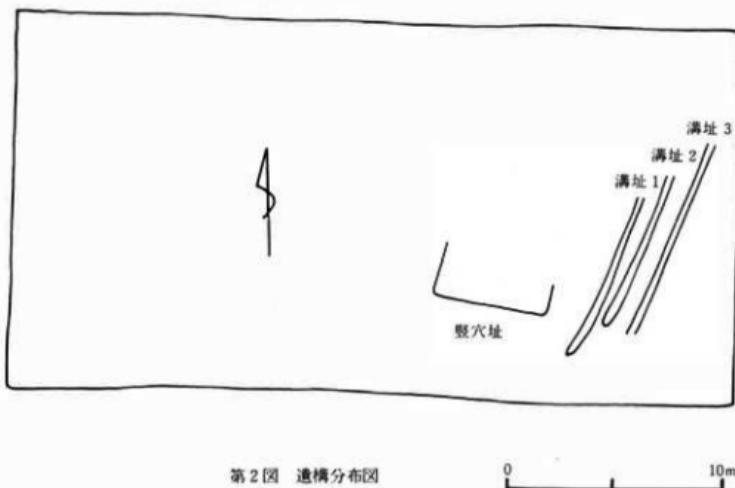
6月5日(日) 旧体育館解体後の残材処理を兼ね、表土除去を行う。この作業は台地先端からはじめたところ、地山と思われる堆積土がすでに露呈している感があった。これは地形的にみて校庭造成の際に削り取られた残土のなせる結果と考えていた。それ故に最も埋土の深いと推定される台地先端東側でバックホーにより深掘りを試みた。約1mを掘り進めたあたりから巨石・礫が出はじめ、2m近くになると巨石が多く混入しており、バックホーがそのため浮き上がる姿をたびたびみた。ここまで掘り下げたところで、埋土とは異なることを確信するに至り、土層を観察する。その結果は、土層序が先に述べた礫のあり方を示しているものの質的に



第1図 信田小学校々舎配置図及び調査地

は同一のものであり、再堆積(埋土)の様相をうかがえる根据資料がなかった。そこで結論的に現表面下は、既に削平されているものの遺構・遺物の痕跡が残存しているのではないかと考え、調査地全面を廃材処理に合せ一律に排土することにし、調査開始前までに完了する様指示する。発掘調査機器材を搬入する。

6月10日(雨・曇) 本日より遺構等の検出作業を開始する。この作業に先立ち、調査会長代理吉池社会教育課長補佐から、そして宮沢PTA会長・吉原校長の挨拶をいただき、森嶋団長の「仲よく、けがのないように、そして学術的に」の言葉を伝えた後、直井調査員を紹介するなどして調査にかかる。



第2図 遺構分布図

0 10m

調査はバックホーによる残土の処理に重点をおいた。昨夜來の雨等によりぬかるみ、また搬出土砂が重い。

6月11日(曇) バックホーによる残土処理を急ぐ一方、調査地の南端及び西側に顕著な落ち込みが認められた。先日の深掘り調査でこの付近一面は、黒色土はないものと考えていたので、もしかしたら斜面上に生活址が残っているのではないかと考えた。そこで、この黒色土の落ち込みの意味を確認するため、その部位に $2\text{m} \times 2\text{m}$ のグリットを設定し、一つおきに調査を進める。ここから出土した遺物は、現代陶器がその主流を占める。

6月12日(晴・曇) 青空がみえるもののやがて空全面に雨雲が覆う。今日も残土処理を行う一方、主力は昨日の先端部調査にある。先端部落ち込みは徐々であり、人為的な遺構は検出できなかった。残土処理した班は、解体された体育館以前の礎石を露呈し、更に台地先端付近の遺構の再点検に移る。先端に標高に添って3本の溝址・住居址の痕跡を検出し注意深く調査を進める。住居址は西壁及び南北壁の一部と床面を検出した。溝址はほぼ等間隔の巾をもって地形にならってやや円弧を描く。この日調査作業工程から判断して、PTAの作業協力を明日をもって打ち切ることにし、その旨をPTA会長・校長に依頼した。

6月13日(曇) 昨日検出した遺構の時代決定を得るために精査をした。一方このような遺構を求め、また調査地内の清掃を意図して草搔により調査を進めたが、既出の遺構の他発見できなく、遺物の検出もなかった。住居址・溝址の検出後、写真撮影・実測を行い全調査を終了した。なお、この間東側校舎より調査地の全体写真を撮る。

6月14日(曇) 土層図を作る一方、器材の撤収を行う。

(矢口忠良)

第3節 調査会(団)の編成

1 調査会

会長 中村 博二 長野市教育委員会教育長
委員 米山 一政 長野市文化財保護審議会会长
・ 桐原 健 ・ 委員
・ 森嶋 稔 調査団長
・ 千野 和徳 長野市教育委員会教育管理部長
・ 関川千代丸 ・ 社会教育課嘱託
・ 矢口 忠良 ・ ・ 主事
監事 田中 穂積 ・ 庶務課長

2 調査団

調査団長 森嶋 稔 日本考古学協会員・上山田小学校教諭
調査主任 矢口 忠良 ・ 市教委主事
調査員 竹内 稔 長野県考古学会員・信大学生
・ 直井 雅尚 ・ ・
指導 齊藤 豊 信大教育学部助教授

3 調査参加者

上條由行・上條栄子・大矢ヒロ子・小林美代子・島田勝子・宮沢延子・大屋美恵子・清水百合子・大矢良子・吉原和彦・上條英雄・村田守一・小林正勝・大矢ひろ子・田中はま江一ノ瀬さち子・小林みつ子・大矢国子・石坂喜美子・田中建・柳沢清・村田尚人・小林利彦・小林満文・宮入優・若林信夫・高沼寿一・唐木うめ子・高沼公子・飯川栄子・小幡生園・小山政子・高沼伊都子・吉沢千枝子・西村与子・小林邦武・矢島勝男・永井一男・塙野入範枝・小山峰子・篠本みち子・相原栄子・小山秀雄・永井幹輝・塙野入生夫・永井彪・跡部忠久・北沢忠重・清水弘(信田小学校PTA)

4 事務局

事務局長 関口 仁 (社会教育課長)
担当職員 吉池 弘忠 (・ 課長補佐)
・ 矢口 忠良 (・ 主事)
・ 根津 伸夫 (・ ・)

この他 信田小学校吉原英敬校長・奥村栄成教頭をはじめ学校職員、宮沢勉PTA会長及びPTAの皆さん、そして飯島・高木建設共同企業体、最後に工事担当課の小池課長・柄沢係長をはじめとする学校施設課の皆さんには、ことのほか御支援をいただいた。

文末であるが、記して感謝の意を表します。

(根津伸夫)

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

大峯遺跡は、千曲川の支流、聖川の左岸に張り出す段丘状の舌状台地上に位置している。聖川は、更級郡大岡村と東筑摩郡麻績村との境をなす聖山を水源とするものであり、北流するのを、この田野口地域で大きく東へ向きを変え、やがて篠ノ井上石川にて善光寺平へと出る。古くは平久保、唐猫で千曲川へと落ちていたが、現在は、山崎をへて平久保の南で千曲川へと落ちている。この地域は更級郡内における最大の沖積面を構成するところであり、自然堤防、後背湿地とも安定した地理的ユニットをなしている。

田野口地域はそうしたなかで聖川中流域に位置するが、ここは山田及び赤田の微隆起地帯の存在するためもあって長さ5km、最大巾0.3kmの帶状沖積地となっている。この帶状沖積地は、かなり古いころから安定した水稻生産面となっていたと思われ、縄文後期から弥生時代、古墳時代、そして古代前半期の注目すべき遺跡群が周辺台地上に残されている。

大峯遺跡の位置するこの千曲川総谷左岸地帯の、いわゆる中央山地は、フォッサマグナ地帯の真中であり、第三紀の堆積岩を基盤とした隆起山地である。その隆起造山運動は、第四紀を通してはげしく、いくつかの火山活動と共になされたことは言うまでもない。聖川の水源とする聖山も第四紀前葉に属する火山であって、その泥流は広範囲にまで及んでいる。第三紀層を覆っている状態は、道路の切断面などで随所にみることができる。

こうした中央山地の生成とその歴史からして、信田丘陵と呼ぶことのできるこの地域も例外でない隆起とともにうなぎ青年期地形をなしている。その地帯のなかで聖川水系のうち、もっとも広い沖積面を持つ田野口、大峯地区に大峯遺跡が存在することは注意されるところである。

(森嶋 稔)

第2節 歴史的環境

信田丘陵でまず注意されるのは、聖川右岸のテラスにある上和沢遺跡である。この遺跡は、神子柴系文化に属する尖頭器を出す遺跡であって、大峯遺跡より上流へ3km程上ったところである。この資料を最も古いものとして、縄文中期・後期の遺跡が散見される。とりわけ、大清水遺跡は大峯遺跡と対岸をなす聖川右岸に位置し、大湧水地点わきに営まれた低湿地の遺跡である。

弥生時代の関連資料が検出される遺跡は数多いが、とりわけ西山、山田屋敷遺跡など前面に広い沖積地をもつ遺跡として注目される。西山遺跡からは、新しいタイプの石包丁形石器が採集されている。



1. 大峯遺跡 2. 平林遺跡 3. 天神山遺跡 4. 篠山遺跡 5. 中組遺跡 6. 天池遺跡 7. 小日向遺跡 8. 大上遺跡 9. 堀上遺跡 10. 大清水遺跡 11. 城ノ腰遺跡 12. 山田里敷遺跡 13. 西山遺跡 14. 大塚前方後方墳
 15. 松の山古墳群 16. 小山田古墳群 17. 松の山古窯跡 18. 日向古窯跡 19. 本前田古窯跡 20. 岸原古窯跡
 21. イモジヤクボ古窯跡 22. 城ノ腰古窯跡 23. 前田古窯跡 24. 原市場古窯跡(古瓦出土地) 25. 鹿ノ入古窯跡(古瓦出土地) 26. 寺照寺古窯跡(古瓦出土地) 27. 赤田城南遺跡(古瓦出土地)

第3図 大峯遺跡周辺の遺跡分布

古墳時代から古代には、この信田丘陵のもつ課題はにわかに多岐にわたるようになる。

その1は大塚前方後方墳を主墳とする松の山古墳群の問題である。長軸39.5m、後方部巾25m、同高4m、前方部巾9m、同高2mの規模と形式をもつ大塚前方後方墳は、豊穴式石室をもつものか、あるいは粘土床をもつ古墳ではないかと推定されている。盗掘が行われたと思われる凹地が後方部にあるが、これからすれば、粘土床、あるいは粘土床のようなものの可能性が強いように思われる。出土遺物として伝承されているものは、まったくなく、それ以上は推定の域を出ないが、五世紀後半、遅くとも六世紀初頭には築造されていた可能性が強いのではないかと思われる。他に赤田大塚1・2号、白山塚、大塚1～4号、桜田塚古墳など8基の松の山古墳群と呼ぶ後期群集墳もあるが、この信田丘陵の支配構造のあり方を示唆しているようと思われるところである。

次ぎに注目されるのは松の山古窯跡を最古とする6世紀中葉から10世紀代にまで至る須恵器及び瓦の古窯址群の問題である。いわゆる「信田丘陵古窯址群」の名で呼ばれるこの丘陵の須恵器生産は、松の山古窯址の調査によって、六世紀中葉の時間的位置が笹沢浩氏によって与えられるに及んで、にわかに、この丘陵での須恵器生産が、古墳時代のいわば群集墳築造の時代の前半にまでさかのぼることとなった。現在までのところ、中部高地において最古の須恵器窯

址となっているが、注目されるところである。しかし、それと、おそらくはすでに確認されている古窯址の稼働時点と思われる8～9世紀初頭との間には、1世紀半に及ぶ時間的空戦が存在することも注意されるところで、その間を埋める遺跡の検出がまたれるところである。

それに加えて、瓦窯の課題が出てくる。信田丘陵古窯址群が稼働した最盛期は、8～9世紀であったものと見られるが、この時期には、多数の窯業集団が、多数地点でその生産の煙を上げていたものと考えられる。原市場、鹿ノ入、専照寺裏、赤田城南など布目瓦が検出されているのが重要である。これらは、上石川廃寺址出土の古瓦と関連するものと考えられるが、坂城町土井ノ入古窯址などは、坂城町の込山廃寺址や、更埴市屋代廃寺址、上田市国分僧寺及び尼寺址出土の瓦と関連することが明らかになって来つつあることを思えば、更に今後の研究に待つべきところが大きい。

信田丘陵の布目瓦出土地がすべて瓦窯であるかどうかについては、まだ明確になっていない。種々の可能性についての検討がなされるべきであろう。

『延喜式』神明帳の更級郡、清水神社は、信田三水、真島、上山田力石と大峯の四社がそれぞれ式内社であると称しているが、この大峯をもって、その正位置とする人が多い。私もその一人であるが、もともと古代村落共同体と位置づいていた神社は、その生産性、その単位性を背景としていたものであることは言うまでもない。古墳時代後半には明らかに田野口沖積面を生産面とする農業村落共同体の成立を見たと思われるこの地域に一社のしづまりを考えるのが妥当であって、9郷中に11座という神社のあり方をしめす更級郡の理解の仕方であろうと思う。

川中島平二社、上山田一社、信田一社とそれぞれ、氷室斗壳神社と頤氣神社、波間科神社、清水神社とみるのが自然であり、それぞれの妥当な条件をそなえているとみることができる。それは更にこの信田丘陵の村落共同体が、一郷となる程の大きさではなく、すくなくとも小谷（平字奈）あるいは当信（唐之奈）郷に属していたものと理解するのがよいように思うのである。古瓦との関連などからみれば、小谷郷に属していたとするのが自然であるかもしれない。

以上、大峯遺跡に関連する歴史的環境をみてきたが、この信田丘陵の歴史的展開については、種々重要な課題が山積していると言えよう。

(森嶋 稔)

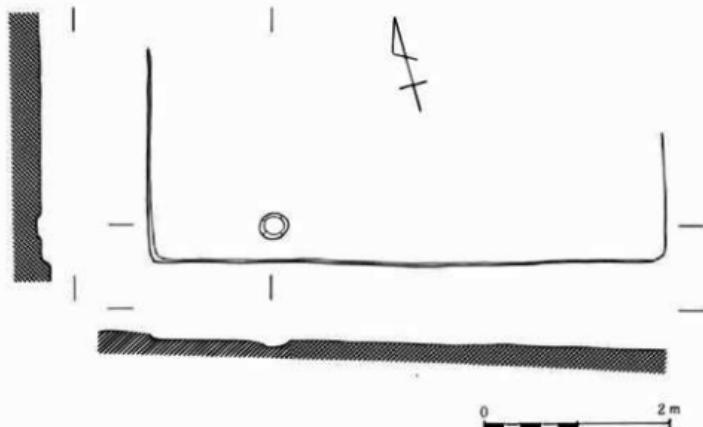
第3章 遺構と遺物

本調査で検出した遺構は竪穴址1軒、溝址3基である。これらは地山に掘り込まれているが、調査地一帯が既にかなり削平されていたため、わずかにその痕跡を残していたにすぎない。なお遺構の番号は発見順に付した。

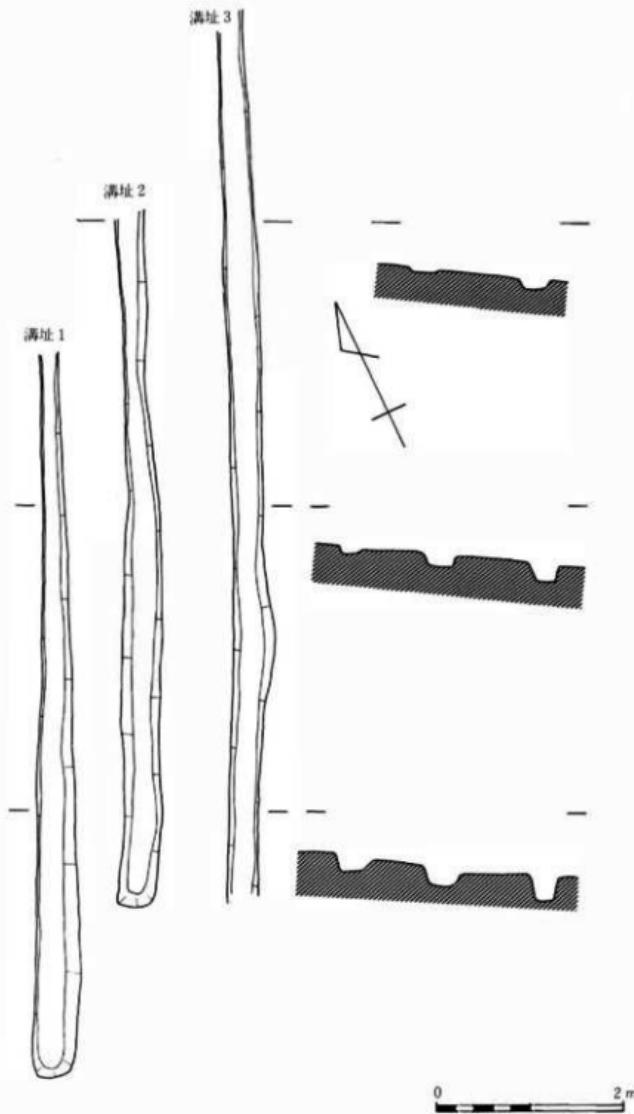
第1節 竪穴址(第4図)

遺構 調査地の中央南東寄りに位置し、わずかに残る南壁とそれに続く西、東壁の一部及びその間の床面により確認された。規模は南壁付近で5.5mを測り、この数値内外の他辺を持つ方形を呈していたと思われる。主軸方向は南壁を基本にするとN-17°-Wを指す。壁の掘り込みは直に近く、覆土は黒褐色粘質土である。壁高は西壁7cm、南壁6~10cm、東壁1~3cmを測るのみである。床面は東に緩傾し平坦で堅緻である。柱穴と推定される径30cm程のピットが1ヶ確認されただけで、他の施設、焼土等は全く見出せなかった。それ故に住居址と断定できなかった。

遺物 本址の覆土、床面からの遺物の出土は全くみられなかった。時期は不明であるが周辺より出土した土師器片を参考にすれば、平安時代のものと推定される。
(直井雅尚)



第4図 竪穴址実測図



第5図 溝址 1～3 実測図

第2節 溝址（第5図）

遺構 調査地東端にはば等間隔で3基並列して検出され、西より溝址1・2・3と呼称する。いずれもわずかに弧を描きながら南南西に走っており、南端部付近で、20~25cmと最も深く、北へ進むに従って浅くなり、北部では5cm足らずとなる。南端は1・2が丸くなり急に立ち上がって終わるのに対し、3は擾乱されていて不明である。巾は3基とも40cm内外で、長さは1が7.8m、2が7.5m、3が9.4mを測る。掘り込みはみな西側が急で、東側はなだらかである。なおこの地点に至ると削平の影響はそれ程ないものと思われる。埋土は黒褐色粘質土で、上部を覆う黒色粘質土と異なっており、それ程現代に近いものでない。そして掘り方はU字形でしっかりとおり、単なる農耕によるものとは考えられない。

遺物 出土遺物はなかった。時期は不明であるが、竪穴址と覆土が同色同種であるのでこれとの関係ある遺構と考えられる。

（直井雅尚）

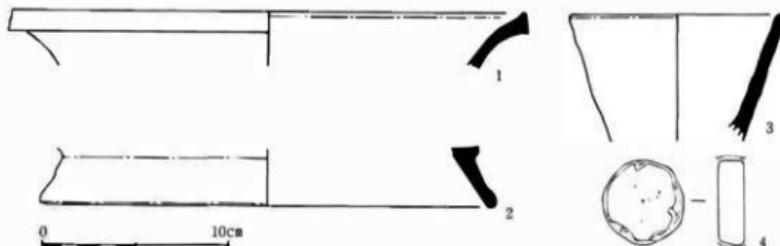
第3節 大峯遺跡出土遺物

本節では今回の調査で出土した遺物に加え、遺跡の時期・性格をより明らかにするため他の大峯遺跡出土品を信田小学校資料館に所蔵されているもののいくつかを提示した。この資料には大峯・信田小学校敷地・清水神社付近等の注記がある。

1 本調査出土遺物（第6図）

今回の調査では10数点の土師器・須恵器・陶器片等が検出面から得られたのみで、図示できるものは4点にすぎない。

1は須恵器變形土器の外反する口縁部で、端部は面取りされて垂れ下がるようになる。外面に黒色の自然釉がかかり内面にも灰色の釉がとんでいる。



第6図 本調査出土土器

2は土師器の足高高台と思われるもので、体部との接合痕を明瞭に残している。器種は不明。

3は直線的に外開して口縁部に至る器形を呈す土師質の土器であるが、器種は不明である。内外面にロクロ整形痕を残している。

4は須恵質の土器片と思われるものを利用した内板である。紡錘車の未製品とも考えられるが穿孔の跡はない。
(直井雅尚)

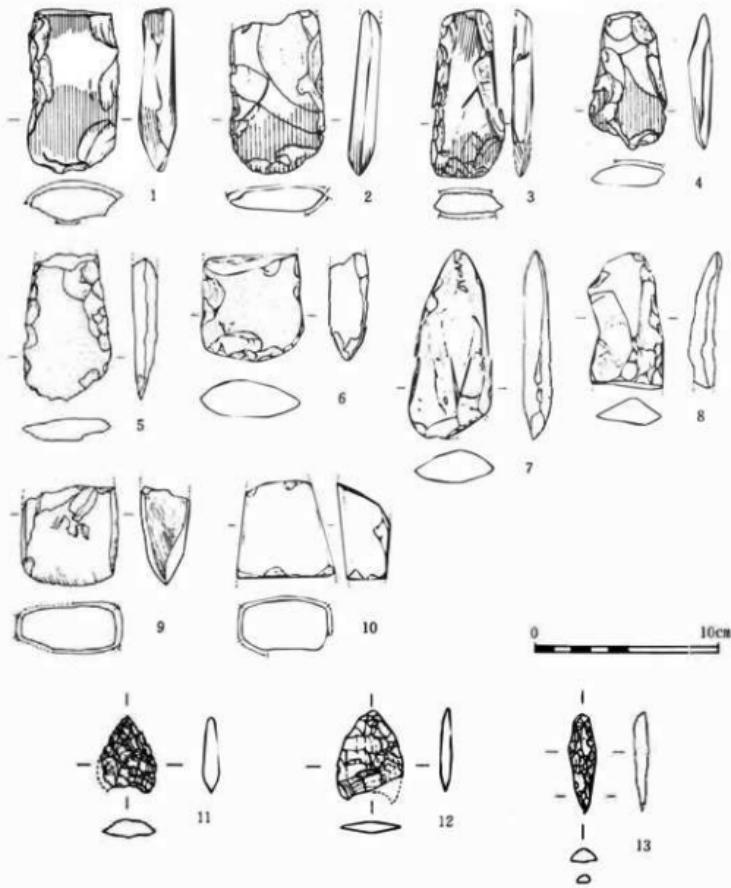
2 (伝)大峯遺跡出土遺物

土器 (第7図1~6)

1は信田小学校敷地出土と伝えられる縄文式土器の把手である。渦巻文や隆線、沈線により



第7図 (伝) 大峯遺跡出土土器



第8図 (伝) 大峯遺跡出土石器

飾られる。縄文時代中期後半のものであろう。この把手の他に、信田小学校敷地出土の縄文式土器の破片が数点あったが、磨滅が激しく図示できなかった。

2～6はいずれも須恵器杯形土器である。2は直立ぎみの高台が付され、底部は中心に糸切り痕を残して他は回転を利用したヘラケズリが施されている。3は底部に糸切り痕をもち、外側にロクロ成形痕を残している。4は痕部に糸切り痕をもつ完形品であるが、焼成時のゆがみがひどく、口縁部の平面形は不正円になってしまっている。5は回転を利用したヘラによる切り離し痕をもつ底部に外開ぎみの高台が付されている。6は比較的大きな底部に目の荒い糸切り痕が残り、更にカマジルシと思われる刻みがわずかにみられる。内面には火だしきがある。

以上2～6のうち2・6は信田小学校敷地内出土と伝えられ、3はやはり信田小学校のブルサイドより昭和39年出土と記されており、4・5は清水神社付近出土である。(直井雅尚)

石器(第8図1～14)

大峯遺跡より出土したと伝えられる石器は打製石斧8点、磨製石斧2点、石鎌2点、石錐1点、原始垂玉1点の計14点である。

打製石斧(第8図1～8)

1～8は打製石斧である。1～4の刃部には使用痕が観察され、主に土擦れによる擦痕ないし磨耗痕であると推定される。表裏両面にみられるもの(1～3)、片面のみのもの(4)がある。頭部の磨耗痕(1・3)は着柄による結果と考えられる。

形態は大別すると短冊形(1～3・5・6)と撓形(4・7)になる。短冊形でも3・5などは撓形に近い。撓形の中では7が特異な形態をとり、断面が他のものは扁平であるのに対し、刃部から頭部にかけて台形ないし三角形を呈し、厚みもある。長さは平均して10cm前後と推定されるが、4のみ5cm弱と小形である。3・8は共に身幅が少ない。調整は総じて荒く、5～7は一部に自然面を残す。完形のもの3点、頭部を欠損するもの3点、刃部欠損2点と一部欠損するものが多い。使用される石材は玄武岩、安山岩、綠泥岩の3種類で形態との相関は特にみられない。玄武岩は近くの篠山山頂付近に産出する。

磨製石斧(第8図9・10)

9・10は磨製石斧である。共に破損品であり、9は頭部を、10は頭・刃部を欠損する。形態は両者共定角形であるが、10の方が頭部幅と刃部幅との差が大きいと推定される。10の刃部及び側面には擦痕が認められるが、刃部のものが使用痕であるのに対し、側面の擦痕は整形時の研磨痕であろう。

石質は9が流紋岩の一種である真珠岩という硬い石材を選んでいるのに対し、10は綠泥岩を用いている。

石鎌(第8図11・12)

2点の石鎌は、先端から脚部にかけて弧を描く点で形態に共通性がある。共に脚部の一部を欠くが完形に近い。調整はやや粗雑で、押圧剥離に乱れが認められる。石質は11が黒耀石、12が青色の硅岩を用いる。

石錐（第8図13）

先端部を若干欠いているようであるが、全長は3cm弱であろう。棒状の形態を取る。錐部には調整が細かく加えられ、中央部に錐部とつまみ部とを分けるかのような挟りが認められる。断面はつまみ部が三角形であるのに対し、錐部はレンズ状から円形に近くなっている。石質は青灰色の硅岩である。

垂玉（第8図14）

玉類としては垂玉（14）が1点出土している。穿孔は両側より為され、砲弾形を呈する孔底部に僅か1mm強の穴が完通している。孔上部の径は3mmを測る。色彩は灰白色が主体で、点々と緑色の部分が混じる。信州大学教育学部助教授斎藤豊氏より灰白色の部分はlithoiditeという流紋岩質の貫入岩であり、緑色の点はその中に取り込まれた硬玉質の部分であろうと鑑定をしていただいた。産地は姫川流域に求められるという。

なお、以上1～14の出土地は、2・3・5・9が大峯、1・6・8・10～14が清水神社付近、7が清水神社前、4が田野口大塚となっている。(竹内 稔)

(伝) 大峯遺跡付近出土石器一覧表

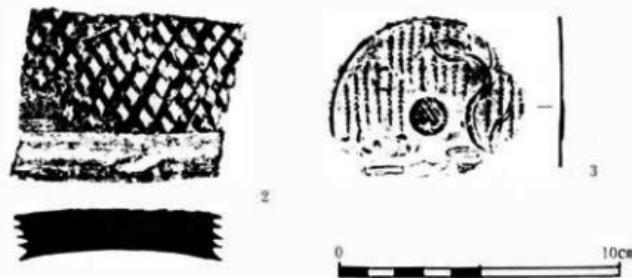
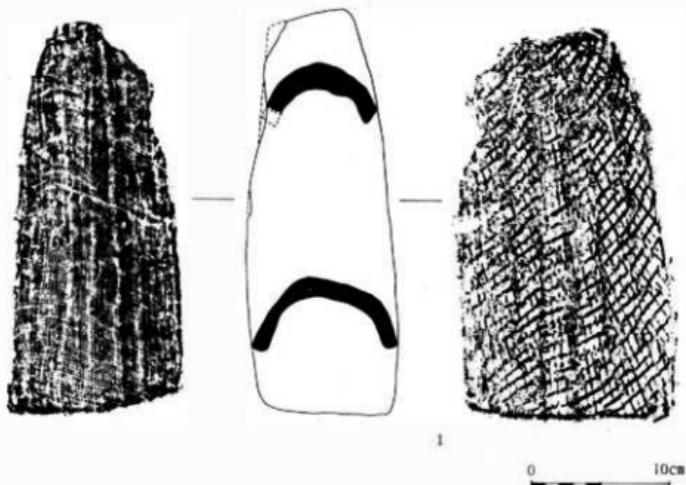
番号	器種・形態	遺存状態	材 質	長 さ	幅	厚 さ	重 さ
1	打斧・短冊形	完 形	玄 武 岩	8.8	4.7	2.0	118
2	〃 〃 〃	頭 欠	安 山 岩	(8.9)	5.1	1.3	(110)
3	〃 〃 〃	完 形	〃	9.0	3.9	1.1	70
4	〃 - 捲 形	*	玄 武 岩	7.3	4.2	1.3	55
5	〃 - 短冊形	頭 欠	綠 泥 岩	(7.7)	4.7	1.2	(76)
6	〃 〃 〃	〃	綠 泥 岩	4.8	5.5	2.0	(87)
7	〃 - 捲 形	刃 欠	玄 武 岩	(10.2)	4.4	1.8	(97)
8	〃 - 短冊形	*	綠 泥 岩	(7.3)	3.9	1.5	(48)
9	磨斧・定角形	頭 欠	流紋岩(真珠岩)	(5.5)	5.3	(2.7)	(120)
10	〃 〃 〃	頭 刃 欠	綠 泥 岩	(5.2)	(5.2)	(2.6)	(130)
11	打製石錐	片 脚 欠	硅 岩	2.5	1.8	0.3	(1.2)
12	〃	〃	黑 耀 石	2.1	1.7	0.3	(1.0)
13	石 锥	先 電 欠	硅 岩	(2.7)	0.8	0.4	(0.5)
14	垂 玉	完 形	流 紋 岩	2.6	1.5	0.7	5.0

〔番号は第8図に準ずる、単位cm・g、() 内現存値〕

古瓦（第9図1・2）

第9図は清水神社付近出土と伝えられる丸瓦である。焼成が極めて悪く、表面はもろく荒れており、黄褐色を呈している。外面には一辺0.5～0.7mmの格子状叩き目文が縱走し、内面は布目が残り1cm平方の糸数は縦糸5～7本、横糸5本を数える。この丸瓦はいわゆる「行基葺式」とよばれるもので、図中では上方へ怪が小さくなっていくことがわかる。第9図2は大峯遺跡出土とされている平瓦片である。片面に格子目をもちその端部はわずかに窪んでいる。なお実際に葺いた場合、拓影を示した面は裏面になる。焼成は良好で暗灰色を呈し、堅緻である。

(直井雅尚)



第9図 (伝) 大塚遺跡出土古瓦・古鏡

古鏡(第9図3)

清水神社付近出土と伝えられる垂柳飛雀鏡である。径7cmと推定されるが、損傷が著しく周縁部を欠いている。

(直井雅尚)

第4章 結語

大峯遺跡はその位置及び地形からして、重要な所見をもたらすものと思われたが、調査によって得られたものは、極めて少量のものであった。遺構は、竪穴住居址と思われるものが1に、溝址が3であって、ともにその所属する時期は明らかにならなかった。しかし若干の出土資料をもとにすると、ほぼ竪穴址は平安期のものと考えられ、溝址もその性格は明らかにならないが、ほぼ同時期のものと理解しておきたい。

大峯遺跡は支尾根状の末端台地形をなす上に乗っているが、その大部分はすでに信田小学校敷地として明治時代初期に削平され、ほとんどの遺構はその際に失われてしまったと考えるのが妥当である。

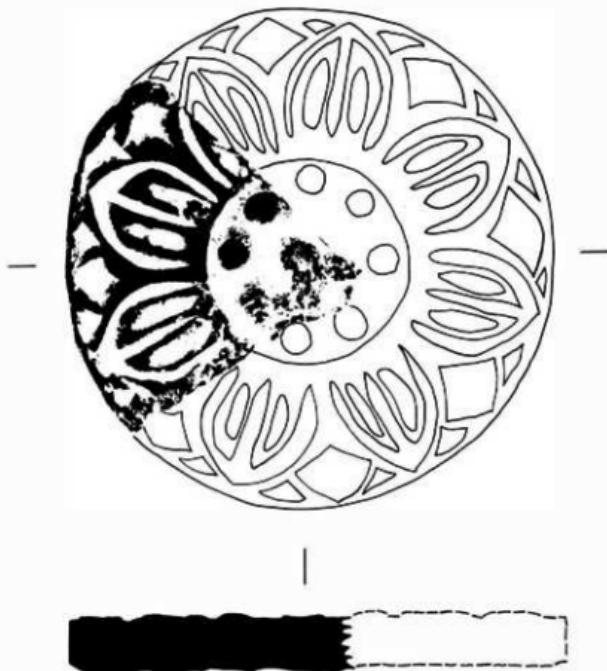
小学校記念館資料室に収蔵されている大峯遺跡出土とされる若干の資料を見ると、まず縄文中期の土器片、打石斧及び磨石斧、そしてヒスイ製の垂玉が注意される。縄文中期後半期の北陸系の土器である塔ヶ崎式土器の把手部分と思われるものや、打石斧のうち、転石面を残した第8図5・6の資料はとりわけ興味あるものである。塔ヶ崎式土器は新潟県南部を中心をもつものと把握されているが、中部高地のうち特に中央山地に偏在して検出できるものであって八ヶ岳西南麓にまでその存在は確められている。転石面をもつ打石斧は、犀川水系にその分布の核をもつ縄文中期から後期に至る遺跡から特徴あるものとして採集されるものである。安庭、中条村日名遺跡などには、その遺跡において製作された痕跡も認められていて、その打石斧の分布上の問題は、その交流域の問題として特に注意されて来た。大峯遺跡の資料は必ずしも多くないというあり方をもととしてみると、やはり、その分布域における周辺的存在であるとの理解を可能にする。今後の研究にとっての好資料と言えよう。

次ぎは須恵器及び古瓦について若干ふれておきたい。採集されている須恵器は壺形のものであり、糸切り、高台付のものもある。とともに平安前半期のものと思われるものである。古瓦は行基葺の丸瓦と平瓦片がある。ともに荒目の布目をもち、市松文のたたき目がある。この種の丸瓦は奈良期までに盛行したものであって、地方にあっては必ずしも多くない。地方にあってはまだ確実な調査例がない現在推定の域を出ないが、平安初頭をそう下ることはないものと考えられる。瓦窯址の存在を考えるか、あるいは数点の出土では、後代の再利用による搬入と考えるかはまったく明らかにならないが、やはり上石川廃寺址などとの関連を求めることが妥当であろうか。いずれにせよ、もうひとつの時期をへだてるものと思われる垂柳飛雀鏡とも呼べる和鏡の存在とも加えて、ここに小廃寺存在の可能性もあったものか、あるいはその和鏡は、清水神社と関連したものであったのであろうか、今はわかには決したいところである。いずれにせよ今後の課題であろう。

信田丘陵がとりわけ古墳時代後半から、一つの歴史地理的空间として、かなり特徴ある地域性を構成していたことは事実であろう。その生産基盤は農業とは切りはなせないものであったであろうが、やがて須恵器生産、そして瓦生産へと展開して行った特殊なあり方をした地域であった。その一端をまさに垣間みたにすぎない調査であったが、本調査が、今後の研究活動に与えた影響はかなり大きいものであったと言うことができる。

本調査に御協力くださった方々に敬意を表わすとともに、感謝の言葉を捧げるものである。

(森嶋 稔)



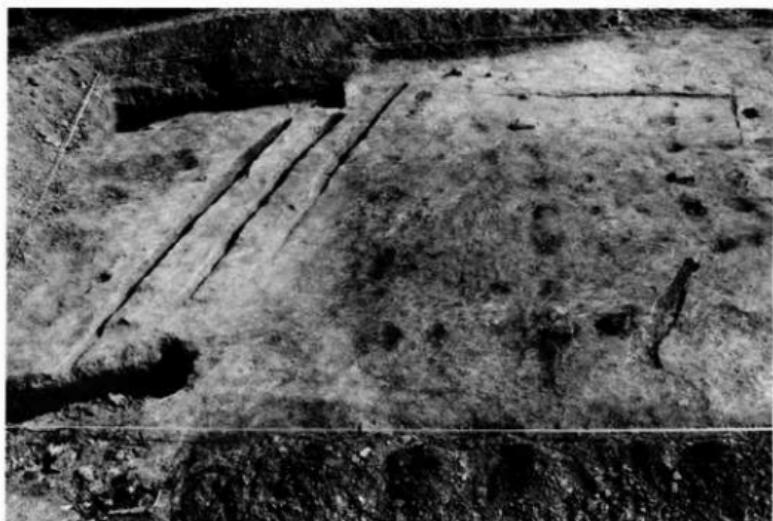
第10図 (伝)信更町赤田専照寺裏出土鏡瓦



遺跡遠景（東より）



調査地（完了）



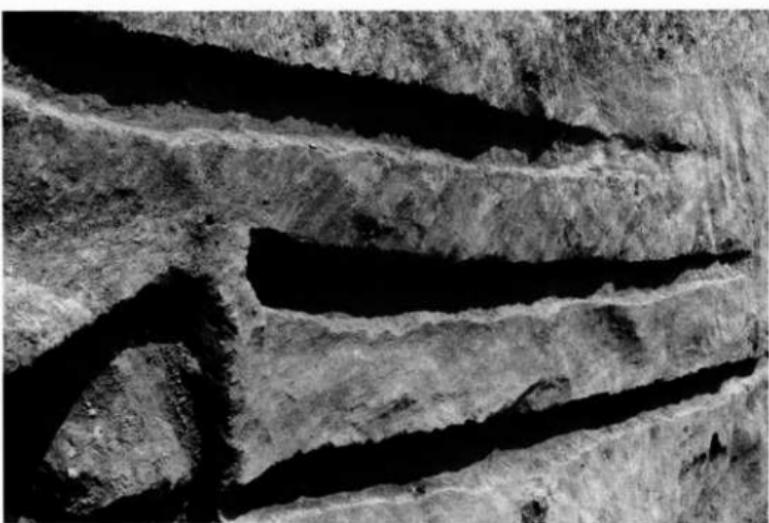
遺構遠景



豎穴址

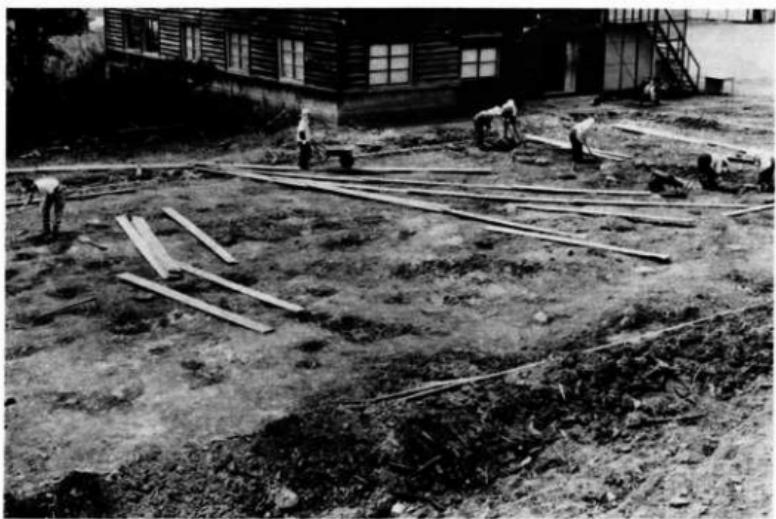


(北東より)



(南より)

第四図版 調査スナップ



大 清 水 遺 跡

——圃場整備事業に伴なう調査報告——

例　　言

- 1 本書は、昭和48年度において長野市と大清水遺跡調査会との契約に基づく、長野市信更町信田地籍における圃場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書である。
- 2 本書は調査によって検出された遺構・遺物をより多く図示することに重点をおいた。
- 3 遺構実測図のうち土層図を百瀬・小柳・赤羽が、平面図を小平・一条が担当し、整図を矢口が行なった。
- 4 遺物の実測は、各調査員の協力を得て主として百瀬が担当した。
- 5 獣骨の鑑定は、信大医学部第2解剖学教室宮尾嶽雄助教授の手をわざらわせた。
- 6 写真関係は、主として矢口が担当した。
- 7 本文の執筆は、調査員協議の上分担をきめ、米山・矢口・百瀬・小柳・赤羽があたり、文末に文責を記した。
- 8 本書の編集・印刷関係の業務は、長野市教育委員会が担当した。
- 9 遺物や関係図面・諸記録は、長野市教育委員会で保管している。
- 10 本書を刊行するにあたり、調査における記述及び関係図面は、大筋として誤りがないと思うので、変えることなく昭和48年度当時のものを使用した。ただ刊行が遅れた原因の一つである遺物（土器）については、矢口にかわり百瀬が再度検討しなおして書き換え、結語もこの機に一部訂正したことを追記しておく。
- 11 遺跡をとりまく環境については、本書所収の大峯遺跡の報告を参照にされたい。

本文目次

例　　言

第1章	発掘調査の経過	1
第1節	調査に至る経過	1
第2節	調査日誌	1
第3節	調査会（団）の編成	2
第2章	遺構と遺物	3
第1節	遺構	3
第2節	遺物	7
第3章	結　　語	29

挿図目次

第1図	大清水遺跡位置図	3
第2図	調査地地形及び土層図	4
第3図	灰層及び土層断面図	6
第4図	第1群土器拓影	10
第5図	第2群土器拓影	11
第6図	第3群土器拓影	13
第7図	第4群土器拓影	14
第8図	底部実測図・拓影	14
第9図	無文土器実測図	15
第10図	無文土器実測図	16
第11図	無文土器実測図	17
第12図	有文土器実測図	18
第13図	石器・骨角器・土製品実測図	19

図版目次

第1図版	遺跡遠望・灰層
第2図版	灰層表面・灰層
第3図版	遺物出土状態
第4図版	調査スナップ

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

長野市信田地区における圃場整備事業に先きだち、昭和46年度に長野市教育委員会は、長野市文化財専門委員米山一政・ 笹沢浩爾氏の指導のもとに周辺地域を含めて分布調査を実施した。この時点では本遺跡が確認されなかったものは無理からぬことで、後述するように聖川の氾濫原で、地形的に見て遺跡存在の可能性すら見い出せない所である。ちなみに長野県遺跡台帳にも登録されていない新発見の遺跡である。

こうした事前調査にもとづいて長野市農林部農政課は、昭和47~49年度の3ヶ年計画で事業に着手した。総面積56.4ha、事業費 14200万円である。47年度は主として左岸及び下流部一帯34.7haが実施され、昭和48年度は右岸を中心とし21.7haの工事が着工中で、すでにその大半が終了まじかになっていた。この工事中、弁天様を祭る付近を中心とする湧水を抜く排水溝がほられた際に土器片・灰が多量に出土したことにより本遺跡発見の動機となった。即ち排水溝は巾1m・深さ約1.5m・長さは弁天様より東へ30mの小規模のものであったが、その堆土に土器等の遺物が集中して混入していることが工事関係者の目につくところとなり、その一部が信更支所に持ち込まれた。以下日を追ってその経過を述べる。

9月5日 大矢信更支所長より圃場整備事業中、土器・灰等が出ているので至急現地調査を依頼する旨の電話があった。

9月6日 現地に赴く。狭い範囲内に多量の土器片・灰塊そして骨片らしきものがあるのに驚くとともに、通常の遺跡立地と趣きを異にするところから特殊な遺跡であろうと推定した。この調査結果をもとに折返し事業担当農政課と協議し、保護のため策を練る。

9月7日 農政課より現段階では設計変更は無理であり、また工期がせまっているため、工事に先き立ち記録保存の調査依頼があった。この依頼はここに至ってはやむなしということで、急ぎ関係各方面と打診しながら調査の準備を進めた。

第2節 調査日誌

前節のような経過で、埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を締結した。調査期間は9月10日~14日までの5日間、調査費33万円である。

9月8日(月) 調査機器の準備をする一方、上面に砂利層があるので、これの除去をブルトーザにて行う。

9月10日(曇・雨) 調査に先立ち結団式を行う。参加者は米山団長他調査員5名・西村市会議員・三井社会教育課長他1名・新海農政課長補佐他3名・北村工事長他圃場整備農協関係者6名・工事請負者北沢組織員等である。調査は排水・整地の作業から開始する。

9月11日(雲) 昨日の雨と湧水によりほぼ午前中排水作業を行う。遺物包含層上面まで掘り下げ本格的調査に入る。灰層範囲の確認のため東西に巾1m・全長10mのトレンチを設定する。東からC-1~5区に別け、調査は1・3・5に主力を注ぐ。

9月12日(晴) 遺跡は昨夜の雨で水没。昨日に引き続きトレンチ発掘を継続しながら、調査をグリット発掘に切り替え、灰層の性格をつかむため努力する。南からA~D、東西に1~5までのグリットを設定した。多量の土器片・獸骨・骨器・石斧等を得た。状況は灰層に獸骨片が多く、土器はその周辺に集中していた。本日の調査はB-3・4、C-1~3である。

9月13日(曇) 新たにA-3、C-1・4、D-3・4を調査する。遺物は連日の夜来の雨と湧水・土質等の関係から層別に分離することは困難であった。土器片の出土量は相変わらず多い。遺物は下部に至るにしたがって漸減するようである。

9月14日(曇) 調査は昨日に引き続き灰層範囲の再確認に全力を尽す一方、地形補足測量、土層の実測に力を入れる。器材整理、終了。

10月4日 整理、原稿執筆等について教育委員会室にて打ち合せをする。

第3節 調査会(団)の編成

調査会長 花岡直一(長野市教育委員会教育長)

調査団長 米山一政(日本考古学協会会員・長野市文化財専門委員長)

*主任 矢口忠良(長野県考古学会員・長野市教育委員会主事)

調査員 百瀬新治・小柳義男・赤羽郁夫・白田武正・小平和夫・一条隆好(以上長野県考古学会員・信大学生) 小原ひき江・飯ヶ浜潔・柳沢康久・伊藤秀秋(以上信大学生)

事務局 中村邦雄(文化財係長)・神田幸夫・矢口忠良(以上社会教育課主事)

この他調査にあたり、西村市会議員・南沢教育次長・信更支所・社会教育課・農政課・信田農協・北沢組の関係各位及び小山田青少年山の家管理人佐藤勇氏等には、諸々御支援をいただき、小林字・原田勝美・大竹俊一・佐藤慶二氏には調査にたいする助言をいただいた。記して感謝の意を表します。

(矢口忠良)

第2章 遺構と遺物

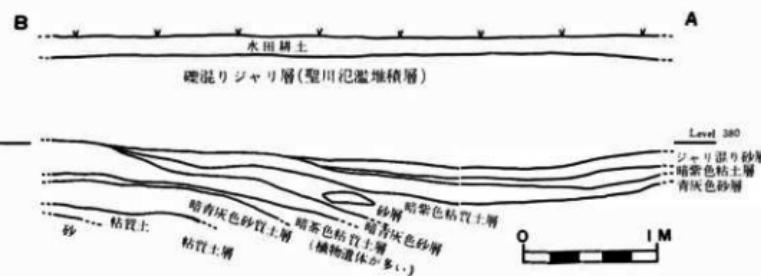
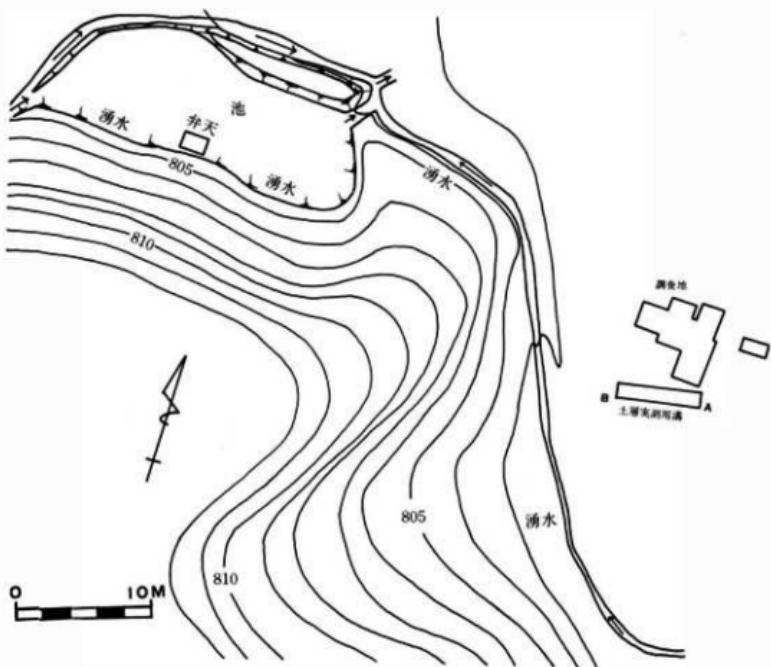
第1節 遺構

1 遺跡の復元



第1図 大清水遺跡位置図

本遺跡は、千曲川の支流である聖川のほぼ中央に位置する。聖川は、大岡村東部山地に源を発し、狭い谷地形を形成しつつ、山間部を曲流している。そして、本遺跡付近で急に広い氾濫原を形成している。氾濫原は上流では、最大幅約 150m であるが、遺跡付近では、最大幅 350m の聖川流域で最大の氾濫原を形成する。この急に広くなった氾濫原内の南側山麓寄りに本遺跡は位置する。流域の地形は、段丘の顕著な發達もほとんど見られず、崖錐層により比較的緩斜がある。聖川は、通常水量は非常に少なく、氾濫原は水田に利用されている。ここで、特に本遺跡が、氾濫原内の湿地であるといった特殊な立地条件が注目される。



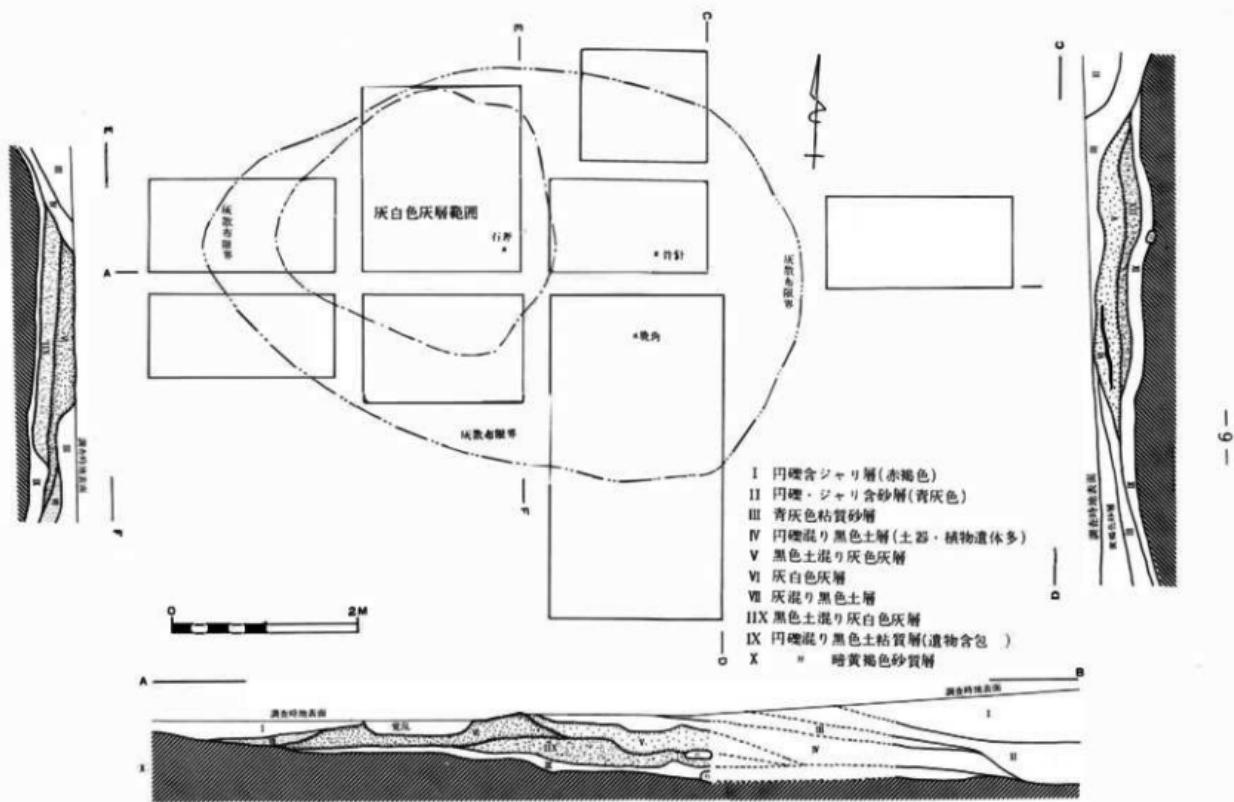
第2図 調査地地形及び土層図

調査にあたって、氾濫原内の小規模な湿地に灰層を伴なった遺物が多量に出土することに大きな疑問を持った。そこでこの湿地の形成について検討したい。尚、調査で確認された湿地の範囲は東西約10m、南北約6mである。湿地形成の要因はいくつかあるが、本遺跡については(イ)弁天様を中心とする付近の湧水による湿地化(ロ)川の蛇行による小規模な河跡湖的湿地化の2つが考えられる。土層断面図(第3図)によるとC-Dの南側断面に厚い砂層が、C-D・E-Fの北側断面にも厚い砂層が確認される。また土層観測用溝(第2図)においても、礫層の下に厚い砂と泥(粘質)の互層が確認された。いいかえれば、B~D・3~5グリットの灰散布外はほぼ南北方向および東側に砂層が厚くなり、特に南側の土層観測溝では顕著になる。一般に河跡湖はその上流側と下流側に砂層を伴なっている。また洪水時に主水路を越えて氾濫すると、氾濫原上の流速は主水路の中と違って非常に小さいので、運搬力も小さく、砂泥などの浮流物が沈澱するので、河跡湖などの低地には砂層が堆積されやすい。また断面A-Bに見られるような湿地の基盤であるX層は東方向に傾斜し、川が蛇行するとき、その外側の曲線に沿って侵食し、曲流の内側に沿って洲を作るため河床が傾斜したものと考えられる。そこで第II・III土層側から湿地形成の主要因を検討すると(ロ)説が強いものと考えられる。旧水路は上記の条件から弁天様付近まで東西に流れ、そこで大きく曲流し、ほぼ山麓に並行した流路であったと考えられる。その後旧聖川は退化し、本遺跡地点に小規模湿地が形成されたものと考えられ、一般には十分に発達した氾濫原をもつ河川に見られるが、本遺跡付近で氾濫原が広くなっていることから見ても蛇行の条件はほぼ十分と言え、前述の説を裏付けている。以上のように湿地形成の主要因は(ロ)と言えるが、副要因として(イ)の湿地化という条件も見逃せない。聖川は通常の水量はごく小量で、湿地の維持には湧水も大きな役割を果たしたと考えられ、現在も湧水により湿地的状態にあることは裏付けとして有力な根拠になっている。しかし人間生活との関係をみると、湿地より湧水のほうをより重視すべきであろう。次に本遺跡の堆積過程を簡単に触れてみたい。(ロ)によって基本地形が形成され、X層が基盤をなしている。その上部には湿地化の前段階として静水状態における黒色粘質土層(IX)が堆積している。この上部に灰層が乗る。これらは人為的投棄・拡散によるもので、黒色土が混入し、他は燃焼灰がそのままの状態で堆積し、灰白色を呈している。またIV・V・VI層の黒色土は湿地に繁茂した植物より成る泥炭質よりなる。これらの層より植物遺体を多く検出したが、植物名は判明できなかった。これらの時期が湿地の発達が最も著しく、灰層が形成された時期は陸化して、安定していたと言えよう。これより上部は砂層が堆積し、その上に2~3回の砂礫を運搬した大洪水があり、本遺跡は完全に氾濫原の下に埋没したものと考えられる。ちなみに砂礫層は径30cm有余の亜円礫を含み、一回の洪水で30~40cmも堆積し、砂礫層は厚いところで85cmにも及んでいる。

(赤羽都夫)

2 灰層(第3図、第2・3図版)

灰及び遺物を検出した地点は表土下約120cmのところからであり、上部は直接円礫含ジャリ



第3図 灰層及び土層断面図

層になる(D-4グリット)。他は上部に青灰色粘質砂層が覆う。調査時では土層図で示したように層位的発掘は不可能に近く、灰白色灰層のみ明瞭であるのにたいし、他は壁での観察により区分できたものである。初期の灰層(Ⅴ)は黒色土混り灰白色灰層であり、Ⅵ層にみられるような純粹に近いものではなく、攪乱された様相を呈し、何度か灰を周辺にかき出した結果によるものと思われる。分布はA-4から東側に、B-3から北側へ伸びているものと思われるが、C-Dの断面をみる限り、中心はC-3・4にあり、範囲は径3.5m程度の円形に近い堆積状態を示すものと思われる。最も厚いところで28cmを計る。遺物の出土量が多い。次にⅦ層の灰白色灰層が形成される。この層は純粹な灰に近いもので、C-4グリットを中心にC-5に突出する洋梨形プラン(一点鎖線内)になり、東西に3m、南北に2.8mの範囲である。厚さ25cmを最大とする。比較的短期間それも大量の燃料が燃焼されたらしく、間層をほとんどはさまない。またB-3に東西巾約1m・厚さ5cmの同種の灰層がみられるが、前述のものより後のものであろう。この層は土器片をほとんど含まず、大型動物も若干認められるが、ウサギ・鳥等の小動物の焼骨片が出土した。Ⅷ層は遺跡の西端から南にかけ認められる層で、Ⅸ層からの流れ込みによって形成されたものと思われ、灰が混入する程度のもので、基本層序では黒色土層の範囲に含まれるものである。Ⅹ層は小さなブロック状の黒色土が混入している灰層で、範囲はB・C-3から2にかけ東傾斜にそって厚く堆積する。Ⅺ層からのかき出し、攪乱によるものと思われ、Ⅻ層との形成時期とほぼ同じ頃の所産であらう。この層から土器片に混り焼骨片の出土量が多い。さてこれらの灰は大きく見て、東西6.3m・南北4.3mの範囲に卵形に拡散されており、これらの成因を考えるとき、河跡湖に投棄という所作によってのみ形成されたものとは考えられない。灰層形成後の旧河川侵食を受けているところから、そして、黒色土層(泥灰状)の堆積状態から、陸化・沼化が繰り返され、前項でも触れたが、陸化の比較的安定した時期に一時の利用されたものと考えられる。次に時期であるが、この点層別に遺物を把握することが困難であったので明確でない。ただし遺物から縄文後期土器片を中心に、その前後のものが認められるところから、縄文後期にそのほとんどが形成されたものと考えられる。

この他、人為的になされたと考えられる遺構等は検出することができなかった。

(小柳義男)

第2節 遺物

1 土器(第4~12図、第3図版)

【出土状況】 各グリットおよび各層から出土している。特にB・C-3グリットからの出土量は他に比べ圧倒的に多い。出土範囲は未調査のB・C-2グリットに広がっているが、C-1グリットでは激減し、散布範囲の限界に近い地点であろうと思われる。発掘所見では前記のB・C-3グリットを中心に集中しており、また灰の分布範囲内に比較的多くの出土量をみた。その他のグリットの出土傾向をみると、灰白色灰層(Ⅵ)から離れるにしたがって漸減する。そ

してその傾向は南より北へ、東より西により強い。層別の把握は困難であったが、灰白色灰層(VI)からの出土は極少量で、その周辺の灰層(V・XII)に多く認められた。出土状態はすべて破損しており、器形の復元できるものは少ない。意識的に破壊したのか、破損品を放棄したのか不明であるが、出土状態からゴミ捨て場の感があるほどの集積状態であった。(矢口忠良)

[土器各論] 本遺跡から出土した土器は、わずか直径3.5m程の範囲内からではあるが、口縁部破片約500点をはじめ、かなりの量に及ぶ。ほとんどすべてが縄文後・晩期に属するものであるが、ほとんどが小破片であり、無文土器である為、図上復元も含め、完形を呈するものは無い。

このような状態の土器片を可能な限り接合させ、同一個体と確認できるものは一諸にして、口縁部で個体数を算出すると392個体を数えた。このうち無文土器が347個体と全体の89%弱を占め、有文土器は45個体である。有文土器を時期別に細分すると、そのほとんどが後期中葉～後葉のものである。

これらの土器を理解する為に、以下の分類基準によって観察し分類作業を行なった。

I 土器形態 2 口唇部形態 3 器厚 4 最大径 5 胎土 6 焼成 7 文様 8 器面調整技法
9 器面調整状態の計9項目である。項目別に基準を定めた。

I 土器形態 ここで用いた形態分類の方法は、まず口径・最大径・器高等の割合をもとに、8類型に分類し、さらに口縁部から胴部上半にかけて13類型に細分し、その組み合わせによつて器形を決定していくとするものである。胴部下半以下の破片との接合例が少ないと限定された条件下での方法である。

8類型の分類では、まず最大径を口縁部にもつものと胴部にもつものに大別できる。口縁部に最大径をもつものを最大径と器高の割合でⅠ類からⅣ類に分類した。

Ⅰ類……最大径と器高の割合が1:0.75以上のもの(第9図1~14、第12図49~51等、以下9~1~14の様に略す)

Ⅱ類……最大径と器高の割合が0.5~0.75のもの(10~24、25)

Ⅲ類……最大径と器高の割合が0.25~0.5のもの(10~27~30)

Ⅳ類……最大径と器高の割合が0.25以下のもの(10~31、32)

胴部に最大径をもつ形態を二類別した。

V類……最大径と最大径より口縫に近い部分(一般的には頸部)の最小径の割合が1:0.75以下のもの(11~34)

VI類……前述の割合が0.75以上のもの(11~35)

この他、後・晩期に特徴的に見られる土器で比較的出土量の多い注口土器をⅦ類、台付土器をⅧ類とした。

次に胴部上半を中心にして細別を試みた。まず口縁部から胴部中央にかけて屈曲のない形態をA類とした。三分類できる。

A類……ほぼ直線を呈するかやや外側するもの(9~6~8等)

A2類……内側するもの(9-9~14等)

A3類……内側の度合いが強く口縁より下に最大径をもつもの(9-1・3等)

口縁部から胴部上半にかけて屈曲する形態、即ち口縁部がくびれる形態をB類とした。口縁から屈曲部に到る部分の違いで細別される。

B1類……外側した口縁を持つ形態

B2類……直線的で内傾する形態(4-1・2)

B3類……内側する形態(5-21)

B4類……直立した口縁をもつもの(11-34)

口縁部が外側へ屈曲する形態をC類とした。

C1類……単に外屈するのみのもの(10-22~24)

C2類……外側への屈曲の下で内側への屈曲を持つB類との中間形態(12-54)

2)口唇部形態 口唇部形態については、いわゆる平口縁をa類、波状口縁や突起状のものを持つ口縁をb類とし、それぞれ細分した。

a1類……口唇断面がきちんと角をとるように調整されているもので、内傾する形態(10-15・20)水平なもの(9-3・10-32)外傾するものの3種がある。

a2類……断面が丸みをおびるもので肥厚するもの(9-4・6等)とそうでないもの(9-12・14等)の2種がある。

a3類……口唇部が尖るもの(11-38)

b1類……棒状の工具で押さえたり、刻み目をつける事で細かな波状口縁を呈するもの(11-39~42)

b2類……大きな波状口縁で数個の山状突起をもつもの(5-25・26)

b3類……水平な口縁に1~数個の突起が施されるもの(11-37・38・12-49・50)

3)器厚 器厚については測定する位置でかなり値が異なる等の問題が生じるが、原則として口唇部より5cm下位で、その土器厚平均値として妥当と考えられる位置を測定した。

4)最大径 図化されているもの、最大径の測定可能な個体はcm単位で、やや測定が不正確と考えられる場合は5cm単位の同心円測定表に当てはめて測定した。容量の問題では最大径とともに器高が重要な要素であるが、底部から口縁部まで測定できる個体が極く限られるので今回は分類項目から除外した。

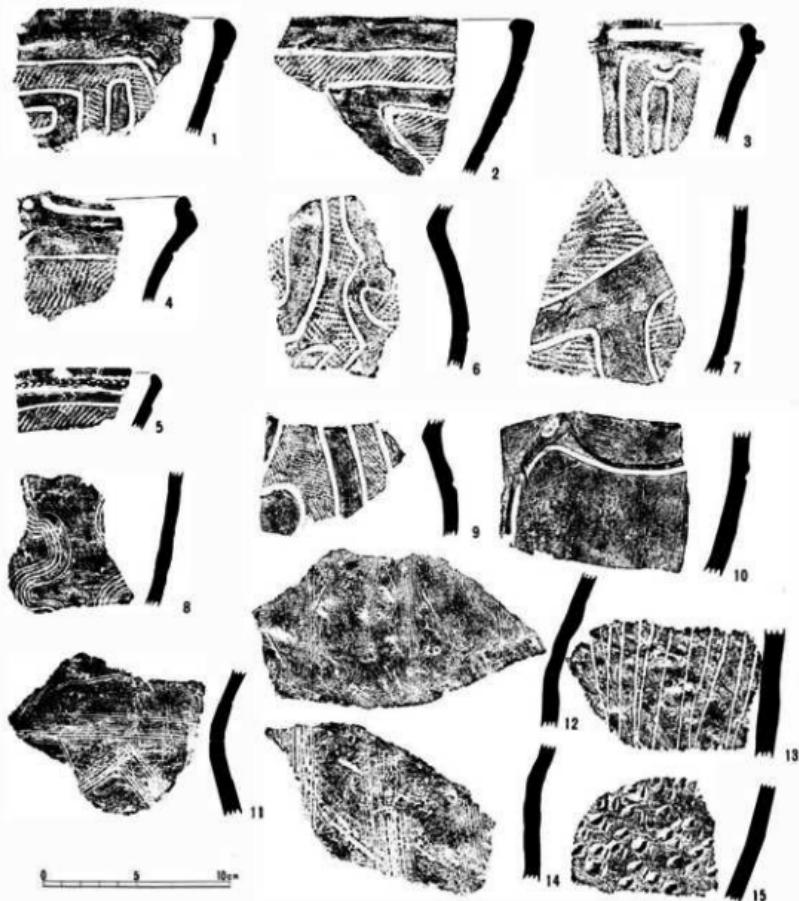
5)胎土 胎土については混入物の正確な判定をするまでには致らず、砂粒等の混入度合を器面及び断面で観察し、以下に分類した。

a……ほとんど砂粒等の混入の無いもの

b……混入物はあるがその割合の低いもの

c……かなり多量に混入物を含むもの

6)焼成 焼成度は保存状態との関連もあり不明確な部分もあるが、焼きしまりの度合によって分類した。



第4図 第1群土器拓影

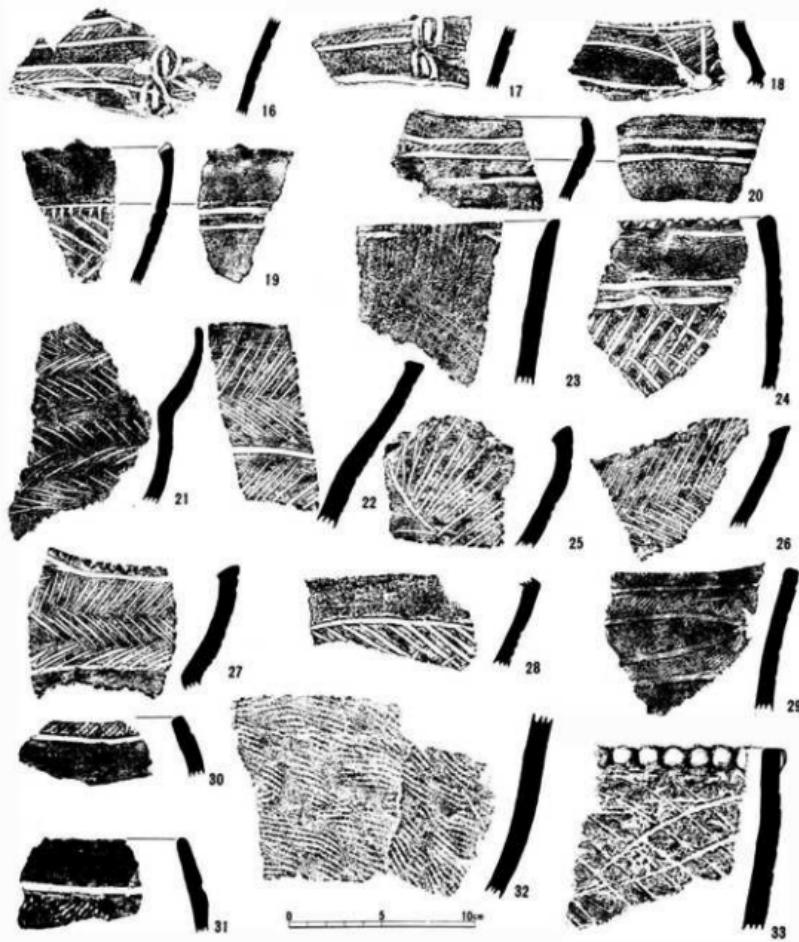
a……焼成度良好で器面・断面ともに風化のみられないもの

b……断面等にやや風化のみられるもの

c……器面・断面に風化がすすみ、かなりぼろぼろ崩れるもの

7文様 有文土器については個々の土器について文様構成、施文技法、施文順位等を観察してみたが、全体を通しての類別にまで及ぶ事はできなかった。

8)器面調整技法 土器内面及び外面に遺存した痕跡により技法を分類し、調整方向と組み合わせて示した。



第5図 第2群土器拓影

S……指頭でおさえる等の技法

N……器面を整える為の大まかな調整技法でヘラ状工具による単位を観察できるものと刷毛目状の痕跡を観察できるものがある。

M……器面の入念な調整あるいはかなり器面が硬化して後の調整の結果、表面の密度が増して光沢の生じるまでの調整技法。

調整方向はT(縦)Y(横)N(斜)とした。

9) 器面調整状態 土器内外面の調整状態を三段階に分けた。

- a……器面にはほとんど凹凸のない状態
- b……凹凸をかなり残したもの
- c……粘土の積み上げ痕を残すもの

またそれの中間の調整状態を a b , b c として分けた。

以上の分類項目、分類基準によって章末の土器観察表を作成した。これを基に時期的細分を若干試みたい。

第1群土器(第4図1~15)

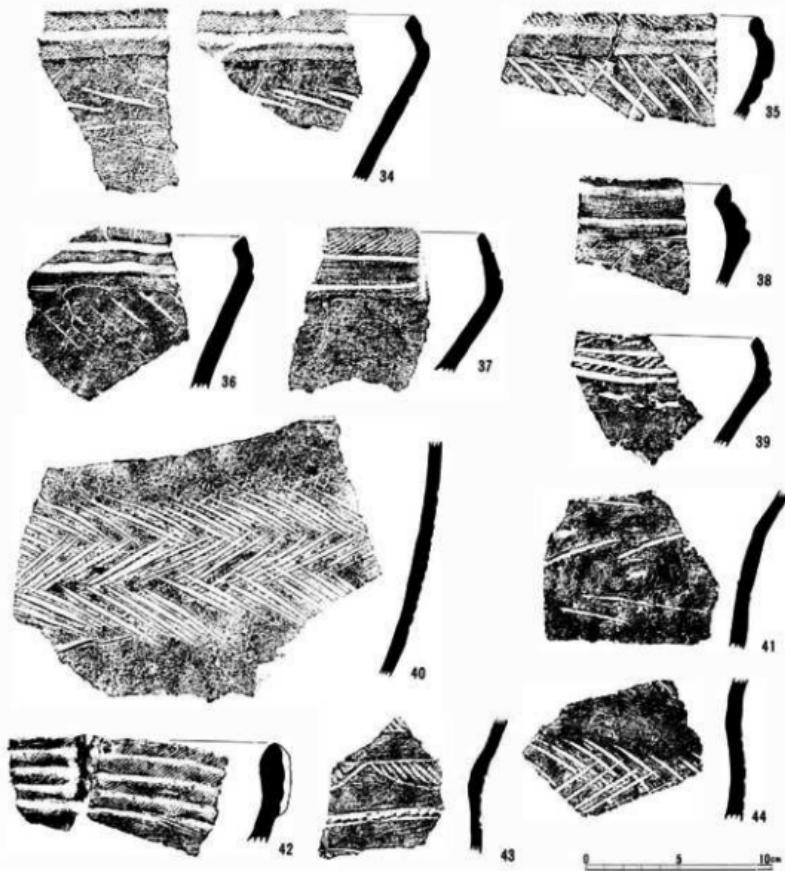
堀之内Ⅱ式期まで、後期前葉に比定される土器である。磨消繩文による区画帯を持つ土器(1~9)と条線文土器(11~14)に大別され、I類で口縁部形態はB類である。磨消繩文は6・7・9等古い段階のものも存在し時間的な幅がある。また条線文土器は櫛状工具を用いるもの(11・12・14)と単線を組み合わせるもの(13)があるが、時期的帰属を含め不明確な部分が多い。その他沈線を体部に施すもの(10)、刺突を施すもの(15)等があげられるが、15は新潟県三十槌場式土器に同様の施文方法が見られる。無文土器では内面に一条の沈線を持つ土器や、口唇部形態a3類のものなどが考えられるが明確にする事ができなかった。

第2群土器(第5図16~33、第12図49・53・55・56)

加曾利B式期、後期中葉に位置づく土器群である。この時期の古い段階(加曾利B1・2式期)では弧状沈線によって区画された間に横帶の繩文が施される文様構成(16~18・29・53)が有文土器の主体である。A1類、B類の口縁部形態を持ち、縱連対弧文(16・17)を組み合わせたものが多い。56は横帶を列点文で充填するものでこの時期に多用されるらしい。大きく張り出した胸部を持つ器形で器面調整は入念にされている。内面に沈線等の文様を施す土器が盛行するのもこの時期であるが、類例(19・20)が少ない。おそらくI類土器がほとんどである点に起因するのであろう。新しい段階(加曾利B3式期)では横帶文として綾杉文が盛行する。すでに加曾利B2式期に口縁部と頸部の間に綾杉文を施す例(19・28)が見られるが、b2類の口縁を有し、口唇部内側に隆を形成する特徴的な器形(25~27)を持ち、胸部まで綾杉文がおおう。B2類(22)とB3類(21・25~27)に口縁部形態は大別される。加曾利B式期の無文土器も明確に把握する事ができないが、I類土器のうちa2類の肥厚する口唇を持つ一群(9~4・6・9・10等)、III類土器のうちa2類(10~26・28)等が対比されよう。また粗製土器として、繩文を不定方向に施すもの(32)と口唇部に隆帯を貼付した格子目状沈線を持つ土器(33)が少量ながら作る。同じく無文土器のうち口唇部に隆帯を持つ一群(11~43・44)もこの時期の可能性が強い。

第3群土器(第6図34~39・42・43、第12図51・54)

後期後葉、曾谷式期・安行Ⅰ式期の土器である。C類の口縁部形態を持ち、幅の狭い口縁部文様帯に繩文と沈線が施されるもの(34・35・54)と、沈線のみのもの(36・51)、幅広の文様帯に繩文と弧状沈線で施文されるもの(37)等に類別される。また頸部文様帯が綾杉文(34・54)と無文化するもの(37・38)に大別され、51の様に横位に施される綾杉文が変化していくものもある。

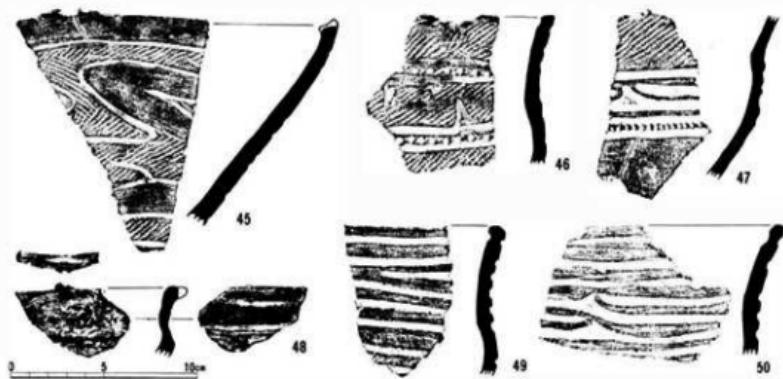


第6図 第3群土器拓影

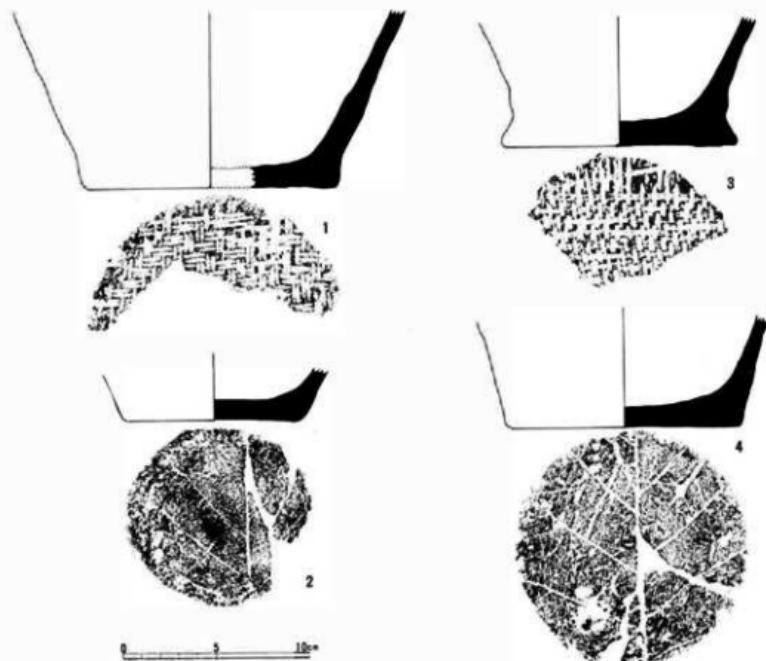
る。時期的な前後関係ははっきりしないが、晩期に口縁外側に沈線を巡らす土器が多用される事を考えると、綾杉文・縄文等が消えていく段階をより新しい要素と考える事が妥当であろう。42・43は地域的な特質がより強くなるこの時期において、より関東的な色彩の濃い土器である。無文土器では前述したC類の口縁部をもつ一群(10-22-24)と同じくC類の口縁をもち、外側に沈線を施す一群(46)が伴うと思われる。

第4群土器(第7図45-50)

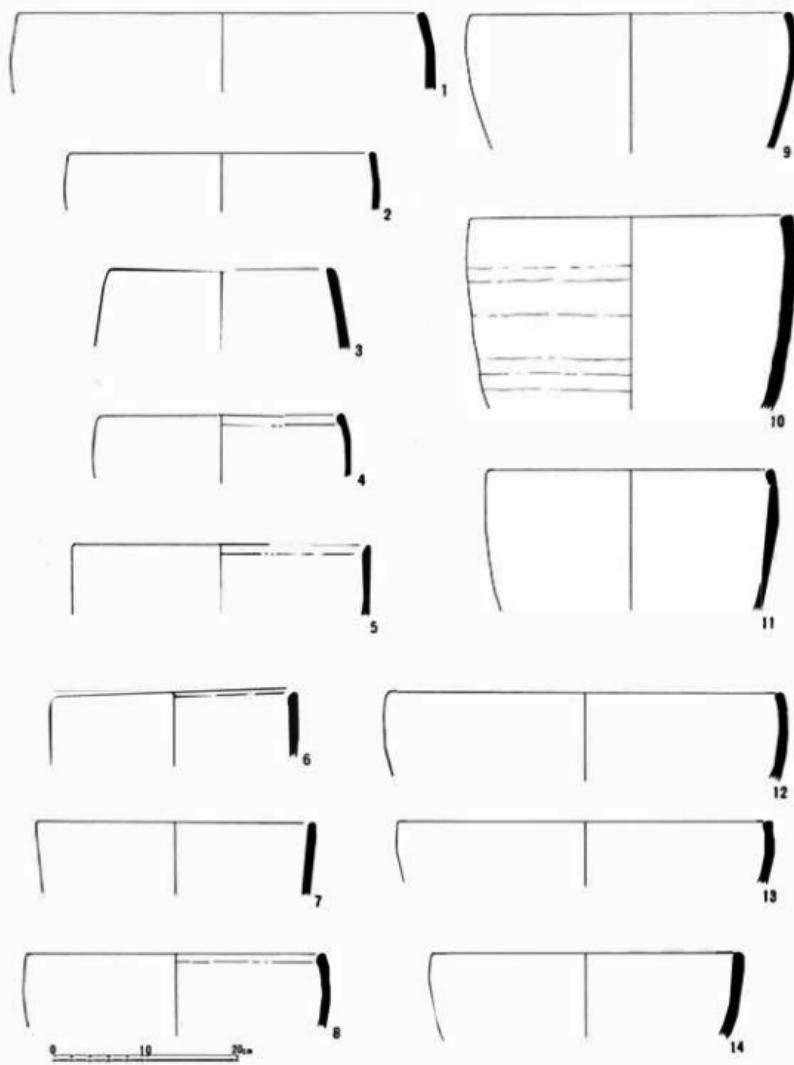
晩期の土器を一括した。大洞系の土器(45)と工字文を持つ一群(46・49・50)などが目立つ。



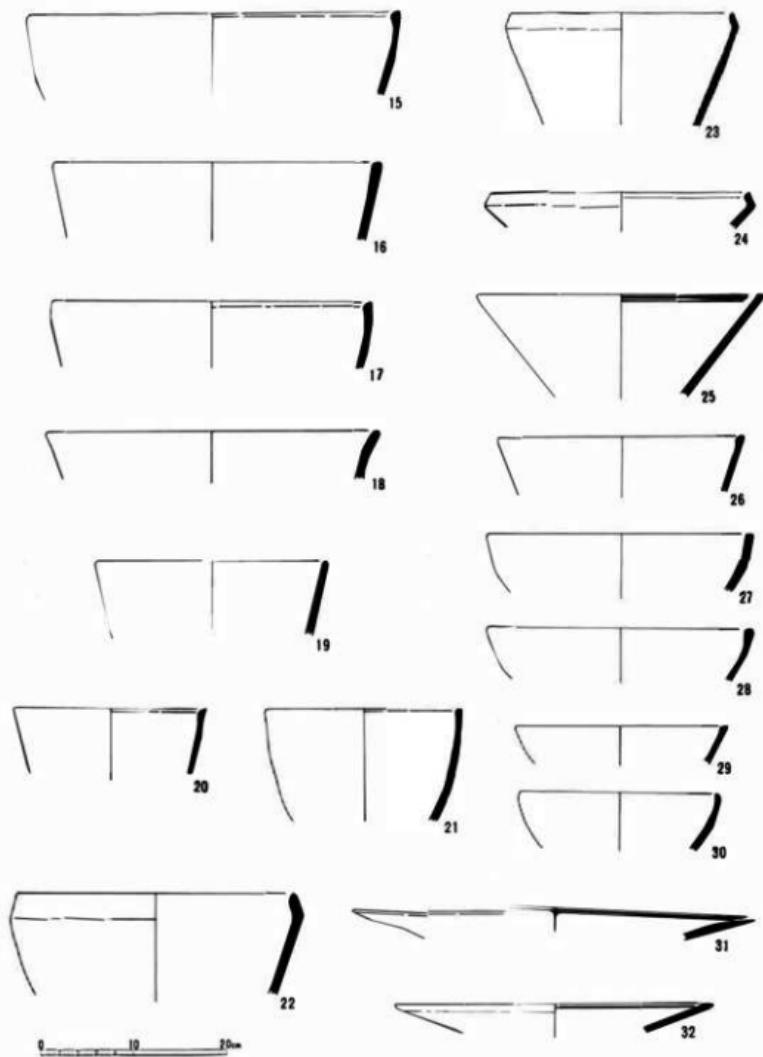
第7図 第4群土器拓影



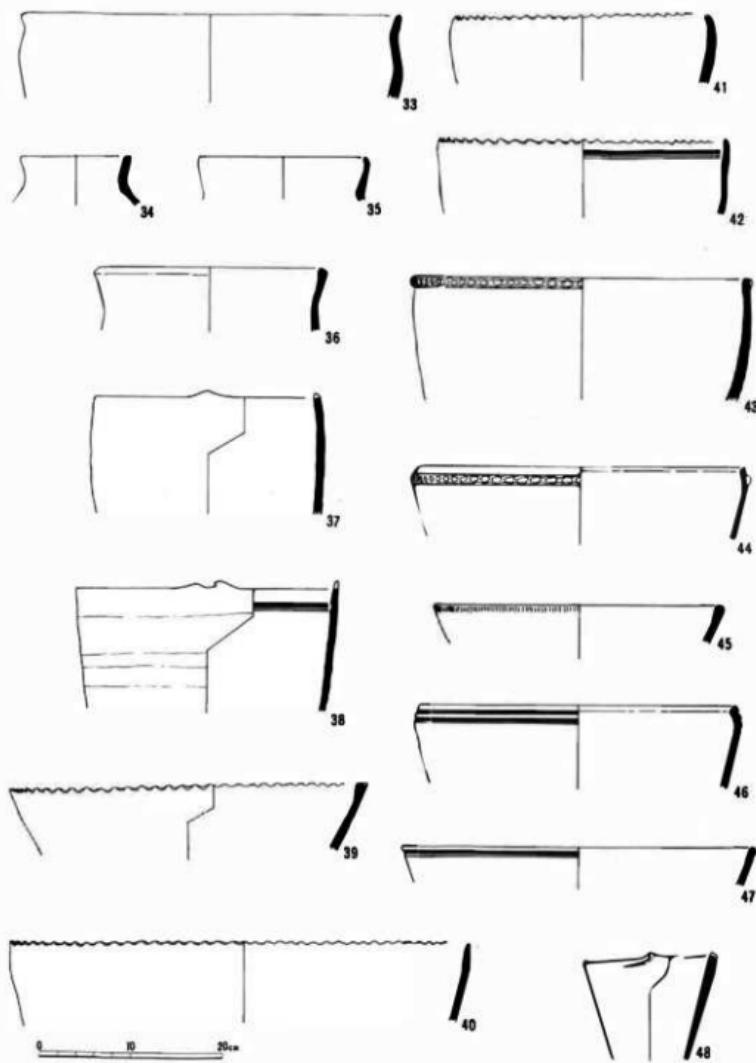
第8図 底部実測図・拓影



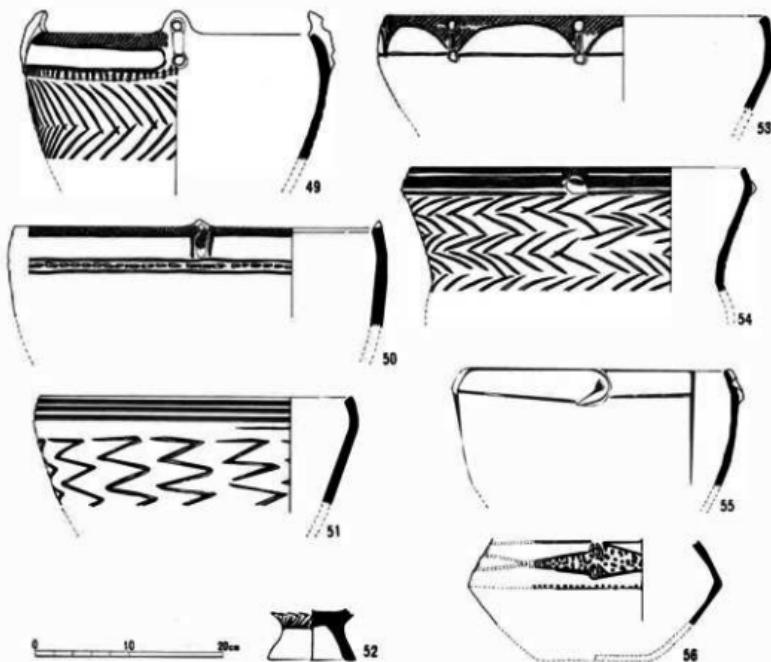
第9図 無文土器実測図



第10図 無文土器実測図



第11図 無文土器実測図



第12図 有文土器実測図

出土量が少ないので、内容を明確にする事はできない。無文土器としてb1類の口唇を持つもの(11-39-42)が考えられるが判然としない。

第5群土器

弥生時代後期清水式土器の櫛描波状文が1点出土した。

以上時期を区切って述べたが、層位・遺構等の関係が全くとらえられず、不明確・不正確な部分が多く有る。

底部(第8図1~4) 底部破片も數十個体分出土したが、胴部との接合ができ得なかった。

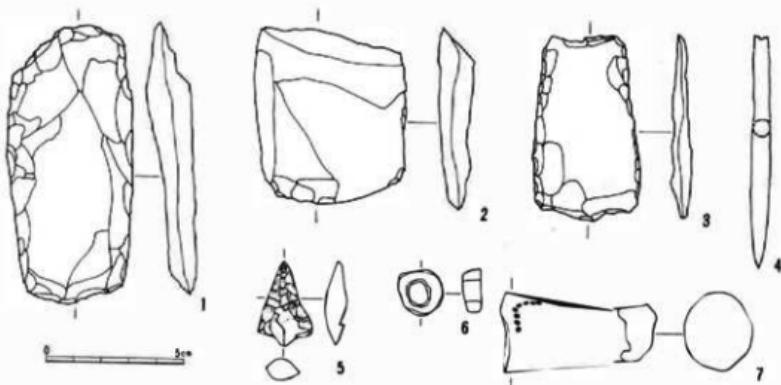
A1類……直立気味に立ち上がるものの(4)

A2類……端部が張り出して、開きながら胴部へ向かうもの(1、2)

B類……大きく胴部へ開いていくものの(3)

底面の圧痕では、編み物圧痕(1・3)、木葉圧痕(2・4)と圧痕のないものとなるが、時期、器形等への帰属は今後の課題である。

(百瀬新治)



第13図 石器・骨角器・土製品実測図

2 石器・土製品(第13図1～3・5・7)

本遺跡出土の石器類は、種類・量とも全く少ない。粘板岩製の打製石斧3点(1～3)黒曜石製石鎌1点(5)そして数点の黒曜石の剥片を得たのみである。

土製品として土偶の一部と考えられる破片が1点(7)出土した。

(百瀬新治)

3 骨角器及び獸骨(第13図4・6)

(1) 骨角器 製品になっているもの他加工痕あるものをこの類にいれる。

他の遺物同様に黒色土混り灰色灰層(V)よりの出土である。4は針穴上を欠損するが、骨針と思われる。現長8.3cm・最大径7mmで、針にしてはやや太い感じをうけるが、棒状で先端が尖る。表面全体に軸方向とほぼ逆に整形擦痕が認められるものの先端付近には認められない。多使用により磨耗したものと考えているが、この付近の風化が他より著しく骨粉化しつつあるためかとも思える。6は骨の一部を輪切りにしたもので、内面の一部に顕著な磨耗痕が認められる。この他風化が著しくはたしてこの類に含めていいものかまようところであるが、他と異なって毘状の器具を思わせる偏平なものがある。第3図版の鹿角は基部付近で、必要部分を切り取られた残渣であろう。切り口は数回の不連続的に鋭利な道具により擦り切られている。

(2) 獣骨 焼かれ白青色ないし白灰色を呈する獸骨は第V層の中心部に多く見られ、その破片は小さい。この層周辺部から出土したものは、焼かれた痕跡がなく茶褐色に近い出土色を呈していたし、焼骨に比べ大形のものが多い。そしてその出土範囲は、灰層分布内に限られている。それ故に灰層中心部付近に残されたもの——火の中に投下されたものは小型動物(この判定は焼却されているためと骨片があまりにも小さいため無理かもしない)又は肉に付属する

器官先端骨であろうと推定している。これにたいし外周縁から出土したものは、より大きな骨片で、本来の姿を残すものではなく、鰓を抜き食用にしたためか採集したものすべては不規則な破片の星をなしていた。

それ故困難な判別であったであろうが、顕著な器官部位のみ鑑定していただいたので、その種類と器官及び確認された個数(内)を以下に記する。

日本鹿 跖骨(1)・距骨(3)・胫骨(1)・中手骨(2)・中足骨(2)・腰椎(1)・肋骨(1)・桡骨(1)・上腕骨(3)・第1頸椎(2)・頸骨(2)・角(3)のほか、破片骨はこの種のものが最も多く、少なくとも幼・成融合せて5頭以上のものがある。

猪 距骨(1)・中足骨(3)・桡骨(1)・大腿骨(1)・第2頸椎(2)・頸骨牙(1)でこれも3頭以上ある模様である。

タヌキ 煙骨(1)

この他灰層を水洗して得た資料の中に、ウサギ・鳥の骨が若干含まれているようであり、淡水産のシジミ貝殻を確認している。

ちなみにこの遺構を形成した時代は、鹿を中心に、そして猪を混じえた大型獣を捕獲していたものと、この遺体に近づくタヌキと狩途中で獲ったウサギ・鳥等の小動物と思える。しかし、日本列島の猛獸である熊・オオカミの痕跡は残していない。何故だろうか。

尚カモシカをもとの考えがあったが、これにはすぐ解決した。この種は標高で800m以上に生息するという。本遺跡立地標高は600mに満たない(今、千曲川東山山系では500m付近で数個体が確認されている)地点であるので期待する方が無理である。 (矢口忠良)

4 自然遺物

専門家に依頼した訳ではないが、灰層を水洗い及び調査地冠水第Ⅲ・第Ⅳ層上部中から得た資料である。これ故浮くものは新しいと判断し除外した。この操作の中で調査協力者を混え判定した結果、オニグルミ・クリ・桃・ドングリ等の実及びその皮であった。

先のシジミ貝と同様に直接この遺構と結びつけることは無理であるが、この遺跡復元に直接考えるに重要な資料と考えている。 (赤羽郁男)

引用 参考文献

- 1 永峯光一他『佐野』長野県考古学会研究報告 1967
- 2 関 孝一「長野県埴科郡保地遺跡発掘調査概報」『考古学雑誌』51-3 1966
- 3 藤沢宗平他『離山遺跡』穗高町教育委員会 1972
- 4 原 嘉藤他『松本市女鳥羽遺跡緊急発掘調査報告書』松本市教育委員会 1972
- 5 森嶋 稔他『更級埴科地方誌』第二巻 更級埴科地方誌刊行会 1978
- 6 平野和男・麻生 優他『西貝塚』鶴田市教育委員会 1961
- 7 柳田敏司他『神明貝塚』庄和町教育委員会 1971

大清水遺跡出土土器觀察表

番号	器形	口径	器厚	最大径	胎土	焼成	文様	内面整形法	整形状態	外面整形法	整形状態
1	I A ₁	b:	8	36~40	b	a	無文	YN→YM	b	YN·NN→M	b
2	I A ₂	a:			b	b	*	YN·NN	b	YN→M	b
3	I A ₃	a:p	8		b	b	*	YN·NN→YM	b	YN·NN	b
4	II B ₁	b:	6	21~25	b	b	*	YM	b	YN	b
5	I B ₂	b:		51~	b	a	*	YN→YM	b	YN	b
6	I C ₁	a:p	9	51~	b	a	*	YN→YM	b	YN→YM	b:a
7	I B ₃	b:	7		b	a	*	YN·NN→(M)	b	YN·NN→M	b:a
8	I C ₂	b:	6	36~40	b	a	*	NM·YM	a	YM·NM	b
9	I A ₄	a:	7		b	b	*	YM	b	YM	a
10	I C ₃	a:p	5	26	a	a	*	YM	a	YN→YM	a
11	I A ₅	a:	7	36~40	b	a	*	YM→YM	b	YM	b
12	I A ₆	a:	7	36~40	b	b	*	YN	c	YN·NN→(YM)	b
13	I C ₄	a:	6	31~35	b	b	*	YN	b	YN·NN	c
14	II A ₁	a:			c	a	*	YN→YM	b:a	YN·NN	b
15	I A ₇	a:p			b	b	*	YN	b	YN·NN→YM	b
16	I A ₈	b:	6		b	b	*	YN		YN→YM·NM	b
17	I A ₉	a:p	9		b	b	*	YN→YM	b	NN	b
18	II C ₁	a:p	6	36~40	b	a	*	YN→YM	b:a	YN·NN→YM	b
19	I A ₁₀	a:p	9		c	b	*	YN→(M)	b	M	b
20	I A ₁₁	a:	9		b	a	*	YN→YM	b:a	YN·TN→M	b
21	I B ₄	a:外			b	b	*	NN·S→M	b	YN→M	b
22	I B ₅	a:外	7	24	b	a	*	YN·NN→M	b:a	YN→M	b
23	I A ₁₂	a:	10	31~35	c	b	*	(S)	b	YM	b
24	I A ₁₃	a:	9	41~45	b	b	*	YN·S	b	YN	b
25	I C ₅	a:外	6	16~20	b	a	*	YN→YM	b:a	YM	b:a
26	II C ₂	a:	9		a	a	*	YN→YM·NM	b	YM·NM	b
27	I B ₆	a:外	6	16~20	b	a	*	YN M	b:a	YM	b:a
28	I A ₁₄	a:	10	31~35	c	a	*	(S)→YM	b	YN→M	b
29	II C ₃	a:	7	24	a	a	*	YN·NN→M	b:a	YN·NN→M	b
30	I B ₇	a:	9		b	b	*	YN→(M)	b	YN→M	b
31	I A ₁₅	a:p	8		b	b	*	YN		YN→(M)	b
32	I A ₁₆	a:p	10	36	c	b	*	YN→(M)	b	YN→M	b
33	I A ₁₇	a:	9		b	a	*	YN→(M)	b	YN	b
34	I C ₆	a:p	6	28	b	a	*	YN→YM	b:a	YN→M	b
35	I C ₇	a:	6		b	a	*	YN	b	YN	b
36	I A ₁₈	a:	11	30	b	b	*	YN·NN(S)	b	YN·TN	c
37	I A ₁₉	a:p	8	35	b	a	*	YN·NN·TN	b	YN·NN→(M)	b
38	I C ₈	a:	7	32	b	a	*	YN→YM	b:a	YN→YM·NM	b:a
39	II B ₂	b:	7	31	b	b	*	YN	b	YN·NN	b
40	I A ₂₀	b:	10	51	b	b	*	YN·NN	b	YN·NN	b
41	I C ₉	a:	6	46~50	b	a	*	YN·NN→(M)	b:a	YN→(M)	b
42	I A ₂₁	a:p	9		b	b	*	YN	b	YN·NN→M	b
43	II C ₄	a:p	7		b	b	*	YN	b:a	YN	b
44	I A ₂₂	a:p	8	36~40	b	a	*	YN·NN	b	YN·NN→(M)	b:c
45	I A ₂₃	b:	10		c	b	*	YN·NN	b	?	
46	I C ₁₀	a:	7	31~35	c	b	*	YN	b	YN	b:c
47	I A ₂₄	a:p	8		b	a	*	YN·NN	b	YN	b
48	I A ₂₅	a:	9		b	b	*	YN	b	YN·NN	b:c
49	I A ₂₆	b:	8		b	a	*	YN→(M)	b	YN·NN→YM·NM	b
50	I C ₁₁	a:	8		b	a	*	YN	b	YN→YM	b

番号	器形	口径	器厚	最大径	胎土	焼成	文様	内面整形法	整形 状態	外面整形法	整形 状態
51	I Ar	b ₁	7		b	a	無文	YN	b	YN・NN	b
52	I Ar	a ₂	10		b	a	*	YN	b	YN・NN	b
53	III Cr	a ₂	8		b	a	*	YN→(M)	b c	YN→(M)	b
54	I Ar	b ₁	9		c	a	*	YN→YM	b	YN・NN→(M)	b
55	I Ar	a ₂ 平	7	36~40	b	b	*	YN	b	YN→(M)	b
56	I Cr	a ₂ 内	8	36~40	b	b	*	YN	b	YN→(M)	b
57	I Ar	a ₂	8		b	a	*	YN→M	b	YN	b
58	I Br	b ₂	9		b	a	*	YN→YM	b a	YN→M	b
59	VI Br	a ₂	10	41	b	a	*	YN→YM	b	YN→YM	b
60	I Ar	a ₂	7	22	b	a	*	YN→YM	b a	YN→YM・NM	b a
61	II Ar	a ₂ 平	8	28	c	a	*	YN・NN	b	YN	b c
62	I Ar	a ₂ 内	6	34	b	a	*	YN・NN→YM	b a	YN→YM	b
63	I Ar	a ₂ 内	10	40	b	b	*	YN	b	YN	c
64	I Ar	a ₂ 平	9	44~45	b	b	*	YN・NN	b	NN→M	b
65	I Ar	a ₂	7		b	a	*	YN	b	YN・NN→YM	b
66	I Ar	a ₂ 内	9	26~30	c	a	*	YN・NN→YM	b	YN	b c
67	II Ar	a ₂ 平	10	34	c	b	*	YN・NN	b	YN・NN	b
68	不明	a ₂	6		b	a	*	YN→YM	b a	YN→YM	b
69	不明	a ₂	7	46~50	b	a	*	YN→YM	b a	YN・NN→YM	b
70	I Ar	a ₂	11		b	b	*	YN→YM	b	YN・NN	c
71	I Ar	a ₂ 内	6	36~40	b	a	*	YN・NN	b a	YN→YM	b
72	I Ar	a ₂ 平	7		b	b	*	YN・NN	b	YN→M	b
73	I Ar	a ₂	9	36~40	b	b	*	YN・NN	b	YN	b
74	I Ar	a ₂	7	30	b	a	*	YN	b	YN→M	b a
75	II Ar	a ₂ 平	6	31~35	b	b	*	YN・NN→YM	b	YN・TN	b
76	I Ar	a ₂	9	31~35	b	a	*	YN・NN→YM	b	YN→YM	b c
77	I Ar	a ₂ 内	7	36~40	b	a	*	YN	b	YN→M	b
78	I Ar	a ₂ 平	10	15~20	b	b	*	YN・NN	b	YN→TM?	c
79	I Ar	a ₂	9	46~50	b	b	*	YN	b	YN・NN	b
80	I Ar	b ₂	7		c	b	*	YN	b	YN・TN	c
81	I Ar	a ₂	9		b	b	*	YN・YN→(M)	b	YN・NN	b
82	I Ar	b ₂	10		c	b	*	YN	b	YN	b c
83	I Ar	a ₂ 平	6		b	a	*	YN	b	YN・NN→M	b
84	II Ar	a ₂ 平	6	26~30	b	a	*	YN	b	YN→YM	b
85	I Ar	a ₂			b	a	*	YN→YM	c	YN→YM	b
86	II Ar	a ₂ 平	9		c	b	*	YN・NN	b	YN・NN・S	c
87	I Ar	a ₂	7		a	a	*	YN→YM	b a	NM・YM	b
88	I Ar	a ₂	6		b	a	*	YN→YM	b	YN→YM	b
89	I Ar	a ₂ 平		36~40	b	b	*	YN	b a	YN	b
90	I Ar	a ₂	7	41~45	b	a	*	YN→NM・YM	b	YN・NN→YM	b
91	I Ar	a ₂	7	25	b	a	*	YN・YM	b a	YN→YM・NM	b
92	I Ar	a ₂ 内	8	36~40	b	a	*	YN→YM	b a	YN→YM	b
93	I Ar	a ₂ 内	7	31~35	b	a	*	YN→YM	b a	NN→YM	c
94	I Ar	a ₂ 外	7		b	a	*	YM	b a	YN→YM	b
95	I Ar	a ₂ 平	7		b	a	*	YM	b a	YM	b
96	II Ar	a ₂ 内	5	21	b	a	*	YN→YM	b	YN→YM	b c
97	I Ar	a ₂	8		b	b	*	YN	b	YN→YM	b
98	I Ar	a ₂	8	36~40	b	a	*	YM	b a	YN→YM	b
99	I Ar	a ₂ 内	9	34	b	a	*	YM	b	YN→YM	b
100	II Ar	a ₂ 内	8		b	a	*	YN→YM・NM	b a	NN→YM	b

番号	器形	口形	器厚	最大径	胎土	焼成	文様	内面整形法	整形状態	外面整形法	整形状態
101	I Ar	a:平	7	31~35	b	a	無文	YN→YM	b a	NN·YN→YM	b
102	I Ar	a:平	9		a	a	*	YN→YM	b a	NM	b a
103	I Ar	a:内	8		b	a	*	YN→YM·NM	b a	YN→TM	b c
104	II Ar	a:内	7		b	a	*	YN→YM	b a	YN·NN→M	b
105	I Ar	a:内	7	26	b	a	*	YN→TM	b a	YM·NM	b
106	I Ar	a:	7		b	a	*	YN·S	b	YN·TN→TM	b
107	I Ar	a:	8		b	a	*	YN→M	b a	YN→TM	b
108	I Ar	a:内	8	26~30	b	b	*	YN→(M)	b a	YN·(TM)	b
109	I Ar	a:	7	29	b	a	*	YN·NN→(M)	b a	TN	b c
110	I Ar	a:平	8		b	a	*	YN·NN	b a	YN→YM	b c
111	I Ar	a:外	7	31~35	b	a	*	YN→YM	b a	YN→YM	b
112	II Ar	a:平	7	21~25	c	b	*	YN→M	b a	NN→M	b
113	I Ar	a:平	5		b	b	*	YN	b a	YN→NM	b
114	I Ar	a:内	8	21~25	b	a	*	YN→YM	b a	YN→NM	b
115	II Ar	a:内	8		b	a	*	YN	b a	NN·TN→YM	b
116	I Ar	a:	8		b	b	*	YN→YM	b	YN→M	b a
117	I Ar	a:平	7	21~25	b	a	*	YN→YM	b	YN→NM	b
118	I Ar	b:	6	14	b	b	*	YN	b	YN·TN	b
119	I Ar	a:	8	36	b	a	*	YN→M	b	YN·TN→YM	b
120	I Ar	a:	6	36~40	b	a	*	YN→YM	b	YN·NN·M	b
121	I Ar	b:	10	28	b	b	*	YN→(M)	b	YN·NN·M	b
122	I Ar	b:	8	29	b	b	*	YN·NN	b c	YN·TN→TM	b
123	I Ar	a:	7		b	a	*	YN·TN→M	b a	YN→TM	b
124	I Ar	a:	9	36~40	b	a	*	YN→(M)	c	YN	c
125	I Ar	b:	7		b	a	*	YN→M	b	YN·NN→(M)	b
126	I Ar	a:	7		c	a	*	YN→YM	b a	NN·(NM) YN	b
127	III Ar	a:	9		b	a	*	YM·NM	b a	YN→YM	b a
128	V B	a:平		18	b	a	*	YN→YM	b a	YM·NM	b a
129	I Ar	a:	9	31~35	b	a	*	YN·NN	b	YN·NN→TM	b
130	I Ar	a:平	6		b	b	*	YN→(M)	b a	YN→TM	b
131	I Ar	b:	6		b	b	*	YN→(TM)	b a	YN·NN	b c
132	I Ar	a:	8		b	a	*	YN→(M)	b	YN·NN	b
133	I Ar	b:	9		b	a	*	YN→M	b	YN	b
134	I Ar	a:	8	26~30	b	c	*	YN	b a	YN	b
135	I Ar	a:	8		b	b	*				
136	I Ar	a:平	6	31~35	b	a	*	YN→YM	b	YN→YM	b
137	I Ar	a:平	6	21	b	a	*	YN→YM	b	YN·TN→M	c
138	I Ar	a:内	8	26~30	b	a	*	YN·TN	b a	YN→(M)	b c
139	I Ar	a:平	10		b	b	*	YN·TN→(M)	b a	YN·TN	c
140	I Ar	a:	7	21~25	b	a	*	YN·NN	b a	YN·NN→YM	b
141	I Ar	b:	11	31~35	b	a	*	YN·NN→YM	b	NN→YM	c
142	I Ar	a:	9	31~35	b	b	*	YA·NN·M	b a	YN·NN	c
143	I Ar	b:	9		b	a	*	YN·TN→M	b	YN→YM	b
144	I Ar	a:	7	21~25	b	a	*	YN·NN·M	b a	YN·NN→M	b
145	I Ar	a:内	9		b	a	*	YN→YM	b	YN·TN→NM	b
146	II Ar	a:平	7	16~20	b	a	*	YM·NM	b a	YN·NN→YM	b a
147	I B	a:	9	31~35	b	a	*	YN·NN→YM	b	YN→YM	b
148	I Ar	a:	11	33	b	a	*	YN→YM	b	YN·NN→YM	b
149	I Ar	a:内	7	30	b	a	*	YN·NN→YM·NM	b	YN·NN·TN→YN·NM	b
150	I Ar	a:平	10	42	b	a	*	YN→(M)	b	YN·TN→(YM)	b a

番号	器形	口径	器厚	最大径	胎土	焼成	文様	内面整形法	整形状態	外面整形法	整形状態
151	Ⅲ Ar	az	7	35	c	a	無文	YN→YM・TM	b a	YN・NN	b
152	I Ar	ad内	7	34	b	a	*	YN→YM	b	YN→M	b
153	Ⅱ Ar	az	6	27	b	a	*	YN→YM	b a	YN・NN→(YM)	b
154	I Ar	az	9	33	a	a	*	YN→YM	b	YN→NM・YM	b
155	Ⅲ Ar	az	7	21	b	a	*	YN→YM・NM	b a	YM	b a
156	I Ar	az	7	38	b	a	*	YN→YM・NM	b	YN・NN	b
157	Ⅱ Ar	ad内	7	24	a	a	*	YN・NN→YM	b	YN→YM・TM	b
158	I Ar	az	8	32	b	a	*	YN・NN→YM	b	YN・NN→M	c
159	I Ar	ad内	7	40	b	a	*	YN・TN→YM	b	YN→TM	b
160	Ⅱ Ar	az	6	36	b	a	*	YN・TN→YM	b a	YN→YM	b
161	I Ar	az	7	31~35	b	a	*	YN・S→YM	b	YN・NN→NM	b
162	I Ar	ad内	7	b	b	*	YN→(YM)	b	YN・NN→(YMD)	b c	
163	VBs	az	8	26~30	b	a	*	YN→YM・NM	b	YN→(M)	b
164	V Ar	az	7	b	a	*	YN→YM	b	(YN)NN→YM・NM	b	
165	I Ar	a平	8	31~35	b	a	*	YN→(M)	b a	YN→YM	b
166	Ⅱ Ar	a平	6	31~35	b	a	*	YN	b a	YN	b c
167	I Ar	az	6	41~45	b	a	*	YN→(M)	b	YN・NN	c
168	I Ar	a平	7	26~30	b	a	*	YN・NN	b a	YN・NN→(M)	b
169	Ⅲ Ar	az	7	b	c	*	(YN)	b	YN→M	b	
170	I Ar	az	8	31~35	b	a	*	YN・NN→M	b	NN→(TM)	b
171	I Ar	a平	7	26~30	c	b	*	M	b	YN・NN	c
172	Ⅱ Ar	a平	8	b	b	*	YN→(M)	b a	YN→M	b	
173	I Ar	az	8	b	a	*	YN	b	YN・NN→M	b	
174	Ⅱ Ar	a平	7	29	b	a	*	YN・TN	b	YN→(M)	b
175	I Ar	ad内	8	b	a	*	YN→(M)	b a	YN→YM	b	
176	I Ar	az	7	b	a	*	YN・TN→YN	b	YN→TM	b	
177	I Ar	az	8	41~45	b	a	*	YN・TN→YN	b	YN→M	b
178	I Ar	az	8	21~25	b	a	*	YN・S→YM	b a	YN・NN→M	b
179	I Ar	az	10	46~50	b	a	*	YN→(YN)	b a	YN	b
180	I Ar	a平	9	31~35	b	b	*	YN	b	YN	b c
181	I Ar	ad内	6	b	a	*	YN・NN	b a	YN→M	b	
182	I Ar	b	8	b	a	*	YN→M	b	YN→M	b c	
183	I Ar	az	7	b	b	*	YN	b a	YN	c	
184	I Ar	ad内	6	b	a	*	YN→(NM)	b	YN→NM・TM	b	
185	I Ar	az	9	26~30	b	a	*	YN→YM	b	YN→M	b
186	I Ar	az	6	b	a	*	YN→YM	b	YN・NN→NM	b	
187	I Ar	a平	6	b	b	*	YN	b	YN・NN→M	b	
188	I Ar	ad内	7	b	a	*	YN	b	YN→(M)	b	
189	I Ar	az	7	b	b	*	YN→(M)	b a	YN・NN	b	
190	I Ar	az	7	b	b	*	YN・NN	b	YN	b	
191	I Ar	az	7	26~30	b	b	*	YN→(M)	b a	YN→YM	b
192	I Ar	a平	9	b	a	*	YN	b	YN→(YMD)	b	
193	I Ar	ad内	7	36~40	b	a	*	YN	b a	YN	b c
194	I Ar	a平	8	31~35	b	a	*	YN→YM	b	NN→YM	b
195	I Ar	az	7	b	a	*	YN・NN	b a	NN→M	b	
196	I Ar	az	9	b	b	*	YN→YM	b	YN→YM	b	
197	I Ar	b	7	b	a	*	YN→YM	b	YN	c	
198	I Ar	az	8	b	a	*	YN→(YM)	b	YN→(M)	b	
199	I Ar	ad内	7	b	b	*	YN	b	YN→M	b	
200	VBs	az	9	b	a	*	YN	b a	YM	b	

番号	器形	口唇	器厚	最大径	胎土	焼成	文様	内面整形法	整形状態	外面整形法	整形状態
201	不明	a:	7		b	a	無文	YN→(M)	b a	YN→YM・NM	b
202	II A ₂	b:	11	33	b	a	*	YN・NN	b	YN	b
203	I A ₂	a 内	10	35	b	a	*	YN	b a	YN	c
204	I A ₂	a 紗	7	21~25	b	a	*	YN→M	b	YN	c
205	I A ₂	a:	8	34	c	a	*	YN・NN→(M)	b	YN・NN	c
206	I A ₂	a 平	6	26~30	b	a	*	YN・NN→YM	b a	YN→YM・NM	b
207	I A ₂	a:	7	31~35	c	a	*	YN	b	YN	c
208	I A ₂	a:			b	a	*	YN→YM・NM	b a	YN→YM	b
209	I A ₂	a:	6		b	a	*	YN	b	YN→M	b
210	I A ₂	a:		26~30	b	a	*	YN→YM	b a	YN	b
211	I A ₂	a:	7		b	a	*	YN→YM	b a	YN・NN→YM	b
212	III A ₁	a 平	10	31	b	a	*	YN・NN→YM	b a	YN・TN→(YM)	b a
213	I A ₁	a 平	7		b	a	*	YN・NN→YM	b	YN	b
214	I A ₁	a 紗	7	31~35	c	a	*	YN・NN	b	YN・NN→NM	b c
215	V B ₁	a 平	8		b	a	*	YN	b	YN・NN	b
216	V B ₁	a:	7		b	a	*	YN→(M)	b	YN→YM	b
217	I A ₁	a 平	7		b	b	*	YN・NN	b	YN→YM・NM	b
218	I A ₁	a 内	6	26~30	b	b	*	YN	b	YN・NN→M	b
219	I A ₁	a 平	8	31~35	b	b	*	YN・NN	b		b c
220	I A ₁	a 平	9	36	b	a	*	YN・NN	b	YN・NN→(M)	b c
221	I A ₁	a 内	9	39	b	a	*	YN	b	YN→(M)	c
222	I A ₁	a:	7	26	a	a	*	YN・NN→(M)	b a	YN・NN→YM	b
223	I A ₁	b:	7	39	b	a	*	YN・NN→YM	b	YN・NN→(M)	b
224	III A ₁	a:	5	31	b	a	*	YN・NN→M	b a	YM・NM	b a
225	III A ₁	a 紗	9	24	b	a	*	YN→M	b a	YN	b
226	I A ₂	a:	8	31	b	a	*	YN→YM	b a	YN	b
227	I A ₂	a 平	10	29	b	a	*	YN・NN	b a	YN→(TM)	c
228	I A ₂	a:	11		b	a	*	YN・NN	b a	YN・NN	c
229	I A ₂	a 内	8		b	b	*	YN・NN	b	YN	c
230	I A ₂	b:	10	36~40	c	a	*	YN・NN	b	YN・NN	b c
231	II A ₂	a 平	9	36~40	b	a	*	YN→M	b	YN	c
232	I A ₂	b:	12		b	b	*	YN	c	YN・NN	c
233	I A ₂	a 紗	9	31~35	b	b	*	YN	b	YN・NN	b
234	I A ₂	a:	8	36~40	b	b	*	YN→YM・NM	b	YN→(M)	b
235	V B ₁	a:	8	11~15	a	a	*	YN→YM	b a	YN→YM	b a
236	I A ₂	a 紗	6	31~35	b	b	*	YN・NN	b	YN→M	b
237	I C ₁	a:	5	26~30	a	a	*	YN→M	b	YN・NN→(M)	b
238	I A ₂	a 紗	6	26~30	b	a	*	YN→(M)	b	YN→(M)	b a
239	I A ₂	a:	8		b	a	*	YN	b	YN	c
240	I A ₂	a:	8		c	a	*	YN→(M)	b c	YN・NN	b c
241	I A ₂	a:	10		b	b	*	YN	b	YN→(M)	c
242	II A ₂	a:	10	26~30	c	b	*	YN・NN	b	YN・NN	b c
243	I A ₂	a 紗	7		b	a	*	YN	b a	YN・NN→(YM)	b
244	I A ₂	a:	9		b	b	*		b	YN	b
245	I A ₂	a:	10		c	b	*	YN	b	YN→YM・NM	b
246	I A ₂	a 紗	6	26~30	b	a	*	YN→(M)	b a	YN・TN→M	b a
247	I A ₂	a 平	6	16~20	b	a	*	YN・NN	b	YN→M	b
248	I A ₂	a 内	8		b	a	*	YN	b	NN・YN	b c
249	I A ₂	a:	7	31~35	a	a	*	YN	a	YN・NN→M	b
250	不明	a:	7	44	b	a	*	YN	b a	YN→YM	b

番号	器形	口径	器厚	最大径	胎土	焼成	文様	内面整形法	整形状態	外面整形法	整形状態
251	I Ar	a:	10	36	b	a	無文	YN→M	b a	YN·NN→M	b
252	I Ar	b:	8	26~30	b	a	+	YN·NN→NM	b a	YN·NN→YM	b c
253	I Ar	a平	11	24	a	a	+	YN·NN	b	YN·NN→(M)	b
254	I Ar	a:	7	36~40	b	a	+	YN	b	YN→(NM)	b c
255	I Ar	a平	6	31~35	b	b	+	YN·NN·TN	b	YN→M	b
256	I Ar	a:	8		b	a	+	YN→YM	b	YN→M	b
257	I Ar	a平	10	26~30	b	b	+	YN	a	YN	c
258	I Ar	a内	8	16~20	b	a	+	YN→YM	b	YN·TN→M	b
259	I Ar	a平	8		b	b	+	YN·TN→YM	b	YN(S)→YM	c
260	II Ar	a平	8		c	a	+	YN	b	YN·NN	c
261	I Ar	a:	7	36~40	b	b	+	YN·NN	b c	YN·NN·S	b
262	I Ar	a:	7		a	a	+	YN·NN→YM	b	YN·NN→M	b
263	I Ar	a平	7		b	a	+	YN	b a	YN·NN	b
264	II Ar	a:	7		a	a	+	YN→M	b a	YN→(NM)	b a
265	I Ar	a平	7	21~25	a	a	+	YN→M	b	YN→M	b
266	II Ar	a:			b	b	+			YN	b
267	V Br	a:	9	26~30	b	b	+	YN	b	YN·NN→(M)	b
268	I Ar	a外	7		b	a	+	YN·NN	b	YN·NN→(M)	b
269	I Ar	a:	9	31~35	b	a	+	YN→M	b	YN→YM	b
270	I Ar	a:	9		b	b	+	YN·NN	b a	YN→M	b
271	I Ar	a平	9		b	b	+	YN	b	YN	c
272	I Ar	a平		11~15	b	a	+	YN·NN→YM	b a	YN→M	b
273	I Ar	a:	8		b	a	+	YN→YM	b	YN·TN→M	b
274	I Ar	a内	7		b	b	+	YN→YM	b a	YN→YM	b
275	I Ar	a内	8		b	a	+	YN→(M)	b a	YN	c
276	I Ar	a平	8		a	a	+	YN·NN→YM·NM	b	YN·NN→M	b
277	I Ar	a:	7		a	a	+	YN→YM	b	NN→M	b c
278	II Ar	b:	10		c	a	+	YN	b c	YN·NN	b c
279	I Ar	a平	8		b	b	+	N→(M)	b a	M	b
280	I Ar	a:	7		b	a	+	YN→YM	b	YN·NN→YM	b
281	V Br	a:	7		b	a	+	YN→YM	b	YN→YM	b
282	V Br	a平	7		a	a	+	YN→YM	b a	YN→YM	b
283	I Ar	a:	7		b	b	+	YN·NN→M	b	YN·TN→M	b
284	I Ar	a:	10		b	b	+	YN·NN→M	b	YN→YM·TM	b
285	I Ar	a:	8		c	b	+	YN	c	YN	c
286	I Ar	a平	8		b	a	+	YN·NN→M	b	YN·NN	c
287	不明	a:	6		b	b	+	YN→YM	b a	YN·NN→M	b
288	I Ar	a:	8		b	a	+	YN→M	b	YN·NN→YM	b
289	I Ar	a:	8		a	a	+	YN→YM·NM·TM	a	YN→YM·NM	b
290	I Ar	a:	7		b	b	+	YN→YM	b	YN→YM	b c
291	I Ar	a平	7		b	a	+	YN→(M)	b	YN·NN→(M)	b
292	V Br	a:	8		b	a	+	YN·NN→M	b	YN·NN→M	b
293	I Ar	a:	7		b	a	+	YN→YM	b a	YN·NN	b
294	II Ar	a平			b	a	+	YN	b a	YM	b
295	I Ar	a:	6		c	a	+	YN→YM	b	YN→M	b
296	I Ar	a:	8		a	b	+	YN·(TN)→(M)	b	YN→TM	b
297	I Ar	a:	8		b	a	+	YN(TN)→YM	b	YN·NN→YM	b c
298	I Ar	a:	7		b	a	+	YN·NN	b	YN·TN	b
299	II Ar	a:	10		c	b	+	YN·NN	b c	YN·NN	b c
300	I Ar	a:	8		b	a	+	YN→YM·NM	b	YN·NN→YM	b c

番号	器形	口径	器厚	最大径	胎土	焼成	文様	内面整形法	整形 状態	外面整形法	整形 状態
301	I Ar	a:	6		b	a	無文	YN・NN	b	YN→M	b
302	I Ar	a:	7		b	a	+	YN・NN	b	YN・NN	b c
303	I Ar	a:平			a	a	+	YN→YM	b	YN・NN→M	b
304	I Ar	a:	7		b	b	+	YN→YM	b	YN (YS)	b c
305	I Ar	a:	8	36	b	a	+	YN→YM	b	YN	b c
306	I Ar	a:平	8	34	b	b	+	YN	b a	YN→M	b
307	I Ar	a:	6	40	a	a	+	YN・NN	b	YN・NN→YM	b
308	V Br	a:平	9		b	a	+	YN	b	YN	b
309	I Ar	a:	6	41~45	b	a	+	YN・NN・TN	b	YN・NN・TN→(M)	b
310	I Ar	a:平	7		a	a	+	YN・NN→YM	b a	YN・NN→YM	b
311	I Ar	a:平	9		b	a	+	YN・NN	b	YN	c
312	I Ar	a:平	6	26~30	b	b	+	YN・NN	b a	YN→(M)	b
313	II Ar	a:	7		c	b	+	YN	b	YN	b
314	I Ar	a:平	8	36	c	b	+	YN	b	YN・NN	b
315	I Ar	a:	5	41~45	b	a	+	YN・NN	b	YN→M	b
316	I Ar	a:	8		b	b	+	YN→(M)	b	YN→(M)	b
317	I Ar	a:	7		c	b	+	YN	b	YN	b
318	II Ar	a:平	9	31~35	b	b	+	YN→(M)	b a	YN・NN	b
319	I Ar	b:	9		b	b	+	YN・NN	b	YN・NN	b
320	I Ar	a:内	7	36~40	b	b	+	YN・NN	b	YN・NN→(M)	b
321	I Ar	a:	7		b	b	+	YN		YN	
322	I Ar	a:平	9	28	b	a	+	YN・NN	b	TN・YN	b
323	I Ar	a:	7	26~30	c	a	+	YN	b a	NN	c
324	I Ar	a:	8		a	a	+	YN→YM	b a	YN・NN	b
325	I Ar	b:	10	31~35	b	a	+	YN→YM	b a	YN・NN	b c
326	I Ar	a:	8	51~	c	b	+	YN→(M)	b	YN→M	b c
327	I Ar	a:	7	41~45	b	b	+	YN→M	b	YN→M	b c
328	I Ar	a:平	8	41~45	b	a	+	YN・NN→YM	b	YN→(M)	b
329	I Ar	b:	10		c	a	+	YN→YM	b a	YN→M	b
330	I Ar	a:平	7		c	b	+	YN	b	YN→M	b
331	I Ar	a:平		26~30	c	b	+	YN→M	b c	YN→M	b c
332	I Ar	a:	8	31~35	b	a	+	YN	b c	YN	b
333	I Ar	a:平	6		b	a	+	YN	b	YN・NN	b
334	I Ar	a:内	8		b	a	+	YN	b	YN・NN	c
335	I Ar	a:	8	26~30	a	a	+	YN→M	b	YN→M	b c
336	I Ar	a:内	8		b	a	+	YN・NN→YM	b	(S)→M	c
337	II Ar	a:平			c	a	+	YN・NN	b a	YN・NN	b c
338	I Ar	a:	6	26~30	b	a	+	YN→M	b a	YN→YM	b a
339	I Ar	a:内	5		b	a	+	YN→M	b a	YN→M	b
340	I Ar	a:	8	36~40	b	a	+	YN→YM	b	YN→YM	b
341	I Ar	a:平	5	16~20	b	a	+	YN→YM	b a	YN→M	b
342	II Ar	a:内	6	36~40	b	b	+	YN	b	YN→M	b
343	I Ar	a:平	8	36~40	b	b	+	YN→YM	b a	YN→M	b a
344	I Ar	a:内	6	36~40	b	a	+	YN→M	b a	YN→M	b
345	I Ar	a:平	9	15	b	b	+	YN	b	YN→TM	b a
346	I Ar	a:	10		b	b	+	YN	b	YN→(M)	b
347	I Ar	a:	10	26~30	b	a	+	YN	b	YN・TN	b
348	I Ar	a:	10	40~45	a	a	有文	YN→YM	b	YN→M	b a
349	II C	a:	7	25~30	a	a	+	YN→M	b	YN→M	b
350	I Ar	a:平	9	20~25	b	a	+	YN・M	b	YN→YM	b a

番号	器形	口特	器厚	最大径	胎土	焼成	文様	内面整形法	整形 状態	外面整形法	整形 状態
351	ⅥB ₁	a平	9		b	b	有文	YN→M	b a	M	b
352	ⅢA ₁	a内	9		b	a	+	YN	b c	YN→M	b a
353	ⅢA ₁	a ₂	6	20~25	a	a	+	YN→M	b	YN→M	b
354	ⅢA ₁	a内	9		a	a	+	YN→(M)	b	M	a
355	I A ₁	a内	11	35~40	b	b	+	YN→M	a	YN→M	b
356	ⅢA ₁	b ₂			b	a	+	YN→YM	a	YN→M	b a
357	ⅥB ₁	b ₂	6	15~20	a	a	+	YN→YM	b a	YN	b
358	ⅥB ₁	a ₂	8		b	a	+	YN→YM	b	YNTN	b
359	ⅢA ₁	a平	6		b	a	+	YN→M	b a	YN	b
360	I C ₁	a ₂	5	20~25	b	a	+	YN→M	b a	YN	b
361	I A ₁	a外	9		b	a	+	YN→M	b a	YN→M	b a
362	ⅢA ₁	a平 ²	5		b	b	+	YN	b	YN	b
363	I C ₁	a内	7	35~40	b	a	+	YN→M	b c	YN→M	b
364	I C ₁	a内	8	25~30	a	a	+	YN→M	b a	YN→YM	b a
365	I C ₁	a内	6	20~25	b	a	+	YN→YM	b	YN→M	b
366	I C ₁	a内	9	35~40	a	a	+	YN→YM	b	YN→M	b
367	I C ₁	a内	7	25~30	b	a	+	YN→YM	b a	YN→YM	b
368	ⅢA ₁	a ₂	6		b	a	+	YN→M	b a	YN	b
369	I A ₁	a ₂	7	45~50	b	a	+	YN→YM	b a	YN→YM	b a
370	ⅡA ₁	a内	8	35~40	b	a	+	YN→YM	b a	YN→YM	b a
371	I A ₁	a平	8	35~40	b	a	+	YN→YM	b	YN→YM	b
372	I A ₁	a ₂	9	45~50	b	a	+	YN→YM	b	TNYN→M	b
373	I A ₁	a平 ²	11	30~35	c	a	+	YN→YM	b a	YN	b c
374	I A ₁	a内	8		b	a	+	YN→YM	b a	YN	b
375	I B ₁	a ₂	7	20~25	b	a	+	YN N	b a	YN - NN	b
376	I B ₁	a平 ²	9		b	a	+	YN - YM	b	YN - (M)	b
377	I B ₁	a ₂	8		b	a	+	YN→M	b a	YN	b
378	I B ₁	b ₂	8		b	a	+	YN→M	b a	YN - NN	b
379	I B ₁	b ₂	9	40~45	b	a	+	YN→M	b a	YN	b
380	I A ₁	a ₂	6	20~25	b	a	+	YN	b	YN	b
381	I B ₁	a平 ²	7	30~35	b	a	+	YN	b	YN	b
382	I A ₁	a平	9		b	b	+	YN→YM	b a	YN	b
383	ⅡA ₁	b ₂	5	25~30	b	a	+	YN→YM	a	YN→YM	b a
384	ⅢC ₁	b ₂	6	15~20	b	a	+	YN→YM	b a	YN→YM	b a
385	I C ₁	a内	10		b	a	+	YN→M	b	YN→YM	b
386	I C ₁	a ₂	7		b	b	+	YN	b a	YN	b a
387	ⅡA ₁	b ₂	4	15~20	b	a	+	YN→YM	a	YN→M	b a
388	I C ₁	a外	6	25~30	b	b	+	YN - M	b a	YN	b
389	I C ₁	a外	7	25~30	b	a	+	YN→YM	a	YN	b
390	I A ₁	a平	8	20~25	b	a	+	YN	b	YN→M	b
391	I C ₁	a ₂	6	20~25	b	a	+	YN→YM	a	YN→YM	b a
392	I C ₁	a内	8	20~25	b	a	+	YN	b a	YN→YM	b a

第3章 結語

本書の記述は第2章第2節を除いて、調査終了後まもなくまとめたものであり、当時の生々しい情景を思い浮かべるも、米山團長をはじめ各調査員にたいし申し訳ないと思っている。本書の刊行をもってお許し願いたいし、旧年の原稿を修正することなくそのまま提示したことにたいしても、研究者としての研究過程でのもととして評価しているのでご容赦願いたい。

さて本調査は、水との斗いの調査であったことと緊急性もあったので無我無中の実施されたことは調査日誌でご理解いただけると思う。それ故に、もっと異なった方法でとご批判あろうと存するが、今ふりかえり、資料が思いもかけなかったものだけに反省している。そして出土遺物についても初めて接するものが多く、整理にどう対応してよいかわからないまま現在に至ったのが実情である。幸いこの点、百瀬新治君が意欲的にこの問題を追求してくれ、本書をようやくここにまとめることができた。

以下調査結果をもとに理解している範囲でまとめてみたい。

遺跡立地 近年縄文時代後・晚期の遺跡の調査が序々に増えつつあり、それらの結果をみると、土器集積を主とする遺跡は、より河川に近くそして小規模なものになっているようである。本遺跡も聖川氾濫原の端部に位置し、現存の聖川河床とほぼ同じで、河川により近づいた遺跡と見ることができる。しかしこれ程河川に近い位置(聖川の遺跡形成時の流路は定かでないが、南北の山麓間は約350mにすぎない)にありながら、何故に湧水ある湿地點の狭い陸化した部位に形成されたのであろうか、そして通常の遺跡が南斜面上にあるのに対し、篠山北山麓下にある。これらは飲料水が確保でき、住むに日当りが良く、そして食糧が確保できる位置にある通常の遺跡とは趣きを異にしている。飲料水の問題は是としても、動物の通過地点一水飲場一とするならどうしてあれ程の灰層・獸骨等の人為的な遺物を残したのだろうか。

灰層 純粹に近いⅥ層の25cmに及ぶ程の厚い堆積がある。この間わずかの間層も確認されていない。これだけの灰層を形成するのに、いったいどの位の燃料をもやし続けたのであろいか、想像もつかない。そして間層をはさみながらも、4層の灰を含んだ層が確認され、この遺跡の初期形成の獸灰層は、中心部で28cmの堆積で3.5mの円形状に散布している。狭い範囲であるが、これもまた燃料消費はⅥ層にまさるともおとらない量にのぼる。これもまたいかなる理由によるものだろうか。一言でまとめるに、祭祀的要素をもった継続する一時的キャンプ地と想定している。

遺物出土状態 土器片・大き目の獸骨は灰層中央付近には認められなく、すべて灰層外縁からの採集である。採集というのは、たびたび述べてきた。上からの湧水と秋雨そして聖川の伏流水によるとと思われる地下水により遺物集中出土地点は常に水に浸っていたため手さぐりにより遺物を検出したということである。ことほどきようには、ほとんどの遺物がこの位置で、それ

も南・東方向から大部分を得ている。その出土状態は破片でのもので、手さぐりで確認したものであり、この出土状態に誤りはないものと思う故に、完形品が残在していた可能性はないものと考えている。また歯骨はこの土器に混ざって検出されたものの鹿の頸骨 2 点・角 1 点とタヌキのそれが 1 点の計 3 点にすぎず、それもタヌキの下顎骨が明瞭に頭部付近では、わかる程度で、鹿のものは小破片で宮尾先生の鑑定ではじめて判明したというものである。猪のものは牙が 1 点のみで、鹿と同様頭骨を見い出せない。そして出土部位では脚・腕を中心とする所謂四足骨を中心としたものである。即ちこの地はこれらを捕獲した場所ではないことを意味しており、捕獲地で頭部・胴部が解体離別され、肩から前脚及び腰から後脚付近をこの地に持ち帰り、食に供したものと推定される。この他自然遺物は土器と同様な採集であったので、この遺跡・遺構に関与するものとの根拠はない。第Ⅲ～Ⅳ層より多く見られたもののこの層を除去した後、下部灰層を水洗した中に同種と思われる果皮が残存していたので一概にはうむりきることはできない。たぶんにこれらをも食していた可能性がある。

土器 繩文時代中期後葉から弥生時代後期のものまで認められる。その量は縄文時代中・晚期及び弥生時代後期のものは数点から十数点にすぎなく、その大勢は縄文時代後期のものである。ただし弥生時代前半のものは認められない。縄文時代後期中葉及び後葉の土器が多いようで、加曾利式及び後続する後期後半安行 I 式に併行する土器群である。それに東海地方及び関東地方の土器が強い影響を与えていた。そして後期の後葉から晩期にかけて東海系の土器の影響がより強くなっていく傾向が認められるようである。

石器 生産具としての石器は、灰層等の遺構にたいしあまりにもみすばらしい。総数 4 点にすぎなく、そして石器造りの際である剝片もほとんどない。これ故にこの地は生産・居住の地でないことがうかがわれる。

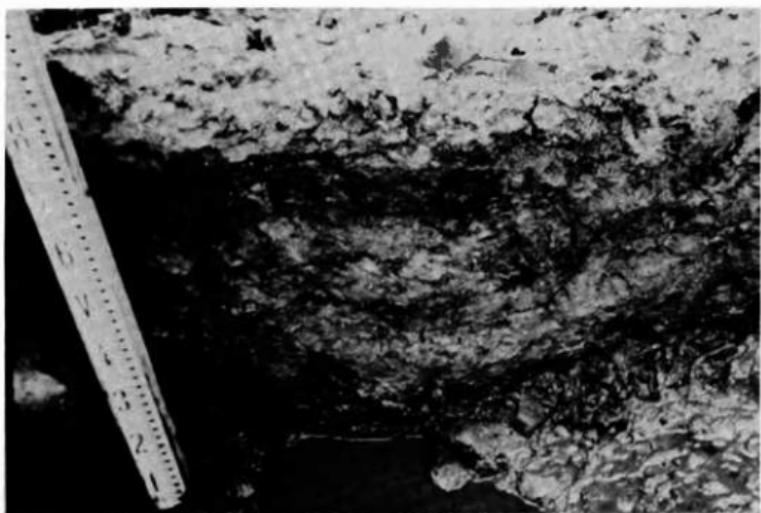
この他骨角器・歯骨・自然遺物については本章及び各節にて述べてあるので割愛する。

以上の要約をもって稿了としたいが遺跡の立地状況、遺物の出土のあり方等に多くの問題点を提起した大清水遺跡も今は灌漑池となっており、発掘以来 8 年の年月の経過を感じざるを得ない。近年調査遺跡が増加し、その内容が判明しつつある千曲川水系縄文後・晩期研究の資料として役立てていただければ調査員一同にとってこれ程の喜びはない。

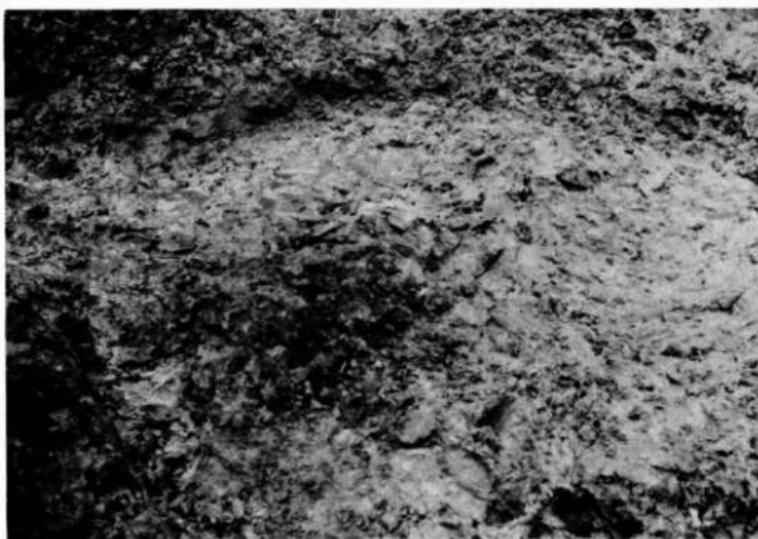
(矢口忠良)



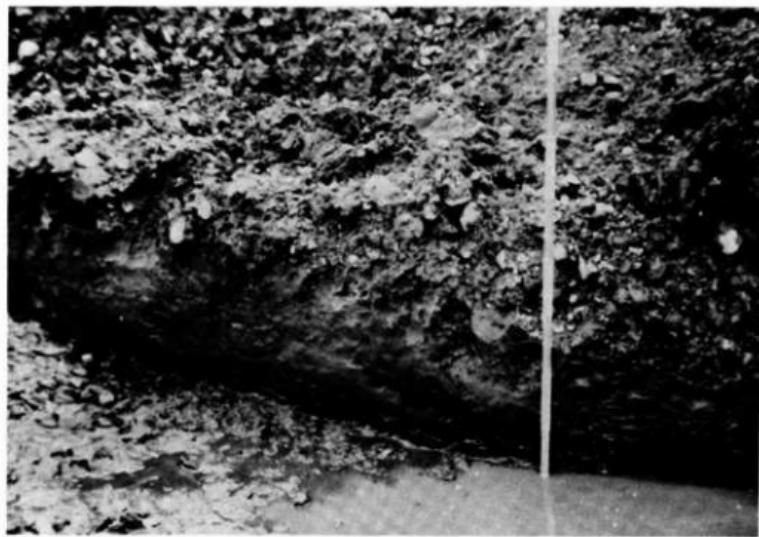
遺跡遠望(北より)



灰層(中央部)



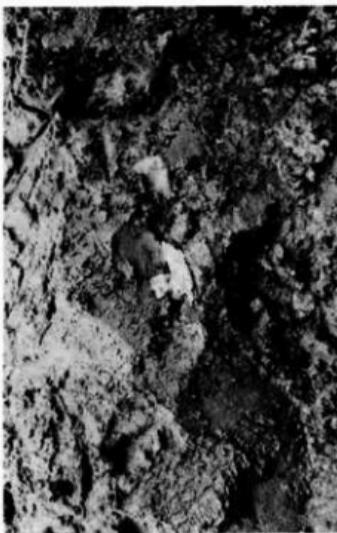
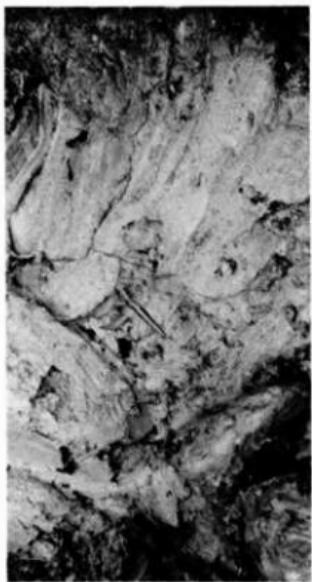
灰層表面



灰層(東端部)

第三図版 造物出土状態

骨 针



骨 片

土 器



土 器

陶 器

第四図版 調査スナップ



長野市の埋蔵文化財 ※ 第1集『信濃長原古墳群』
※ 第2集『浅川西条』
※ 第3集『中村遺跡』
※ 第4集『塙崎遺跡群』
※ 第5集『塙崎遺跡群(2)』
※ 第6集『三輪遺跡』
『付水内坐一元神社遺跡』
※ 第7集『田中沖遺跡』
※ 第8集『蘿ノ井遺跡群』
※ 第9集『四ツ屋遺跡(第1～3次)』
『袖間遺跡』
『塙崎遺跡群(第3次)』
※ 第10集『湯谷古墳群』
『長札山古墳群』
『駒沢新町遺跡』

※印 品切れ

長野市の埋蔵文化財第11集

箱清水遺跡
大峯遺跡
大清水遺跡

昭和56年3月20日印刷

昭和56年3月31日発行

編者 長野市教育委員会

発行人

印刷所 長野市西和田470

信毎書籍印刷株式会社